

平成27年度指定

スーパーグローバルハイスクール

## 研究開発実施報告書

第5年次



令和2年3月  
横浜市立南高等学校

## はじめに

横浜市は、今年開港 161 年目を迎えます。ホテル、ビール、ガス灯、競馬、石鹼等々、日本では横浜が発祥とされる事象は数多くありますが、開港以来、経済や文化の国際的交流シーンにおける日本の「顔」の一つとして、横浜が古くから発展を続けてきたことの象徴でもあります。

横浜市歌に「むかし思えば とま屋の煙 ちりりほらりと立てりしところ」であった横浜村が「果てなく栄えて行くらんみ代を 飾る宝も入りくる港」と謳われる国際都市横浜で、創立六十有余年の歴史を刻む本校は、平成 24 年度に併設型中高一貫教育校として、より高いステージに向けての新たなスタートを切りました。また、平成 27 年度、スーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受けたことにより、本校教育課程の一つの柱として、これまで以上にグローバル教育の推進を位置づけ、その開発と改善を図ってきました。多様な文化や価値観を受容してグローバルな視点で課題をとらえ、解決策を提案する力を身につけ、世界に貢献できる志の高いグローバル人材の育成を目指しています。

指定 5 年目、令和元年度は、指定最終年度ということもあり、自立自走を前提とした、次年度からの「SGH後継カリキュラム」の編成を見据えながらの 1 年間でした。総合的な探究の時間(TRY&ACT)における種々取組や諸活動を、少しずつ改善しながら進めつつ、その一つ一つの意義や意味を問い直す作業を繰り返しました。4 年間の成果と課題を整理することから始め、学校教育目標と照らし合わせながら、育成を目指す資質・能力や生徒像について、担当セクション職員を中心に、あらためて協議・共有し、本校教育課程の大きな柱である、総合的な探究の時間のカリキュラム・デザインを試みました。

具体的には、ベースとなる考え方やカリキュラムは踏襲しながらも、現行のカリキュラムを「SDGs(持続可能な開発目標)」の視点でとらえ直してみることにしました。平成 30 年 6 月、横浜市は、内閣府地方創生室が募集していた「SDGs 未来都市」及び「自治体 SDGs モデル事業」に選定され、あらゆる施策において SDGs を意識した取組の推進を始めています。そこで、横浜市との連携も視野に、SDGs を新たな基軸に加え、従前の研究活動を工夫・改善しつつ、探究の深化が図れるような取組を推進するため、「17 のゴール(目標)」に象徴される SDGs の考え方を生徒と共有しながら、今年度の活動の中でも進めています。

結びとなりますが、本校の SGH 事業推進のためにご指導ご助言いただいた大学、企業、NPO 等の皆さま、情報交換等で交流させていただいた SGH 関係校の皆さま、また本校の SGH の取組が進むべき道をご指導いただいた運営指導委員の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

ここに、本校の指定 5 年目、最終年度となった令和元年度 1 年間の成果を報告書としてまとめましたのでご覧ください。

令和 2 年 3 月

横浜市立南高等学校  
校長 三浦 昌彦

## 目 次

(ページ)

はじめに	1
1. 事業概要	3
2. 令和元年度研究開発事業実施報告（要約）	6
3. 研究開発事業別活動実績	
(1) 年間日程表	8
(2) 1年生 TRY & ACT	9
(3) 1年生 シンガポール海外イマージョン研修	18
(4) 1年生 グローバルビレッジ研修	24
(5) -1    2、3年生 グローバルリーダープロジェクト (GLP)	
新潟国内イマージョン研修	25
(5) -2    1年生 新潟国内イマージョン研修	28
(6) 2年生 TRY & ACT	33
(7) 2年生 グローバルリーダープロジェクト (GLP)	36
(8) 2年生 GLP ベトナム海外イマージョン研修	40
(9) 3年生 TRY & ACT	47
(10) SGH 研究発表会	48
4. 振り返りシート・ループリック評価・アンケートの集計・分析	55
5. SGH の取組を通しての成長の記録	61
6. 教育課程表	79

## 1. 事業概要

### 実施期間

平成31年4月1日（契約締結日）～ 令和2年3月31日

### 指定校名

学校名 横浜市立南高等学校

校長名 三浦 昌彦

### 研究開発名

「国際都市横浜発 次世代ビジネスリーダーの育成」

### 研究開発概要

#### (1) 研究開発の狙い

国際都市横浜に立地するグローバル企業や国際機関の支援を得て、貧困や資源開発、環境保全など、東南アジアの課題解決を目的としたソーシャルビジネスを構想する課題研究等を通して、創造力を持つ志の高いグローバル人材を育成する。

#### (2) 中高一貫教育校における学習のフレームワークと SGH 研究開発の位置づけ

本校は、知性・自主自立・創造の教育理念のもと、国際社会で活躍するリーダーを育成する中高一貫教育校として平成24年に附属中学校を開校した。

さらに平成27年に SGH の指定を受け、6年間の教育課程の中に通常の各教科別学習とは別に、新たにグローバルな課題研究に取り組む総合的な学習の時間のカリキュラムを編成した。

問題発見解決能力、コミュニケーション能力、提案力等を育成するために、グローバル企業や大学、国際機関の支援を得ながら、国際的な課題について調査研究し、解決の糸口を見つけ、将来の進路を模索する内容とした。

また、海外姉妹校との交流、海外留学、海外研修などを効果的に組み合わせることにより、異文化理解、国際感覚、英語力などの向上を図った。

#### (3) 管理機関による事業の管理

##### ①管理機関名：横浜市教育委員会

責任者名：教育長 鯉淵 信也

##### ②事業の管理

運営指導委員会を年3回開催し、外部有識者からも指導・助言を受けることで、よりの確な教育内容の効果測定や検証を行い、事業の充実を図った。

##### 【運営指導委員会の構成】

- ・管理機関 指導主事1名、担当係長1名、職員1名
- ・高校 11名（校長、副校長、国際企画部主任、他担当教諭7名）
- ・運営指導委員（敬称略）

金谷 憲 （東京学芸大学名誉教授）

坂野 慎二 （玉川大学教育学部教授）

高木 展郎 （横浜国立大学名誉教授）

田澤 慶暁 （元電通パブリックリレーションズ執行役員）

（元明治大学附属中野中学・高等学校及び

中野八王子中学高等学校常勤理事）

遠藤 毅 （日揮株式会社経営統括本部広報・IR部長）

平田 ケンドラ （シティネット横浜プロジェクトオフィス事業課長）

#### (4) 支援機関

各カリキュラムを実施する際に、次の企業、大学、国際機関の指導、助言があった。

##### ① 各種機関

- ・横浜市温暖化対策統括本部 SDG s 未来都市推進課
- ・ヨコハマ SDG s デザインセンター
- ・独立行政法人 国際協力機構 (JICA)
- ・独立行政法人 日本貿易振興機構 (JETRO)
- ・公益社団法人 青年海外協力協会 (JOCA)
- ・公益財団法人 神奈川県産業振興センターよろず支援拠点
- ・国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構 (JAXA)
- ・アメリカ航空宇宙局 (NASA)
- ・アメリカ大使館
- ・一般財団法人ウィルドア

##### ② 大学

- ・公立大学法人 横浜市立大学
- ・国立大学法人 東京大学
- ・国際大学 (新潟)
- ・慶應義塾大学

##### ③ 企業

- ・株式会社 LbE Japan
- ・日本アイ・ビー・エム株式会社
- ・株式会社日本政策金融公庫
- ・株式会社三崎恵水産
- ・花王株式会社
- ・株式会社 Criacao (クリアソン)
- ・大東建託グループ
- ・株式会社日立製作所
- ・株式会社三菱ケミカルホールディングス
- ・ライオン株式会社

##### ④ シンガポール海外イマージョン研修時の現地支援機関

- ・MEGUMI F&S SINGAPORE PTE LTD (まぐろ問屋 三崎恵水産)
- ・ALPS LOGISTICS(S) PTE LTD (アルプス物流シンガポール)
- ・Tokio Marine Insurance Singapore Ltd. (東京海上日動シンガポール)
- ・NTA TRAVEL (日本旅行) (SINGAPORE) PTE. LTD
- ・NEC Asia Pacific PTE.LTD

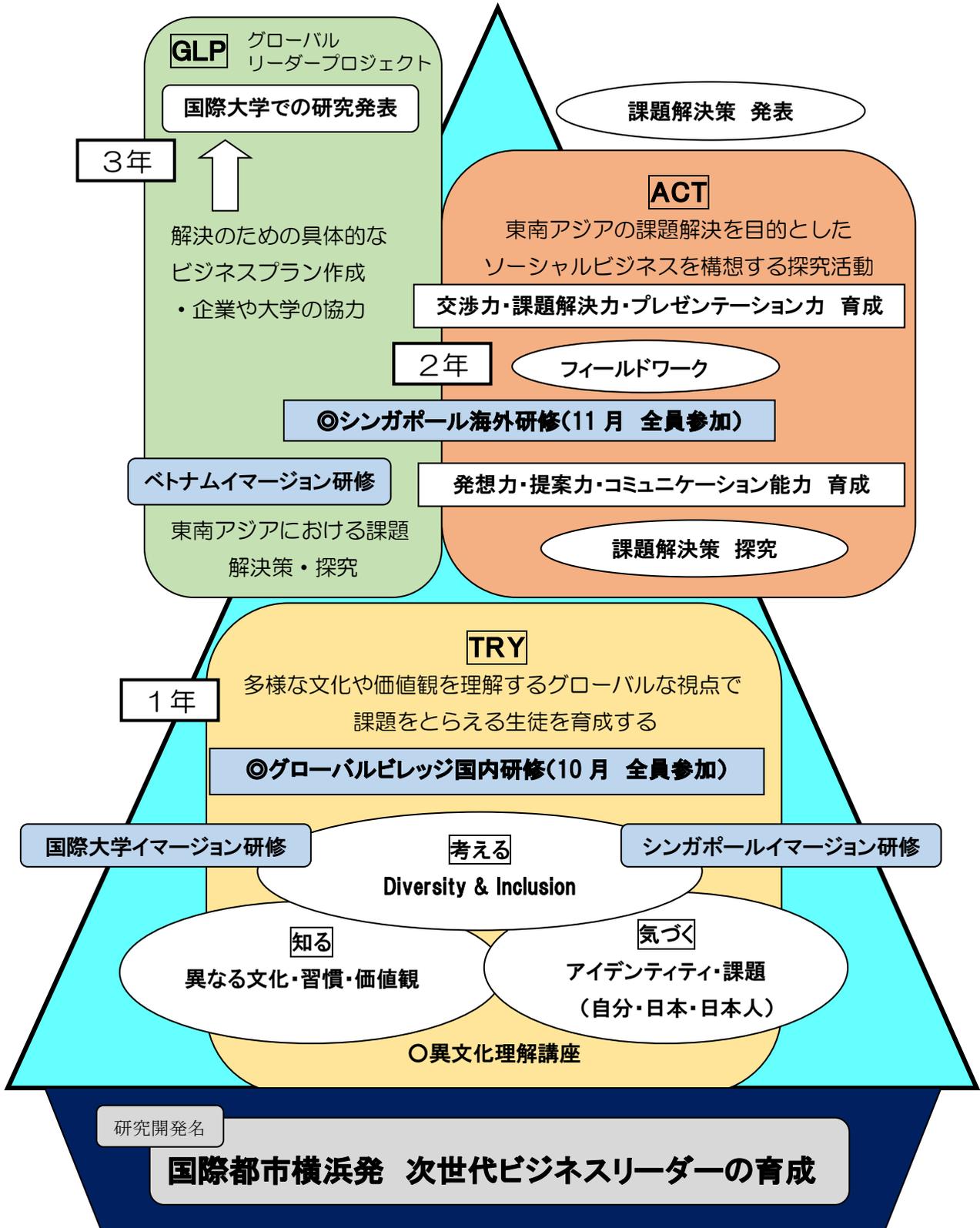
##### ⑤ ベトナム海外イマージョン研修時の現地支援機関

- ・公益社団法人 青年海外協力協会 (JOCA)
- ・在ホーチミン日本国総領事館  
(CONSULATE CENERAL OF JAPAN IN HO CHI MINH CITY)
- ・ホーチミン日本商工会議所  
(The Japanese Chamber of Commerce & Industry in Ho Chi Minh City)
- ・AJINOMOTO VIETNAM CO., LTD. (ベトナム味の素社)
- ・カンザー国立公園運営会社
- ・公益財団法人国際緑化推進センター マングローブ植林行動計画

#### (5) SGH 概念図

本校における SGH 研究開発活動の概念図 (次ページ参照) を作成し、関係者一同で共有している。これにより、それぞれの取組が研究全体のどこに位置し、どのようなつながりがあるかを共通理解したうえで指導にあたっている。

# 創造力ある志の高いグローバル人材の育成



## 2. 令和元年度研究開発事業実施報告（要約）

### （1）研究開発計画

#### ①目標

教育課程の開発と改善を図り、生徒が多様な文化や価値観を理解するグローバルな視点で課題をとらえ、探究活動を通して、解決する力を身につけ、創造力ある志の高いグローバル人材の育成をめざす。

#### ②実施規模

カリキュラムの分類	第1学年	第2学年	第3学年
総合的な探究の時間（毎週木曜日7校時）	全194名		
総合的な学習の時間（毎週木曜日7校時）		全192名	全194名
TRY&ACT（土曜講座、ワークショップ等）	全194名	全192名	
グローバルビレッジ研修（校外宿泊研修）	全194名		
シンガポール海外研修B&S		全192名	
シンガポール・ベトナム海外イマージョン研修	選抜8名	選抜8名	
国際大学国内イマージョン研修	選抜25名	選抜6名	選抜14名
GLP（グローバルリーダープロジェクト）		選抜12名	選抜12名
SGH 研究発表会 11月	全194名	全192名	全194名
SGH 研究発表会 1月	全194名	全192名	

### （2）活動内容と検証・評価・改善点の概要

全教職員体制で同一目標を目指し、指導計画（Plan）、生徒一人ひとりの探究活動・成長過程の観察記録・指導記録（Do）、評価シート・ループリック（Check）を対話と校内LANシステムを利用して共有し、指導改善（Action）を繰り返して生徒の成長を促した。生徒は、主体的に課題を発見して探究し、互いの対話、教職員との対話、校外の連携機関や外国人ファシリテーターとの対話を重ね、振り返りシートや報告書を作成することで、深い学びに繋がることのできた。

これらの相乗効果で定期的な検証・評価が可能となり、研修カリキュラムの見直しにつながっている。

### （3）成果の発表と普及

#### ①令和元年7月13日（土）国内イマージョン研修

会場：国際大学（新潟県）

発表者：3年生 GLP（グローバルリーダープロジェクト）14名

発表補助：2年生 GLP 6名

講評：国際大学外国人教授、外国人ファシリテーター

内容：グローバル課題を解決するビジネスプラン研究発表

#### ②令和元年8月22日（木）日本政策金融公庫主催 神奈川県高校生ビジネスプラン発表会

会場：横浜市立中央図書館ホール

発表者：2年生 GLP（グローバルリーダープロジェクト）12名

講評：神奈川県よろず支援拠点コーディネーター

内容：ビジネスプラン研究発表

#### ③令和元年9月19日（木）横浜市立南高等学校海外・国内イマージョン研修報告会

発表者：海外・国内イマージョン研修参加者

参加生徒：1、2年生全員

内容：1年生シンガポール海外イマージョン研修報告

2年生ベトナム海外イマージョン研修報告

2、3年生 GLP 国内イマージョン研修（国際大学）報告

- ④令和元年 11 月 8 日（金） 横浜市立南高等学校 SGH 研究発表会  
 発表者：1、2 年生全員  
 参加生徒：1、2、3 年生全員  
 講評：横浜市立大学教授・准教授 5 名  
 参観者：SGH 指定校教員、企業教育活動協力者、保護者、平成 30 年 3 月卒業生 5 名（助言）  
 内 容：TRY&ACT 取組説明  
 1、2 年生全員 課題研究（TRY&ACT）ポスターセッション  
 1 年生シンガポール海外イマージョン研修報告  
 2 年生ベトナム海外イマージョン研修報告
- ⑤令和元年 12 月 22 日（日）文部科学省主催「SGH 全国高校生フォーラム」  
 発表者：2 年生 GLP の代表チーム「ますだぶる」2 名  
 会場：東京国際フォーラム  
 内 容：全国の SGH 指定校・アソシエイト校等の代表生徒が、英語でのポスターセッションやディスカッションを通して、SGH として取り組んでいるグローバルな社会課題・ビジネス課題の解決や提案について英語で発信した。
- ⑥令和元年 12 月 25 日（水）日本政策金融公庫主催 全国高校生ビジネスプラン Best10 と Best100 入賞者、Best100 相当奨励者研究発表会  
 会場：横浜市立中央図書館ホール  
 発表者：2 年生 GLP 代表者「ますだぶる」2 名、「石川さんと小林さん」2 名、「Earth うずまき & ファイア」2 名  
 講評：神奈川県教育委員会、慶応義塾大学、神奈川県よろず支援拠点コーディネーター  
 内容：表彰式と研究発表
- ⑦令和 2 年 1 月 12 日（日）日本政策金融公庫主催「高校生ビジネスプラングランプリ」最終審査会  
 応募総数：全国 3,808 件  
 参加生徒：2 年生 GLP 6 チーム 12 名、1 年生 1 名が応募  
 最終審査会発表者：2 年生 GLP 代表 「ますだぶる」2 名（全国 Best10）  
 最終審査会会場：東京大学  
 講評と助言：財務副大臣、内閣府政策統括官、武蔵大学  
 内 容：高校生の起業力向上を目的とする全国の高校生を対象としたビジネスプラン・グランプリにおいて、課題解決力、実行力、発表力を身につけるため、東南アジアの課題解決と国際協力のためのビジネスプランを作成して研究発表を行った。  
 事前指導：横浜市立大学、慶応義塾大学、日本政策金融公庫、リコー  
 審査結果：2 年生 1 チームが全国 BEST10、他の 2 年生 1 チームが全国 BEST100 に選出された。
- ⑧令和 2 年 1 月 23 日（木） 横浜市立南高等学校 SGH 研究発表会  
 発表者：2 年生 GLP 6 チーム 12 名、1 年生国内イマージョン研修参加者 25 名  
 参加生徒：1、2 年生全員  
 内 容：2 年生 GLP 6 チーム研究発表  
 1 年生国内イマージョン研修（国際大学）報告
- ⑨令和 2 年 3 月 25 日（水）横浜市教育委員会主催 横浜市立高等学校課題探究発表会  
 新型コロナウイルス感染症に対応した臨時休業措置のため中止

### 3. 研究開発事業別活動実績

#### (1) 年間日程表

創造力を持つ志の高いグローバル人材を育成するため、東南アジアの課題解決を目的としたソーシャルビジネスを構想する課題研究等を、以下の研修のほかに、毎週木曜日の7校時の1年生「総合的な探究の時間 TRY&ACT」、2年生「総合的な学習の時間 ACT」として行った。

学年 月	1年生全員	2年生全員 GLP (2、3年生より選抜)
4月	○オリエンテーション ○IBM企業講座	○オリエンテーション
5月	○「デザイン思考」講座ワークショップ ○アメリカ大使館外交官講座	○「デザイン思考」講座ワークショップ ○GLP「ビジネスプラン作成」講座
6月		○国際大学異文化コミュニケーション講座 ○GLP リコー企業研修
7月	○SGH 研究発表会へ向けての3学年合同 情報交換会 ○JAXA 筑波宇宙センター研修 希望者10名	○GLP「ビジネスプラン作成」講座 ◎国内イマージョン研修(国際大学) 2年生GLPと3年生GLPが参加 3年生GLP研究発表会(国際大学) 英語でプレゼンテーション ○GLP 横浜市立大学連携講座
8月	○シンガポール海外イマージョン研修 選抜8名	○GLP ビジネスプラン作成、企業研修 ○GLP ベトナム海外イマージョン研修 選抜8名 ○GLP 研究発表会(県よろず支援拠点) ○GLP ハワイの高校とテレビ会議
9月	○JOCA SDGs 講座 ○海外イマージョン研修合同報告会	○GLP ビジネスプラン作成 ○海外イマージョン研修合同報告会 ○GLP ビジネスグランプリ プラン提出
10月	○グローバルビレッジ研修 ○IBM 講座 ○NASA 宇宙開発講座	○シンガポール海外研修 B&S フィールドワ ーク 2年生全員 ○GLP 横浜市立大学連携講座
11月	○国内イマージョン研修(新潟国際大学) 選抜25名 ◎SGH 研究発表会 1年生全員 「文化の違う人たちと一緒に仕事をする には」 ○企業講座複数企業によるワークショップ	◎SGH 研究発表会 2年生全員 「東南アジアにおけるビジネスアイデアを 提案する」
12月	○SDGs 講演会	◎SGH 全国高校生フォーラム 2年生GLP 県研究発表会
1月	○東南アジア研究 ◎SGH 研究発表会 1年生25名 国内イマージョン研修報告	○高校生ビジネスプラングランプリ 2年生GLP 全国 Best10 入賞 ◎SGH 研究発表会 2年生GLP12名 「東南アジアの現状からビジネスプランを たて、起業に向けた行動計画を提案する」
2月	○報告書作成、提出	○研究論文作成
3月		○研究論文提出 ◎横浜市立高等学校課題探究発表会(中止) 2年生GLP

◎は、研究発表の取組を示す

## (2) 1年生 TRY&ACT

南高校附属中学校の総合的な学習の時間 EGG で培ったコミュニケーション力、論理的思考力を土台に、Diversity & Inclusion、ビジネスの手法を身につける TRY と、SDGs 研究を通して課題を発見し、課題解決をめざした実行力を養う ACT の探究活動を通して、国境を越えて主体的に協働する力と、課題発見力、課題解決力、実行力を育成した。毎週の総合的な探究の時間のグループ探究を

主軸に、デザイン思考講座、企業講座、グローバルビレッジ研修等を実施した。また、年間数回の取組の区切りにおいて、ルーブリックに基づく生徒の探究活動と発表の評価を行い、達成度を数値化した。この情報を教職員で共有して指導方針を修正し、生徒の探究力、表現力等の向上を図った。

次に年間活動スケジュールと主なプログラムの内容を記載する。



### 年間活動スケジュール

TRY	4月18日(木)	異文化発見・理解ワークショップ
	4月20日(土)	IBM 講座「異文化理解と協働、グローバル課題の背景の探究」
	4月25日(木)	(異文化協働) 文化の違いから生じる課題
	5月16日(木)	米国外交官講座 グローバルな視点を持つ
	5月25日(土)	一般社団法人ウィルドア「デザイン思考」
	5月30日(木)	(異文化協働) 文化の違いから生じる課題
	6月6日(木)	(異文化協働) についてポスター制作
	6月13日(木)	(異文化協働) についてポスター制作
	6月20日(木)	SDGs 資料を参考に、グループで扱うグローバル課題設定
	7月11日(木)	★3学年合同 TRY & ACT 情報交換会
	7月16日(火)	夏休みに行く SDGs 課題について情報収集の方法を考える
	8月29日(木)	「情報収集」した結果をチーム内でシェア、ポスター考案
	9月12日(木)	GV(グローバルビレッジ)事前学習 JOCA「SDGs への取り組み」
	9月19日(木)	★イマージョン研修報告会① 学びを共有する
	9月26日(木)	GV 事前学習
	10月3日(木)	GV(グローバルビレッジ)青年海外協力隊の体験と SDGs[宿泊研修]
	10月4日(金)	GV 外国人講師による異文化体験、ポスターセッション [宿泊研修]
	10月10日(木)	GV を参考に課題の解決策を考え、ポスター制作
	10月19日(土)	IBM 講座 異文化協働・SDGs 課題ポスター発表 社員の講評
	10月24日(木)	ポスター制作、発表練習。
	10月30日(水)～	発表準備・発表練習 11月6日(水)まで
	11月7日(木)	発表準備・発表練習
	11月8日(金)	SGH 研究発表会(全体)
11月14日(木)	発表を振り返り、TRY のまとめをする。	
ACT	11月16日(土)	企業講座
	12月5日(木)	横浜市 SDGs 講演会「SDGs への取り組み」
	12月12日(木)	SDGs 研究 SDGs マッピングで記事分析
	1月9日(木)	SDGs 研究 SDGs の根底にある課題を探究
	1月16日(木)	SDGs 研究 SDGs の根底にある課題を探究
	1月23日(木)	SGH 研究発表会(GLP) ・国内イマージョン研修報告会
	1月30日(木)	SDGs 研究 SDGs 行動計画発表 レポート作成
	2月6日(木)	SDGs 研究 レポート提出

	IBM 企業講座1 ダイバーシティ&インクルージョン
1 日時	平成 31 年 4 月 20 日 (土)
2 場所	1 年 1 組～3 組 教室
3 参加者	1 年生 194 名
4 講師	株式会社日本アイ・ビー・エム 大津 真一氏 ほかに本社員 6 名
5 内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバル企業 IBM の紹介。IBM 国際貢献活動 (CSC) として、多国籍社員による、違う文化を持つ人々と一緒に途上国で仕事をした体験談を聴く。</li> <li>・多国籍チームでの協働を想定し、ビジネスで課題解決する方法を演習する。</li> </ul>
6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界で貢献するには、自分の意見をしっかりと表現できることが必要だと知った。</li> <li>・ダイバーシティを尊重する中で、文化の違いが新しい価値観を生むことを学んだ。</li> <li>・情報収集の仕方、課題解決のための考え方を今後に生かしていきたい。</li> <li>・他国の人とともに仕事をするには、自分のことを知ってもらうことが大事だと思った。</li> <li>・多国籍チームで働くにはルールをつくり、相手の視点で見ることが大切だと思った。</li> <li>・課題に取り組む積極性と、臨機応変に対応する柔軟性が必要だと知った。</li> <li>・相手の文化や考え方を受け止め、「主張と尊重」のバランスに気を付けようと思った。</li> <li>・グローバルな仕事を具体的に知ることができた。異文化に興味が出てきた。</li> <li>・インドの文化が面白いと思った。コミュニケーション能力が大切だと感じた。</li> <li>・英語がうまくてもコミュニケーションがうまくいくわけではないと知った。</li> <li>・ダイバーシティは認めるものだけでなく、活用するものだということが分かった。</li> <li>・デザイン思考を使って、課題を見つけたり考えたりしていきたい。</li> <li>・世界の人と仕事をするとき、互いに尊重し合うことが大切だと思った。</li> <li>・グローバルな視点、相手の視点を持つことが大切だとわかった。</li> </ul>

	アメリカ国務省外交官講座
1 日時	令和元年 5 月 16 日 (木)
2 場所	1 年 1 組～5 組 教室
3 参加者	1 年生 194 名
4 講師	アメリカ国務省職員 3 名、外交官 6 名
5 内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米国国務省日本語研修所で日本語を研修中の現役外交官を招へいし、これまで赴任した世界各国での体験談や自身のこれからの日本やアジアでの任務についての話を聞いた。</li> <li>・各クラスに一人ずつ外交官が担当し、英語や日本語によるプレゼン形式や対話形式など、それぞれのスタイルで進めた。</li> </ul>

	デザイン思考ワークショップ
1 日時	令和元年 5 月 25 日 (土)
2 場所	1 年 1 組～5 組 教室
3 参加者	1 年生 194 名
4 講師	一般社団法人ウィルドア 講師 8 名、卒業生 8 名
5 内容	<p>デザイン思考を用いて、社会問題を発見し、解決するアイデアを策定する。卒業生がアシスタントとして加わり、生徒の助言にあたった。</p> <p>まず課題を自分事として認識するために、今起きつつある社会変化に関する講義を通して、社会の成員としての自覚を持ち、課題に対する当事者意識を持つ。その上で課題解決に取り組む際の仮説設定・検証を繰り返す方法論についてデザイン思考を通じて学び、大学生へのインタビューや図書館での文献調査、ネットでの先行事例研究などを行い、できるだけ自分の足で一次情報ソースを収集して、各社会的課題への理解やそこで困っている人への共感を目標とする。インタビューや文</p>

	<p>献で集めたファクト・ステークホルダーをシステム図にて整理し、社会的課題をクリティカルに解決できるターゲットを決定し、その解決すべきターゲットのニーズを定義する。最終的に、解決すべき問題を定義し、具体的な解決仮説を策定するところまでを本ワークショップにて行う。</p>
6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報を見聞きするだけでなく、実際に当事者になってみて、その人の気持ちを考えることで新たなアイデアが生まれることがわかった。</li> <li>・5つのステップを大事にして、お客さんにとって使いやすいものを見つけていくことが大切だと思った。実用性を持つもの考えるのが大変だった。</li> <li>・デザイン思考➡「デザインを出す」ことから考えるのではなく、そのものの必要性から考えることが大切だと知った。</li> <li>・自分たちで考えて、「こういう人にはこういうものが必要」というのを通し、新しいものを作るのがすごく楽しいということに気づいた。</li> <li>・実際に疑似体験をするといったデザイン思考の段階を踏んだことでより課題解決力が身についたと思う。</li> <li>・一つのテーマであってもそこから誰に対するものなのか、などを明確にすると全く違う意見や問題点が出てくるので、視点の方向を決めることが大事だと思った。</li> <li>・デザインするときには「相手の立場に立って考える」ことが大切なのだとよくわかった。また、ただ相手の顕在意識だけを考えてつくるのではなく、オブザーバー側から見て気づいたことをもとに潜在意識を見つけ、考えていくことも大切だった。</li> <li>・どんどん意見を出すことで、決めやすくなったり意見が広がりやすくなった。質より量というお話しにとっても共感できたし、潜在意識の引き出し方も納得できた。</li> <li>・ユーザーに寄りそったものやサービスを考えるときには、実際にユーザーに共感するために体験をすること、ユーザーの潜在意識に気づくためによく観察することが大切だと学んだ。</li> <li>・試作品を何度も作り改良を繰り返すことでその対象となる人のニーズに答えられることがわかった。</li> </ul>

	<p>中学の時の職業体験振り返り</p>
1 日時	<p>令和元年6月6日(木)</p>
2 場所	<p>1年1組～5組 教室</p>
3 参加者	<p>1年生 194名</p>
4 内容	<p>キャリア教育の一環として、グループごとに、高校から入学した生徒が中学校で行った職場体験を、附属中学校から入学した生徒に話し、「働く」ということについての理解を深めた。</p> <p>そのうえで今後、ビジネスの手法で横浜市や世界のSDGs課題を解決するビジネスプランを考える基盤とした。</p>
5 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2年前のことなのに、詳細にかつ楽しそうに話をしてくれて、一生懸命やったことはちゃんと心に残るんだと思った。</li> <li>・コミュニケーション力が大切なんだとわかった。</li> <li>・相手をよく知ることが重要なことになる。</li> <li>・協働することにより、一人で働くよりもよりよい環境に感じるようであった。</li> <li>・積極的に行動することや、すぐ状況を理解しそれにあった行動を考えることが大切なことに気づいた。積極的に人と関わることを覚えた。</li> <li>・物事を様々な方向から見ることの大切さを改めて感じた。</li> <li>・日々学校や家で言われていることが将来働くうえで大切だと気づいた。</li> <li>・他人の意見を受け入れ、吸収する力が自分には欠けているので、気をつけたい。</li> <li>・自分がやってきたことを説明することで、改めて職場体験を振り返ることができた。職場体験の日にできなかったことを今考えればこうすれば良かったのではないかというカタチで振り返ることができた。</li> <li>・社会に出ると自分の言動に責任を持たなければならない、世間は厳しいのだと感</li> </ul>

	じた。 ・働くことは単にお金を稼ぐためではなく、いろいろな人が安全、安心に生活できるように貢献することではないかと思う。 ・接客をする際には1人1人誠実に対応していくことが大事だと学んだ。 ・看護師は人の命を預かっているから、細かいところで気を付けることが大切なんだと感じた。
--	---

	<b>TRY 選択講座 JAXA 筑波宇宙センター研修</b>
1 日時	令和元年7月27日(土)
2 場所	宇宙航空研究開発機構(JAXA)筑波宇宙センター
3 参加者	1年生10名 南高校附属中学校生徒35名
4 講師	① JAXA 筑波宇宙センター見学案内担当 ② CYBERDYNE STUDIO 富田 雄一郎氏
5 内容	① 宇宙センター見学(ロケット、人工衛星、宇宙飛行士訓練施設、ISSきぼう管制室)と宇宙飛行士に求められる資質の説明を受けた。 ② HAL(ハル、Hybrid Assistive Limb)は生体電位信号を読み取り動作する世界初のパワードスーツ。筑波大学が開発しCYBERDYNEがHALの生産とHAL医療用下肢タイプのレンタルを行い、西日本豪雨災害救助でも活用された。CYBERDYNE STUDIOでは、HALの説明と、部分タイプの装着・動作体験を行った。



	<b>JOCA(青年海外協力協会)SDGs講座</b>
1 日時	令和元年9月12日(木)
2 場所	南高ホール
3 参加者	1年生 194名
4 講師	青年海外協力協会(JOCA) グローバル人材育成グループ 市原 華世氏
5 内容	グローバルビレッジのSGH研修の事前学習として、JOCAの支援を得てJICAのSDGsを目指す課題解決の事例学習、LbEの研修に参加するために必要な各自の準備の紹介を行い、グローバルな視点に立ち、異文化を理解し、自ら課題を探究していく態度を育成した。 1学期までに行ったSDGsの基礎学習や夏休みのSDGs研究を踏まえて、JICAがSDGs達成に向けて、以下の3本の柱を中心に取り組んでいる事例を学び、異文化や国際的な課題を理解した。 1. 国際社会の平和、安定、繁栄を目指し、人間の安全保障と質の高い成長を実現する。 2. SDGsのうちの10のゴールについて中心的役割を果たす。 3. SDGs達成を加速するため、国内の知見の活用、国内外のパートナーとの連携、イノベーションを図る。

6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界がぐっと近づいてくるように思えました。自分にできることを探して行動したいと思います。</li> <li>・JICAの海外援助活動には身近なテーマもあるので、自分にも世界に貢献できそうな気がした。自分もJICAに入りたいと思った。</li> <li>・SDGsの目標は大きなものだけど、まずは身近なところから行動を起こしたい。</li> <li>・水道をひねれば水をいつでも使えることがどれだけ幸せなことかわかった。</li> <li>・世界では、誰かのために尽くしている人がいることを知って、自分も将来そのような仕事をしたいと思った。</li> <li>・日本の母子手帳が世界で役に立っていると知って嬉しくなった。</li> <li>・SDGsの「誰も置き去りにしない」という考え方が自分には響きました。小さなことでもよいから自分にできることをしようと思いました。</li> <li>・「地球規模で考えて、身近なところで行動する」という言葉が素敵だなと思った。</li> <li>・SDGsの17のゴールはみな繋がっているので、一つを解決すれば多くが解決できると知って勇気がわいた。</li> </ul>
--------	--

	海外イマージョン研修・国内イマージョン研修報告会
1 日時	令和元年9月19日(木)
2 場所	南高ホール
3 参加者	1年生全員、2年生全員
4 発表者	シンガポール海外イマージョン研修(1年生)8名、ベトナム海外イマージョン研修(2年生)8名、国際大学(新潟)国内イマージョン研修(2年生)8名
5 内容	シンガポール海外イマージョン研修、ベトナム海外イマージョン研修、国際大学(新潟)国内イマージョン研修の参加生徒の英語による研修報告を通して、1年生全員、2年生全員が情報を共有し資質能力を高める。
6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調べるだけでなく、実際にベトナムやシンガポールに行って、課題を解決するプランや製品を考えて、自分にもできることを見つけたのがすごいと思った。</li> <li>・世界を変えたいという思いが、ベトナムの発表を聴いていて強くなった。自分は、世界の人たちが薬を安全に使えるように取り組みたいと思った。</li> <li>・ベトナムの戦争博物館を見た先輩が戦争の悲惨さを訴えた言葉を忘れてはならないと思った。</li> <li>・GLPの人たちが、ベトナムの研修を通して得られた課題の解決策が、カードゲームや緑豆であることが、世界を身近に感じられてよかった。</li> <li>・英語の発表を聴いていて、世界と関わるには改めて英語が大切だとわかった。</li> <li>・シンガポールやベトナムの文化に触れることができ、大事なのは相違点ではなく、共通点だと知った。平和に向かうグローバル化のために何かをしたいと思った。</li> <li>・課題解決を考えて、実行する段取りを組むことが、自分の強化したい力だ。</li> </ul>

	IBM企業講座2 ダイバーシティ&インクルージョン、研究発表ブラッシュアップ
1 日時	令和元年10月19日(土)
2 場所	1年1組～5組 教室
3 参加者	1年生 194名
4 講師	株式会社日本アイ・ビー・エム 大津 真一氏ほか本社社員6名
5 内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SGH事業として、4月に行ったIBM講座を踏まえ、協働する多国籍の人々が直面する文化の違いによる課題解決を目指す研究の発表を通して、グローバルマインド(ダイバーシティ&amp;インクルージョン)と表現力を身につけた。</li> <li>・グループごとに、テーマ「文化の違う人たちと一緒に仕事をするには」に基づいた研究の発表を行い、IBM社員によるアドバイスを受けて、11月8日(金)SGH研究発表会に向けてブラッシュアップした。</li> </ul>

	TRY 選択講座 NASA 講座
1 日時	令和元年 10 月 28 日 (月)
2 場所	南高ホール
3 参加者	高校生 1 年生を中心に 50 名、南高校附属中学校生徒 70 名
4 講師	Mr. Garvey McIntosh, NASA Attaché (ガービー・マッキントッシュ氏、NASA アジア代表)
5 内容	<p>"The impact of Apollo 11 and the NASA's plans for future space exploration (アポロ 11 号の功績・影響力と NASA の今後の宇宙探査計画)</p> <p>宇宙から見るグローバルな視点を持ち、科学技術力で世界をリードする NASA の職員による講演と交流を通して、グローバルな課題の捉え方と解決する力を養い、世界に貢献する意欲を持つ生徒を育てた。</p> <p>1969 年にアメリカのアポロ 11 号が人類初の月面着陸に成功してから 50 年という記念すべき年であることを踏まえて、再び人類が月に立つ NASA の計画について、英語でお話しいただいた。</p>

	企業講座① 花王の新しい ESG 戦略と具体的な取組
1 日時	令和元年 11 月 16 日 (土)
2 場所	1 年生 選択者
3 参加者	1 年生 40 名
4 講師	花王株式会社
5 内容	<p>花王グループでは、「化粧品」「スキンケア・ヘアケア」「ヒューマンヘルスケア」「ファブリック&amp;ホームケア」の 4 つの事業分野で、一般消費者に向けたコンシューマープロダクツ事業を、また「ケミカル」事業分野においては、産業界のニーズにきめ細かく対応した、ケミカル製品を幅広く展開している。これらの事業を通じて、花王グループは、世界の人々の豊かな生活文化の実現に貢献している。</p> <p>花王グループの ESG の取組の歴史、今年の 4 月に公開した新しい ESG 戦略『Kirei Lifestyle Plan』の紹介、それに基づいた具体的な取組を紹介し、日々の暮らしの中で社会や環境にやさしいことは何ができるのか考えた。後半、意見交換を通じてより、理解を深めた。</p>

	企業講座② カードゲームを通じて考える SDGs と自分の繋がり
1 日時	令和元年 11 月 16 日 (土)
2 場所	大会議室
3 参加者	1 年生 選択者
4 講師	株式会社 Criacao(クリアソン)
5 内容	<p>株式会社 Criacao(クリアソン)は「スポーツの価値を通じて、真の豊かさを創造し続ける存在でありたい。」を理念に、スポーツ×教育を軸に事業を展開する企業である。ブラインドサッカー、オリンピック・プロアスリートによる企業・大学向けのチームビルディング研修、大学生・若手ビジネスマンへのキャリア教育、幼児教育、在日外国人と日本人の交流の場を提供するなど、スポーツを通して社会課題を解決していくことにチャレンジしている。また Criacao が大切にするスポーツの価値を体現する存在がサッカークラブである。</p> <p>「2030SDGs」というカードゲームを用いた体験型 WS。体験を元に SDGs と自分との関係を考え、SDGs の本質理解を促した。</p>

	企業講座③ 社会課題を解決する「賃貸住宅」
1 日時	令和元年 11 月 16 日 (土)
2 場所	1 年 1 組教室
3 参加者	1 年生 選択者
4 講師	大東建託グループ

5 内 容	<p>大東建託グループは賃貸建物の企画・設計・施工から建物の管理・運営まで、賃貸経営のすべてを引き受ける「賃貸経営受託システム」を事業の中心に据え、オーナーの「不安」を「安心」に変えるサポートをしている。年間約6万戸におよぶ住戸の供給、32万件の入居者斡旋、112万戸の管理戸数を持つ。また、賃貸住宅に住まう方や賃貸建物を建てた地域の暮らしを豊かにするための、エネルギー事業、介護・保育事業なども推進しており、暮らしに、社会に、なくてはならない「生活総合支援企業」を目指している。</p> <p>当社事業「なぜ大東建託グループは賃貸住宅を建ててるのか？」と当社の職種とキャリアを紹介し、SDGsへの対応について考える。また、ワークショップ：賃貸住宅で社会貢献！？「ミニ賃貸住宅コンペ in 南高」を行った。</p>
-------	---

	企業講座④ SDGs 達成で創る皆さんの未来 ～日立の取り組みを例に～
1 日 時	令和元年 11 月 16 日 (土)
2 場 所	1 年 2 組 教室
3 参加者	1 年 生 選 択 者
4 講 師	株式会社日立製作所
5 内 容	<p>2020年に創業110周年を迎える日立は、「優れた自主技術・製品の開発を通じて社会に貢献する」を創業以来の企業理念として、社会やお客さまの期待にイノベーションで応えてきた。100年を超えるモノづくりで培ってきた制御・運用技術と50年以上にわたる情報技術 (IT) の蓄積を生かし、事業を通して新たな価値を生み、社会課題の解決に貢献している。日立はモビリティ、ライフ、インダストリー、エネルギー、ITの5つの事業分野で、人々の Quality of Life の向上や持続可能な社会の実現をめざしている。</p> <p>社会で起きていること (社会課題の例)、日立の取り組みを紹介し、Local/Globalで、①日常生活で感じる身近な社会課題、②自分が気になる社会課題と自分への影響をディスカッションした。また、日立社員になったつもりで、日立のリソース (技術や人材など) を使って皆さんの作りたい/ありたい未来を考えるワークショップを行い、成果を発表した。</p>

	企業講座⑤ 三菱ケミカルホールディングスグループ ～持続可能な社会実現に向けた取り組み～
1 日 時	令和元年 11 月 16 日 (土)
2 場 所	理科講義室
3 参加者	1 年 生 選 択 者
4 講 師	株式会社 三菱ケミカルホールディングス
5 内 容	<p>本企業グループは、「人、社会、そして地球の心地よさがずっと続いていくこと」を KAITEKI と名付け、この KAITEKI 実現をビジョンに掲げ、「機能商品」、「素材」、「ヘルスケア」の3つの分野で事業を行っている日本最大の化学系企業グループである。石油化学品、コークスなどの基礎化学素材、ポリエステルフィルム、炭素繊維、リウムイオン電池材料などの高機能製品や医療用医薬品、産業ガス等の多岐にわたる製品を提供している。</p> <p>事業内容、CSR と KAITEKI を紹介し、持続可能な社会、SDGs に貢献するためのソリューションを説明した。また、日本の企業あるいは、環境負荷の大きな化学産業の現状と解決策を考えた。</p>

	企業講座⑥ 人と地球の健やかな未来に向けて
1 日 時	令和元年 11 月 16 日 (土)
2 場 所	1 年 5 組 教室
3 参加者	1 年 生 選 択 者
4 講 師	ライオン株式会社

5 内 容	<p>ハミガキ、ハブラシ、液体ソープ、スキンケア、洗剤、柔軟剤、台所/住居用洗剤、薬品、健康食品を製造販売、海外現地会社への輸出を行っている。ライオンは「食べる・話す・笑う」という当たり前な日常を大切にするために、100年以上前からオーラルケアの習慣化に取り組んできた。</p> <p>本講座のテーマである SDGs の達成に向けて、ライオンがこれまで取り組んできたことと SDGs の関係について整理し、今後、私たち一人ひとりが貢献できる活動を考えた。</p>
-------	---

11月16日 企業講座① ～⑥ 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消費者に選んでもらえるためには、社会的価値を考えることが大切だと知った。</li> <li>・一つ一つの行動が世界の SDGs につながっていることを知った。</li> <li>・住居の建て方によっては地域に多くの効果を与えることがあることが分かった。</li> <li>・建物を建てる時に人の根底にあるニーズを理解する必要があることがわかった。</li> <li>・SDGs の 17 の目標が一つにつながっていることが実感できた。</li> <li>・目的と実現するゴールは、近くても同じではいけないことを学んだ。</li> <li>・新たな事業を考えると、目的、対象、方法、弊害を考える力が大切だと知った。</li> <li>・SDGs のワークショップを通して、経済・環境・社会のバランスを保つことが大切であることを学んだ。</li> <li>・同じ製品でも販売している国や地域に合わせて変えられていることを知った。</li> <li>・商品開発をする時に消費者の目線に立つことが大切だと思った。</li> <li>・「行動した結果、SDGs を満たす」という実現法がおもしろいと思った。</li> </ul>
-------------------------------	---



	横浜市の SDGs を考える講演と研修
1 日 時	令和元年 12 月 5 日 (木)
2 場 所	南高ホール
3 参加者	1 年生 194 名
4 講 師	横浜市温暖化対策統括本部 SDGs 未来都市推進課 課長 高橋知宏 氏
5 内 容	<p>ACT のスタートとして、本校が会員となっているヨコハマ SDGs デザインセンターの主催者である横浜市温暖化対策統括本部 SDGs 未来都市推進課課長による「横浜市の SDGs 課題と横浜市の取り組み」についての講演を通して、生徒たちが SDGs を身近に受け止め、SDGs に参加する意欲を高めた。また、横浜市の SDGs 課題が世界の多くの都市に共通する課題であることを知った。</p> <p>生徒たちはすでに、SDGs について本校で行った講座や JOCA の講義とワークショップに参加していて基礎的な知識と考え方を身につけている。それを前提に、SDGs 未来都市推進課課長に、SDGs を簡単に復習しつつ、横浜市の SDGs 課題と取り組みの実例を紹介していただいた後、生徒たちとともに SDGs 課題の解決策を</p>

	<p>考えた。このとき SDGs は 17 で 1 つなので、切り分けることができないため、横浜市の SDGs 課題の背景や本質が複数あるいはすべての SDGs に関わっていることを踏まえて考察する。また、横浜市の SDGs 課題が世界の多くの都市でも共通する課題であることを知った。</p>
6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>横浜市には SDGs 解決のための様々な取り組みが行われていることを知り、課題について本気で貢献しようという強い思いが伝わり自分も貢献したいと思った。</li> <li>木製のストローのお話の中での「大量生産大量消費ではなく本当に必要な分だけ作り使う」という言葉に感銘を受けた。</li> <li>横浜市のことについて知らないことだらけでした。もっとこうすれば生活が豊かになるかもしれない、などを考えながら生活して横浜市の SDGs プロジェクトに少しでも参加していきたいです。</li> <li>様々な新しい考え方に触れられた。木製ストローを買ってみたいと思った。人口減少や CO2 排気量、もともとのシステムなどを考えた上でのオンデマンドバスという解決策はとてもすごいと思った。環境に良いうえで気持ちの良いアイデアを思いつくことも一つ大事なことだと思った。聴いていてとても魅力的に思えたので、知ることは大事だと感じた。</li> <li>自分で主体的にやっていかなければいけないと思いました。一人だけでは考えられることに限りがあるので、できるだけ沢山のの人に協力してもらい、SDGs センターなら協力してもらえと思った。</li> </ul>



	SGH 研究発表会 (GLP 研究発表)・国内イマージョン研修報告会
1 日時	令和 2 年 1 月 23 日 (木)
2 場所	南高ホール
3 参加者	1 年生 194 名 2 年生 195 名
4 発表者	2 年生 GLP (グローバルリーダープロジェクト) 12 名 6 チーム 1 年生国内イマージョン研修参加者 25 名 (新潟県国際大学で実施)
5 内容	2 年生 GLP 12 名 6 チームによる東南アジアの課題を解決するビジネスプラン研究の発表と、1 年生国際大学国内イマージョン研修 25 名の参加生徒による研修の報告を行った。この発表と報告を通して、GLP、国内イマージョン研修参加者がグローバル・リーダー育成のための研修で得た情報・体験を、1 年生、2 年生全体で共有し、全体の資質と能力を高めた。
6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>ビジネスプランやイマージョン研修の報告は、自分で考えて行動し、いろいろなことに目を向けてきた成果だと思う。</li> <li>チーム「ますだぶる」の二人の地道な行動の積み重ねのすごさに驚いた。</li> <li>GLP の行動力、視野の広さや発想力をすごいと思った。</li> <li>解決策を考えると、いかに実現できるかという想像力が大事だと思った。</li> <li>自分で企業にアポをとったり、訪問して話をしてくれるのがすごいと思った。</li> <li>国内イマージョン研修報告で、見えているのは氷山の一角だということを知った。</li> <li>実際に行動を起こすことが高校生にもできると思った。</li> <li>広い視野を持って課題を探ることが自分には足りないと感じた。</li> <li>少ない人数でも、行動力と思考力で世界を変えられることを知った。</li> <li>文化の違いを理解することが世界の平和につながることを学んだ。</li> <li>プレゼンで人の心をつかむとはどういうことかわかった。</li> <li>新潟イマージョンの人たちは、体験したことを本当に楽しそうに話し、羨ましくなりました。体験が人を変えるのだなと思いました。</li> <li>実際に外国の人と話してみることが文化の違いを理解できる方法だと感じた。</li> </ul>

(3) 1年生 シンガポール海外イマージョン研修

1 報告者	徳永上総教諭、西村小百合教諭
2 日時	7月30日(火)～8月3日(土)
3 場所	シンガポール共和国
4 参加者	1年生 8名
5 講師等	NEC Asia Pacific PTE. LTD. 職員、現地採用職員 株式会社 三崎恵水産 社長 MEGUMI F&S SINGAPORE PTE LTD 職員、現地採用職員 Tokio Marine Insurance Singapore Ltd. 職員、現地採用職員 NTA TRAVEL (日本旅行) (SINGAPORE) PTE LTD 社長・職員
6 目的	複合多民族国家シンガポールに赴き、これからの社会が求めるグローバル人材としての必要な文化的多様性を理解し、一体化するマインドを育み、各自の課題研究に対する質を向上させる。また、海外でのフィールドワークを通じて、海外でのキャリアイメージを拡大させるとともに、現地のビジネスパーソンとのディスカッションを行うことにより論理的思考力・コミュニケーション力・幅広い教養を育て、次世代ビジネスリーダーとしての素養を身につけさせる。さらに、その成果を発表することで学校全体の課題研究の質を向上させる。
7 活動の概要	<p>○個人研究課題を掲げ、現地滞在中は各訪問先でお話を伺うと同時に、調査(現地の市場やデパートで実際に買い物をし、現地の方々と交流し実地調査)やインタビュー(交流した学生や現地シンガポール人、観光客に対して)を行い、研究と理解を深めた。</p> <p>個人研究課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ハラルフードについて考え、日本の給食にハラル導入を提案する</li> <li>■ 飲料水についてシンガポールの政策を学び日本での活用を提案する</li> <li>■ 高齢化社会についてシンガポールから学び、日本の明るい高齢化社会を提案する</li> <li>■ 多民族国家のコミュニティについて学び、皆が幸せに暮らせる日本の社会作り(コミュニティ、イベントなど)を提案する</li> <li>■ 女性の働き方について学び、日本の人々が働きやすい社会を提案する</li> <li>■ 電子マネーやスマホなど、デジタル化について学び、ITを利用した暮らしやすい社会を提案する</li> </ul> <p>○日系企業を訪問し、ビジネスの世界を知るとともに、ACTの課題設定に活かす。 ○マリーナバレーを訪問し、シンガポールが抱える水についての課題を理解し、日本との関係を考える。 ○国立博物館を訪問し、第二次世界大戦中の日本との関係を理解し、将来の糧とする。 ○帰国後、報告会や研究発表会において本研修での成果を発表する。</p>
8 内容	<p><b>事前学習</b></p> <p>○『物語シンガポールの歴史』(中公新書)を読んでシンガポールと日本の関係などの歴史について学習する。 ○『シンガポール謎解き散歩』(KADOKAWA/中経出版)を読んで、歴史、観光、生活・文化、政治経済など、多角的にシンガポールについて学習する。 ○ホーカーで屋台を経営する家族についてのビデオを鑑賞し、シンガポール人の暮らしについて学ぶ。 ○各自課題を設定し、調査ができる場所や方法を考えフィールドワークのコースを決める。 ○インタビューの内容の吟味や英語でのインタビューの練習を行う。</p>

#### 7月30日（第1日目）

羽田空港よりチャンギ空港へ（SQ631 便）  
約6時間のフライトでシンガポールへ。

○ チャンギ空港（Changi Airport）着  
チャンギ空港はアジアのハブ空港として機能し、大きなターミナルをいくつも保有している。現地ガイドと合流し、専用車で移動。

#### ○ NTA TRAVEL（日本旅行）（SINGAPORE）PTE LTD 訪問

海外を駆け巡り、25年もの駐在歴をお持ちの中島茂氏（代表取締役社長）による講義を受けた。シンガポールや日本が世界でどのような立ち位置にあるのか、これからのグローバル社会において、高校生が学ぶべき知識や技能などについてお話しいただいた。また、オフィス内を見学し、私たちが外国で観光する際にどのようにサポートを受けているかなどを学んだ。



#### ○ ミーティング

毎晩、滞在ホテル内のフリースペースで振り返りを行った。その日1日で気づいたことや学んだことをメンバーや教員とシェアし、自らの研究の進捗についても報告し合い、意見交換を行った。

#### 7月31日（第2日目）

#### ○ NEC Asia Pacific PTE. LTD. 訪問

まず、日本から出向している竹屋氏から、NEC Singapore が行っているビジネスについて説明を受けた。NEC シンガポールは **Safety Business**（安全や安心のインフラ）を提供しており、政府から依頼されている仕事などを含め、シンガポールのセーフティービジネスの中心となっていることがわかった。会社の中でも、顔認証とカード認証を組み合わせることでセキュリティの精度を高めていた。この顔認証は、空港や街中の迷子探しなど、様々な場面で利用されているようだ。



次に、現地社員のジョセリン氏（**Jocelyn** 氏 中華系シンガポール人）から、保育園の仕組みや女性の働き方、エスニシティについて説明いただいた。自分の友人にも様々なバックグラウンドを持つ人がおり、あまり民族を意識することはないといわれた。それぞれの文化を理解し、相手に合わせた付き合いが大切である。

600人の社員がいる中で日本人は20名程度という構成、その中で働く竹屋氏は、職場で相手を“**respect**”することの大切さを強調された。竹屋氏は、NEC シンガポールはシンガポール人の社員で成り立っていることを認識し、彼らが気持ちよく働いてくれるように自分は働いているとコメントされた。

その後、生徒たちが自分の研究テーマについて質問し、2時間にわたるセッションを終了した。

#### ○ ラッキープラザ

インタビュー活動を継続。フィリピン人が集まる場所としても知られており、送金のための金融機関が多数あり、行列をなしている姿が見られた。母国を離れて働く労働者たちが家族に送金していると考えられる。フィリピンのローカル屋台も複数あった。手ごろなお土産品もあり、生徒はキーチェーンなどを購入した。

#### ○ シンガポール国立大学（NUS: National University of Singapore）訪問

世界でも高い評価を得ている NUS を訪問し、生徒は自らの研究テーマに基づいたインタビュー活動を行った。



○ 高島屋、コールドストレージ (スーパー)

にて人の働く様子を観察、インタビュー活動を継続した。

○ ニュートンフードセンターでは、夕食+インタビュー活動をおこなった。また、ホーカーやフードコートでは、食器を片付ける作業に高齢者や障がいを持つ方々の働く姿が見られた。

○ ミーティングでは、生徒たちから次のような意見や感想が出た。

- ・ 民族について質問し、インドネシア、香港、カンボジアなどの人の話が聴けた。クリスマスは沢山の人が祝っている。お年寄りにもっとインタビューしたい。
- ・ 日本で調べたこととは違った、出産後早く復帰したい人が多い。
- ・ NEC で見た顔認証が日本でも使えるようになるという。スマホのトレーニングセンターなどもあり、高齢者もスマホを利用できるよう工夫されていた。大学生は電子マネー利用が多かった。Apple Pay などのモバイル決済サービスを利用していた。
- ・ どれくらいの数の高齢者がどこで働いているかを確認できた。日本でも高齢者が働くことのできる道を探りたい。フードコートやラッキープラザはお年寄りが多く働いている。地域に根差している場所の方がお年寄りは働きやすいのか。
- ・ コールドストレージの店員さんは高齢者、障がいを持った方々かな？
- ・ ラッキープラザのフードコートで片付けをしている人たちもそうだと思う。
- ・ 宗教のことはあまり答えてくれない。ハラルフードはシンガポールの人たちにとっては普通のものという認識だと感じた。
- ・ NEC で民族コミュニティはなくなりつつあるとわかったが、コミュニティは実際に存在すると言っている人がいる。
- ・ シンガポールは過ごしやすい国か？全員が住みやすい国だと言っている。理由は明日から調査する。
- ・ NEC (NEC Facilities) で水フィルターを作っていることを発見。日本は技術があるのに再生していない。その背景や理由を探りたい。

### 8月1日 (第3目)

第3日目の移動はすべて公共交通機関での移動となった。

○Tokio Marine Insurance Singapore Ltd. (東京海上シンガポール) 訪問

日本から出向している瀬戸川 和輝氏によるプレゼンテーション。ローカルのスタッフ2名 (Billy Lily さんと Erika Lee さん) と瀬戸川氏のパネルディスカッションをおこなった。ビリーさんはローカルマネジャーの方である。

シンガポールは充実期に入っており、コンサルタント、人材派遣、法律関係の企業が現在多く進出中だそう。東京海上シンガポールは自社ビルを持っており、社員 206 名中日本人スタッフ8名。ディスカッション後、社内を見学し、ローカルの女性正社員が沢山いることに驚いた。彼女たちで会社が成り立っていると瀬戸川氏は語った。



【ディスカッションから抜粋】

米田（以下 Y）：宗教の話はシンガポールではタブーか？

ビリー・エリカ（以下 B）：そんなことはない。宗教勧誘と間違えられたのでは。

Y：どの様に質問したら答えてくれるのか？

B：学生でリサーチをしていることをうまく伝えること。

Y：エスニシティを意識して友人と相対しているのか？人間として相手を見ているか。

エリカ：エスニシティは **not take into account**（考慮しない）である。

後藤：下水から浄化した水を飲むことについてどのように感じるか？

B：**government**（政府）を信頼しているからあまり気にならない。水道水は沸かして使っている。



○ マーライオンパーク・ラッフルズ上陸場所（Merlion Park・Raffles Place）周辺

シンガポールのシンボルとなっている上半身がライオン、下半身が魚の形をしたマーライオンが鎮座する広場を歩いて巡った。マーライオンの「マー」とは「海」を表している。シンガポールという国名は「ライオン」意味する「シンハ」に由来し、マーライオンはそれらを合わせたものである。

シンガポールをイギリス植民地として開発したトーマス・ラッフルズが 1819 年に初めて上陸した場所に石像が置かれている。現地ガイドより、シンガポールの歴史を学んだ。



○ MEGUMI F&S SINGAPORE PTE LTD まぐろ問屋 三崎恵水産シンガポール支店訪問

7月19日（金）の事前研修では、株式会社 三崎恵水産を訪問し、まぐろの海外進出ビジネスについて、日本サイドから学習した。冷凍庫に保存されている鮪の見学をおこない、石橋 匡光氏（常務取締役）の講義を受けた。



今回同社が出店するシンガポールのレストランでは、偶然再び石橋社長にもお会いできた。シンガポールのビジネスを任されている渡邊 将基氏（General Manager）とのディスカッションの中で、シンガポール進出の理由と経緯、異文化を持つ人と働く上で大切にしなければならないことについて学んだ。質疑応答では一日の売り上げ 2,500 ドル（昼）、5,600 ドル（夜）、家賃 300 万円、外国人を雇うために政府にお金を払っているなど、具体的なビジネスの数字を伺うと共に、異文化の方々と一緒に仕事をするには、自らが責任を負い、意思決定をする一方で、働いている人たちを **respect** することはとても大切であるとコメントされていた。どこでも相手を” **respect**” することは強調され、シンガポールで暮らす人々のキーワードであることが確信できた。

○ 国立博物館（National Museum）

市街地の中心に位置する国立博物館を訪問し、シンガポールの歴史について学んだ。事前学習の中でも日本とシンガポールの歴史について学んでいた生徒であったが、実際に日本の占領下にあった時代の資料を目にすることで、より深く学ぶことができた。昭南島の展示、リー・クアンユーの独立時のスピーチなどを見学した。現代 IT を駆使した芸術も鑑賞できた。

○ マリーナベイサンズ

シンガポールの観光やブランドビジネスを見学した。20:00～ライトショーを鑑賞。IT を駆使した集客の一つを見学できた。



8月3日（第4日目）

○ アラブストリート  
イスラム教モスク見学、ストリートにはヤシの木が植えられ、異文化を感じる通りだった。



○ Marina Barrage (マリーナ・バラージ)

水資源の乏しいシンガポールでは、海水の淡水化や再生水の開発に力を入れている。マリーナ・バラージは水害リスク軽減を担う貯水池として機能している上に、高層ビル群や夜景を望める場所として観光地としても賑わっている。環境問題や水について学習した。

○ チャイナタウン、チャイナタウンコンプレックス

スリ・マリアマン寺院（ヒンドゥー教寺院）見学、仏教寺院を見学、昼食をとりながらインタビュー活動を継続した。

○ 日本人墓地公園

日本人（二木多賀治郎）が持つゴム園の一面に 1895 年に作られた墓地で、ゴムプランテーション時代から第 2 次世界大戦後までシンガポールで亡くなった様々な背景を持つ日本人が埋葬されている。



マグロ問屋三崎恵水産の社長の推薦で訪問し、シンガポールと日本のこれまでのつながりの歴史を学習した。

○ Geylang Serai Market & Food Centre (ゲイランセライマーケット&フードセンター)

マレー系住民が集う市場であり、1 階部分には生鮮食品が並び、2 階部分はホーカーが並んでいる。マレー様式の布や服などを販売する店舗も多く、ヒジャブ（女性のイスラム教徒が被るもの）などの伝統衣装を身にまとったマレー系の現地人で溢れていた。事前学習で、ホーカーで屋台を営むマレー系家族のビデオを視聴していた。彼らが屋台で売っていたマレー菓子プトゥピリンを試食した。多くの方々がインタビューに快く答えてくださっていた。

○ Mustafa Centre (ムスタファセンター)

リトルインド地区にある、24 時間営業のショッピングセンターを訪問した。食料品から家電、化粧品、お土産品など何でも安価に揃えることができ、現地人にも観光客にも有名なショッピングセンターである。

○ シムリムスクエア

電化製品の店が入っているショッピングモールである。IT 関連をテーマに調査、インタビュー活動を実施した。

○ チャンギ空港 (Changi Airport) 着

4 日間の現地での行程すべてに付き添ったガイドとお別れをし、シンガポールを出国した。搭乗するまでは、シンガポールで学んだことや個人研究の進捗状況などについて共有した。

チャンギ空港より羽田空港へ (SQ636 便)

**8月4日 (第5日目)**

早朝、羽田空港に着陸した。到着ターミナルにて、今後の事後研修から報告会までのスケジュールを確認し、解散した。

**生徒の報告書より抜粋**

・研修を通じて、日本とシンガポールは共通点があるが、根本的な土壌から異なり、そこから改善していくことが、日本が外国人労働者を受け入れていくために必要だと気付いた。そのため提案はかなり抽象的なものとなったが、これを意識するだけで日本は外国人労働者が働きやすく、また日本人も気持ちよく外国人労働者と接することが出来る社会になるだろう。

・一番印象に残っているのは、シンガポールと日本の歴史には戦時中、日本人による

	<p>シンガポール人の大虐殺があった事だ。私は初めシンガポールの方々は日本に対して悪い印象はあまりないだろうと考えていたため、この事実を知ったときは衝撃を受けた。私たちは戦争をしていたことは知っていたが、シンガポールとの戦争は教科書にも記載されておらず、日本側が被害を多く受けていると取れる記載が多い印象だった。しかし、日本が他国に対して以前このような残虐なことをしていたと考えると、恐ろしかった。このことから、異国の方と接する以前に異国の歴史を学ぶことが最重要で、それを知ったうえで一人ひとりが自分の発言、行動に責任があるという意識を持つことが重要だと思った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の研修では国籍、文化の違う様々な人と接することで多くの経験ができた。その中でも私が特に印象的だったのは人々がフレンドリーだったことだ。笑顔でインタビューに答えてくれたり、研究頑張っってねと声をかけてくれる人や聞いていないことを自ら教えてくれる人もいた。</li> <li>・今回の研修を通して、日本にどのような工夫を加えたら女性にとって働きやすい社会になるか考えた。私が一番大事だと思うのは、保育園を会社に併設させることである。もし保育園が併設されたら、母親は子供の送り迎えを心配せずに働くことができる。そうすれば、女性が社会進出するチャンスも増えると思う。</li> <li>・今回の研修に参加して、多民族国家がどんなに素晴らしいかを知ることが出来た。また、インタビューに応じてくれる人が多く、その人柄にも感動した。この5日間で、初めて会う人にインタビューする力がつき、同時に異文化への関心がさらに高まった。これからはTRY&amp;ACTでの活動をしっかり行い、異文化に関するイベントに参加したいと思う。この研修の報告会で学年の皆が研究を深められるように発表を頑張りたい。</li> <li>・研修中の調査から今後の研究で、ムスリムの方がより安全に食事をするために、学校給食でハラール対応の食事を提供できるようにするべきだと考えた。ムスリムの生徒は献立や調理場の環境によって日本人の生徒と同じ食事を食べられないことが多いそう。これから日本、横浜はグローバル化が進み、海外からの転校生も増えるであろう。誰もが安心して楽しく食事ができるために取り組んでいく必要を強く感じた。</li> <li>・調査をふまえて、高齢になっても働くことや社会に参画することがあたりまえにできる理想の社会を実現するために、今私たちが高校生としてできること、私たちが働く世代になって高齢者と一緒に働くときにすべきこと、そして、私たちが高齢になったときにすべきことを提案したい。</li> </ul>
<p>9. 考察と 成果</p>	<p>企業訪問を通して、生徒が海外で仕事をするに関して実体験できたことは、生徒の視野を大きく広げ、この先の生活、学習、進路選択など、生徒や彼らに関わる沢山の人の人生に、大きなプラスの影響を与えることは確かである。さらに、今回も、各自テーマを持ってシンガポールを訪問し、行く先々でそのテーマと関連付けながらフィールドワークしたこと、またその調査や結果をお互いに共有できたことで、生徒の異文化に対する理解や見方が大変深くなり、異文化を受容し協働する姿勢が生まれた。研修中から生徒が日々成長し、物事にますます前向きに積極的に取り組む姿を見ることができた。</p> <p>以上の点から、このシンガポール海外イマージョン研修が、非常に有意義な研修であったことは間違いない。また、帰国後に後輩や同級生の前で発表するという経験も、生徒にとって自信となった。発表することにより、学んだことを整理でき、調査方法についても改善点を見つけることが出来た。来年度のシンガポール海外研修では、それぞれがリーダーとして、活躍してくれることを確信している。</p>

(4) 1年生 グローバルビレッジ研修

1 報告者	遠藤 摩樹教諭
2 日時	令和元年10月3日(木)～4日(金)
3 場所	国立オリンピック記念青少年総合センター
4 参加者	1年生 190名
5 講師等	公益財団法人 青年海外協力協会 (JOCA) 市原 華世氏 他職員8名 株式会社 LbE Japan 小泉 淳子氏 他社員24名
6 目的	①「文化の違う人たちと一緒に仕事をするには」をテーマに、グループによる研究・討論などの活動を行い、グローバルな舞台で協働する力を養う。 ②多様な文化を持つ外国の人々との交流を通じて異文化と出身国の SDGs 課題を理解し、グループ研究の成果を英語で発表する。
7 活動の概要	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 70%;"> <p><b>10月3日(第1日目)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○海外協力隊員の異文化体験談とディスカッション グアテマラ、ザンビアでの2人の青年海外協力隊体験談を通して、異文化理解によって課題が解決した実例を学ぶ。</li> <li>○パネルトーク テーマ：様々な価値観を持つ人々とどのように協働するか</li> <li>○異文化体験ワークショップ「Bafa Bafa」</li> <li>○SDGs ワークショップ 青年海外協力隊が遭遇した世界の貧困、不平等、環境問題などの課題を整理し、SDGs の17のゴール169のターゲットを達成する方法を考える。</li> <li>○ロールプレイ 開発途上国の「JOCV in カナワ村」を想定して、ロールプレイを演ずることを通して自分のこととして課題をとらえる。</li> <li>◎夜間研修 第2日目に行うポスターセッションの発表方法を確認する。 英語の研究発表の練習と教員による指導を行う。</li> </ul> <p><b>10月4日(第2日目)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○外国人ファシリテーターによるプレゼンテーションを行う。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・国当てクイズ&amp;母国紹介を行う。</li> <li>・来日してからのカルチャーショックの講話を通して異文化を理解する。</li> </ul> </li> <li>○外国人ファシリテーターの母国の課題に関するプレゼンテーション <ul style="list-style-type: none"> <li>・母国の課題の認識&amp;その背景を分析し、共有する。</li> <li>・外国人ファシリテーターの母国の課題に関するポスターを制作し発表する。</li> </ul> </li> <li>○ポスターセッション(研究発表) 異文化ケーススタディについて英語で発表する。</li> <li>○グループディスカッション 「異文化の人々と一緒に仕事をするために必要なこと」を振り返り、グループとして結論づけ、共有する。外国人ファシリテーターを換えて繰り返し洗練する。</li> </ul> </div> <div style="width: 25%; text-align: center;">  </div> </div>
8 成果	研修全体を通して、ワークショップやグループ討論を適宜設け、受講者は主体的・対話的に課題を探究し表現して評価し合うという、アクティブ・ラーニングの形式で進めた。JOCA 講師の異文化体験談においては、文化の違いを理解する難しさについて共感でき、SDGs の考え方を通して現地の課題をどう解決するかというテーマへの対応では、状況を深く理解するために苦勞していた。問題解決能力の向上に向け良い体験となった。また2日目の実習とポスターセッションでは、外国人ファシリテーターとの英語による交流を通して異文化を理解し、英語によるプレゼンテーション能力を向上させることができた。さらに研修後は、自ら発信しようとする姿勢や課題に取り組む積極性が高まった。この研修で学んだことを活かし、11月のSGH研究発表会で、より改善したポスター発表につなげる。

(5) - 1 2、3年生グローバルリーダープロジェクト(GLP) 新潟国内イマージョン研修

1 報告者	遠藤 摩樹教諭、佐藤 貴弘教諭
2 日時	令和元年7月13日(土)
3 場所	国際大学(新潟県)
4 参加者	GLP 2年生 6名 3年生 14名
5 講師等	Dr. Mohammed K. Ahmed 教授
6 目的	スーパーグローバル大学創生支援に採択された国際大学にて、3年生のGLPの研究発表と外国人教授による英語のPresentation Training研修、ファシリテーターとのディスカッションを通して、グローバルな視点を持ち、思考力・判断力・表現力を養い、グローバル・リーダーとしての資質・能力を育成する。
7 活動の概要	<p>○講義室にて、3年生GLP6チームが研究発表を行い、活発な質疑応答、研究発表の講評を含めて、プレゼンテーションの向上に向けたアドバイスを受けた。発表の内容は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「カンボジアの貧困層と赤ちゃんを黄金のシルクが救う」 シルクで作った幼児服を用いたビジネスプラン</li> <li>■ 「おうち薬局 in Vietnam : 日本の「おきぐすり」でベトナム人を救え！」 ベトナム人が薬を手軽かつ安全に使用するためのサービス</li> <li>■ 「グローバル体験ツアー事業から始まるボランティアの輪」 現地学生の協力を得たツアー</li> <li>■ 「読み聞かせキッチンカー：紙芝居を用いて楽しんで日本語を学べる場と日本料理を提供する」 ベトナム人の日本語を上達させるための手段としての読み聞かせとそれを提供する場としてのキッチンカー</li> <li>■ 「手軽にDASH無人島：無人島を貸し出しリフレッシュできるサービス」 普段使用されていない無人島を利用したサービス</li> <li>■ 「貸し切りブルートレインで行くマレー鉄道東海岸ツアー」 現地のローカル線を使用した観光サービス</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>各グループ発表後に行われた質疑応答の際には、まず各グループ内でファシリテーターとのディスカッションを行い、その後意見や質問をやり取りした。この際に Ahmed 教授から質疑応答の際のテクニックを指導していただいた。質問者が回答を得られた際には Thank you をきちんと言い、終わりにすることなどを学んだ。</p> <p>○昼食時には、カフェテリアにて外国人ファシリテーター6名との交流を通して、異文化理解を深めた。</p> <p>また、GLPの各チームの研究について個別に説明し、ファシリテーターがアドバイスを行った。また、カフェテリアのメニューにハラールマーク(イスラム教徒が食べることのできる食品に付けられるもの)を見つけた生徒もあり、世界各国から学生がやってきていることを実感していた。</p> <p>○外国人ファシリテーターによるキャンパスツアーを行った。数人のグループで国</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

際色豊かなキャンパスを歩き回った。スポーツジムやコンビニも敷地内に設けられており、外国のお菓子や飲み物が売られている様子に生徒は驚いていた。



○フィードバック・セッション

Dr. Mohammed K. Ahmed 教授のリードで、外国人ファシリテーター6名がついて、研究発表も含めてすべて英語で実習がおこなわれた。

■プレゼンテーションの技術

発表の方法や、ジェスチャーを用いたアピールの仕方、引き込み方の大切さ、どのように話すかなどを学んだ。具体的には、原稿は手に持たず聞き手に語りかけるように発表を行うこと、話し方に緩急をつけ大事な部分を強調する際にゆっくり話すこと、スライド使用の際にはシンプルにし主張したいことのみを目立たせることなどを学んだ。また、「自分たちの発表を一言で表すと何か」という問いの答えが発表者の一番伝えたいコア・メッセージであり、そのことをもとに発表や研究が一つのまとまりとして行われることを学んだ。



○帰国後、イマージョン研修報告会や SGH 研究発表会において本研修での成果を発表した。

8 成果

3年生はこれまで試行錯誤を繰り返し、練り上げてきたビジネスプランを、世界各国から、より高度に専門性を深めるために国際大学で学んでいる学生にアドバイスや講評をもらうことができた。教授・学生・本校生徒の共通言語は英語ということもあり、プレゼンテーションももちろん英語だったが、事前の準備も十分におこなっていたため、自らの実力を十分に発揮できたようだ。2年生 GLP は来年の自らの姿を想像し、課題探求活動へのモチベーションを高めることができた。

カフェテリアやキャンパスツアーでの学生との交流は生徒にとって非常に有意義なものとなった。さまざまな国からの留学生と身の回りの他愛もない話から、自らの研究テーマなどについて話すことで、自らの英語が伝わる喜びを感じると同時に、さらに英語の学習に対するモチベーションが上がった生徒もいた。また、留学生の出身国の言葉や服装、考え方など異文化に触れることで、異文化を受容しようとするマインドの育成にも役立った。

このイマージョン研修は日帰りでの1日限りの研修であるが、その分集中して生徒は研修に取り組もうとしていた。学年をまたぎながら研修を行う中で、3年生は2年生に学びのモデルを見せようと一生懸命に取り組み、2年生は3年生からたく

さん学ぼうと努力する姿勢を垣間見ることができた。2年生 GLP にとって、さらなる躍進を手助けする場、3年生 GLP にとって自らの研究を発表し、講評をもらう、課題探求活動の集大成の場となっており、この研修は非常に重要な役割を担っているといえる。

(以下に参加生徒の気づき・学び・感想の抜粋を挙げる)

### 【3年生 GLP】

- ・カフェテリアでファシリテーターの学生と、私が大学で学びたいことや将来行きたい国について語り合うことができた。
- ・GLP の1年半で自分の研究を深めてきたが、その集大成となるような発表ができた。課題を見つけ、考え、それを人に伝えるという能力は今後も使えると思うので、大学生活においてもこれらの経験を生かしていきたい。
- ・これまで何度もプレゼンテーションをしてきたのに、(教授・学生によるアドバイスを受けて) まだまだ新しい視点や課題があるのだと客観的に振り返ることができた。
- ・(2年生 GLP として参加した) 去年は先輩任せで自分じゃ全然話せなかったけど、今回は発表毎の交流時間やお昼に自分の思ったこと、知りたいことを言うことができた。英語を話す苦手意識が減ったと思う。まだまだ道のりは長いけど、私も自分の考えをしっかりと話せるようになりたい。
- ・私のビジネスプランはベトナムに関することなのだが、私の班のファシリテーターがベトナムの方で、ベトナムについてより深く話すような交流ができた。
- ・(ファシリテーターの出身の) スリランカのことをたくさん聞いて楽しかった。ためらわずに話せるように少しはなれたので良かった。
- ・GLP の最後の活動だったため、達成感に近い満足感があった。
- ・ファシリテーターの方に、「人のプレゼンのいいところは見つけやすいけど、改善点を探すのは難しい」と言われたのが心に残り、今回の研修は特に改善点を見つけることを意識した。そのおかげであらゆる方向からプランを見ることができ、視野を広げることができた。
- ・練習をたくさんすると、スクリプトを持たなくても割と自信を持ったプレゼンができる。スクリプトが(手に)ない分、手が空いてよりプレゼンらしくなったと思う。たくさんプレゼンしてきたから、今までほど緊張しなかった。

### 【2年生 GLP】

- ・来年、自分たちがどのように発表するのか見通しを持つことができた。また、英語での発表の際に使える表現を知ることができた。
- ・(ビジネス) プランを完成させ、堂々と3年生の先輩方のように発表するためには、もっともっとプランのために出来ることはやらなければと刺激を受けることができた。
- ・ビジネスプランを先輩たちがどのような手順で作成したのか学ぶことができた。
- ・国際大学に来たのは初めてだったが、日本にいるのに外国にいるような雰囲気の中で一日過ごすことができた。改めて英語のスキルを上げなければならないと強く感じた。
- ・私は発表の際には、すぐに緊張してしまい、うまく話せなくなってしまうことが多かったが、ほんの少しの工夫をすることで質の高い発表ができることを知った。今後は、今までよりも自信を持った発表ができるようになると思う。
- ・様々な国の人と話し、第三者の意見を知ることができたり、国内にもかかわらず英語を使ったコミュニケーションを学べたりと貴重な体験ができた。
- ・観客の興味を引くプレゼンテーションとは何かがあった。また、多種多様な国から生徒が集まった国際大学の学びの場としての工夫を知った。

(5) — 2 1年生 新潟国内イマージョン研修

1 報告者	蛭田 祥友主幹教諭、 坂田 有加教諭
2 日時	令和元年 11月2日(土)～ 3日(日)
3 場所	国際大学(新潟県南魚沼市)
4 参加者	1年生 25名
5 講師	Dr. Mohammed K. Ahmed 教授      Dr. Michael Mondejar 教授
6 目的	スーパーグローバル大学創生支援に採択された国際大学は、国際的なビジネス経験を持つ留学生が9割を占める大学院大学である。その国際大学にて、外国人教授による英語の授業、外国人ファシリテーターとのディスカッションを通して英語力を強化し、多様な文化、価値観への理解を深めてグローバルな視点を養い、グローバルな課題解決に取り組むことで思考力・判断力・表現力を鍛え、グローバル・リーダーとしての資質・能力を育成する。
7 活動の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>○異文化を背景に持つことによりコミュニケーションギャップが生じる場面や会話の内容について考える。(事前学習)</li> <li>○国際大学にて異文化コミュニケーションについての講義、ファシリテーターとの実習を通じて異文化について学び、理解する。</li> <li>○国際大学にて人とのやりとりの仕方についての講義、ファシリテーターとの実習を通じて、異文化を持つ人との会話でふさわしい話題は何か、会話をどのように継続させるか、傾聴の大切さについて学び、理解する。</li> <li>○2日目のフェアウェルパーティを実践の場とし、教授陣やファシリテーターと交流、情報交換を行う。</li> <li>○事後学習会や研究発表会において本研修での成果を発表する。</li> </ul>
8 内容	<p><b>事前学習</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○研修内容と今後の流れを説明する。</li> <li>○しおりに基づいて行程の確認を行う。事前課題の提示、内容について説明する。</li> <li>○異文化コミュニケーションについての課題について英語で討議、発表する。</li> </ul> <p><b>11月2日(第1日目)</b></p> <p>東京駅集合 上越新幹線にて浦佐へ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○オリエンテーション</li> </ul> <p>国際大学(IUJ)到着後、講義室に案内される。ネームカードの作成、指定された座席に着席した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○講義「Cross Cultural Communication」 Dr. Mohammed K Ahmed</li> </ul> <p>講義室にて、Dr. Mohammed K. Ahmed 教授のリードで異文化コミュニケーションをテーマとした講義と実習に参加した。生徒2名または3名のチームに外国人ファシリテーターが1名ずつついた。10チームに分かれてすべて英語で実習を行った。ファシリテーターは7か国10名、それぞれ母国および欧米の大学を卒業後、国際社会でのビジネス経験を持つ大学院研究生である。</p> <p>■アイスブレイク</p> <p>生徒とファシリテーターがお互いに誕生日を聞き合い、Ahmed 教授を12時として時計回りに誕生日が早い者順に速やかに並んだ。全員が円を描くように並んだところで、1人ずつ自己紹介をし、氏名と出身地、誕生日を言った。</p> <p>教授が考えた表現“Super Happy Energetic Prodigiously Productive!”を起立して大げさに叫ぶことでリラックスできた。アイスブレイクを通して、ジェスチャーを用いたアピールの仕方、引き込み方の大切さを学んだ。</p>



■トレーニングセッション

教授が講義をしながら、生徒に質問を投げかけ、生徒は気づいたことや意見を発表していく講義スタイルである。教授の問いかけに、生徒は、ファシリテーターと話し合い、要点をまとめて、前に出て発表した。

・ディスカッション1

手を使って食事をとることについてどう感じるか。

・ディスカッション2

氷山に文化をたとえるのはなぜか。

・ディスカッション3

なぜ初対面で挨拶をする時に日本人はお辞儀をし、アメリカ人は握手するのか。

■ディスカッション結果の発表に対する教授の評価と解説

氷山のイラストを使って「目に見える文化」と「目に見えない文化”Deep Culture”」を考える。

日本人がお辞儀をするのは「上下関係」を重視していた「サムライ文化」を由来としている。アメリカでは自分たちは「対等」であり「フラットな文化」であることから相手の目を見て握手をする。

・ディスカッション4

国によってどういう挨拶をするのか。なぜそのような方法をとるのか。

・ディスカッション5

文化の交錯がなぜおきているのか。(事例を見て討議)

■ディスカッション結果の発表に対する教授の評価と解説

人との関わりを食品(アメリカ人:ポップコーン、日本人:納豆)に例えて、文化の背景にある価値観の違いを統計に基づいて説明する。

■キャンパスツアー

実習を一緒に行った10チームで、キャンパス内を英語で案内された。教室、図書館、体育館、トレーニングルーム、コンピューター室、24時間オープンの学習スペース、グループ談話室、寮等をまわった。寒気と雨のため、屋外に長時間出ることにはできないが、雪景色の八海山が向こうに見える緑豊かなキャンパス。冬には約3メートルの積雪になりアジア、アフリカ各地からの留学生はとても驚くという話を聞く。キャンパス内には学生寮、家族寮もある。



○宿舎での研修

■まずは、各自で振り返る時間として、1日目の学びと感想をまとめた。

その後、ランダムに編成した5グループに分かれ、初日の講義で何を学んだか、気づいたことについて一人ひとりが振り返りグループ内で協議した、そして、代表者が発表しながら、明日の研修や今後に生かせるように皆で共有し協議しあった。一人ひとり実りのある振り返りの時間となった。

■フェアウェルパーティーで歌うお礼の歌、「満月の夕」を練習した。

■翌日のフェアウェルパーティーでお世話になった教授、ファシリテーター、スタッフに渡す Thank you card を作成した。

11月3日(第2日目)

○講義 「Socializing」 Dr. Michael Mondejar

講義室にて、Dr. Michael Mondejar 教授のリードで、生徒2名または3名のチームに外国人ファシリテーターが1~2名ずつついた11チームに分かれてすべて英語で実習を行った。

■アイスブレイク

まずは、教授から、アメリカでの挨拶の仕方をならい、その場にいるいろんな人たちと挨拶をしてみる。その後、ファシリテーターの母国の挨拶を紹介し、実際にその挨拶

をやってみる。

教授が講義をしながら、生徒に質問を投げかけ、生徒はファシリテーターと話し合い意見を出し合った。ファシリテーターの多くは、グローバル企業等での国際ビジネス経験を持ち、国際社会での実用的なコミュニケーションを指導してもらった。

#### ■トレーニングセッション①

人物描写がされているカードが渡され、立ち上がって自分で会話をするパートナーを見つけ、描写された人物になりきって話を続けた。2分ごとにパートナーを変え、多くの人と実践練習を行った。

##### ・ディスカッション1

今日の授業で何を学んだか。

文化の違う初対面の人との会話で、やりとりをスムーズにするトピックと避けるべきトピックを討議した。

教授が講義をしながら、生徒に質問を投げかけ、生徒はファシリテーターと話し合い意見を出し合った。ファシリテーターの多くは、グローバル企業等での国際ビジネス経験を持ち、国際社会での実用的なコミュニケーションを指導してもらった。

#### ■トレーニングセッション②

続いて適切なトピックについて会話を続ける練習を行った。その際トランプを均等に配布し、質問をする時には「赤いカード」、質問に答える、または意見を述べる時には「黒いカード」を出し、早くカードがなくなった者が勝利、というゲーム感覚で実習を行った。

##### ・ディスカッション1

トレーニングセッション②の活動から何を学んだか。

##### ・ディスカッション2

「聴」という漢字は何を表しているのか。

#### ■ディスカッション結果の発表に対する教授の評価と解説

「聴」という漢字は「耳」「目」「注意を引く」「心」をいう意味が含まれており、対話のやりとりには「傾聴」が大切であると訴えた。

#### ■トレーニングセッション③

対面式に2列になり、トピックが変わるごとに片側に座っている生徒がローテーションで移り、パートナーを変えながら会話実習を行った。提示されるトピックについて1人が2分間話しをし、パートナーは相づちやアイコンタクトなどのリアクションをしながら聞き続けた。

##### ・ディスカッション1

日本の中で好きな場所はどこか。

##### ・ディスカッション2

学校生活で難しいことは何か。

##### ・ディスカッション3

尊敬する人は誰か。

#### ■対話を続けるための秘訣と方法について教授の解説

「聞く側」は相手に興味を示すことが大切。激励の言葉をかける、コメントを加える、質問を強調する、相手の言葉を繰り返す、アイコンタクトや表情、ジェスチャーを示しながら話を聞く、など。

「話し手」は話しに詰まった時に使える表現、態度で示す方法などを解説した。対話において必要なことは「適切なトピック」について「前向きな態度で聴き」、「一方通行に話すのではなく交代で話す」ことである。

#### ■トレーニングセッション④

全員立ち上がり、ワークシートに書いてある条件を満たす仲間を探すビンゴゲームを行った。(例：ペットを飼っている人、など) 同じパートナーに2つ以上の質問をすることは認められず、時間内に多くの仲間と話すことを目的としていた。



	<p>・ディスカッション1 今日の授業で何を学んだか。</p> <p>■ディスカッション結果の発表に対する教授の評価と解説 1日目の異文化コミュニケーションを土台に、違う文化を持つ人々との実践的な会話のマナーとテクニックについて解説した。外国語を話すことはチャレンジングなことではあるが、おもしろく楽しみを見出すものだ、とまとめた。</p>  <p>○フェアウェルパーティー 世界各国の料理をいただきながら、生徒達は、教授や2日間お世話になったファシリテーターの方々と積極的に会話を楽しんでいた。手作りの Thank you card を感謝のことばとともに渡していた。 生徒代表がお礼の言葉を述べた後、生徒全員で「満月の夕」を合唱した。</p> <p>○国際大学からの帰路 ファシリテーター、スーパーグローバル大学推進室職員に見送られつつ国際大学を去り、新幹線車内で振り返りを行いながら帰途についた。</p>
9 成果	<p>英語を公用語とする国際大学で、生徒たちは多国籍の方々との交流を通して、英語力の向上だけではなく、多様な文化、価値観を理解し、グローバルな視点を養うことができた。</p> <p>Ahmed 教授、Mondejar 教授の講義では、異文化コミュニケーションや人とのやりとりをテーマに様々な事象にあたり、異文化への理解を深めただけではなく、一つのものごとを様々な視点で捉えることを体験した。また、外国人ファシリテーターと一緒に学ぶことで、グローバルな価値観を実感することができた。教授とファシリテーターの方々の丁寧なご指導とご支援に感謝したい。</p> <p>また、グループ単位でのキャンパスツアーやフェアウェルパーティーでは、生徒の質問に教授やファシリテーターの方々が丁寧に答えてくださり、生徒たちはそれぞれの出身国の文化や課題と日本の課題などについて気づき、理解を深めた。 今回の研修は大変有意義なものであり、今後も継続できることが望ましい。</p> <p>〈以下は生徒の報告書より抜粋〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講義は二つだったが、今後活かせる多くの経験ができ、非常に有意義な研修だった。今後も他の文化をもつ人たちと交流し、文化の違いに気づく回数を増やしていきたい。</li> <li>・今回の研修では「積極的に活動し、英語力を up する」ということを目標に活動した。この研修を通して、文化とはとても深いものであり、そこには歴史的背景のような目に見えなくて体感できないものもあれば、目に見え自分が実践、体験できるものもあることが分かった。インターネットが身近になり、調べることが容易になった現代ではあるが、自分が体験できるものは積極的に行動に移し、行動に移せない部分においてもできる限り理解していくことを意識しながら、今後行動していきたい。</li> <li>・今回は、「何事にも積極的に自分から取り組む」「異文化の違いを楽しむ」の二つの目標を掲げた。ファシリテーターを通して、様々な文化に触れることができた。日本人は、譲り合う文化であることに触れ、譲り合いすぎであることも指摘された。英語が上手に話せず、通じなかったら嫌だと思ふ気持ちが先行して、なかなか会話を続けることが困難であったが、勇気を出して自分から話題をふって話しかけると、非常に喜んでもらえた。通じない英語を話されることよりも、話しかけないことの方が、相手は嫌だということもわかった。文化の違いに触れ、共有し合うことは楽しく、新たな視点ももて</li> </ul>

発見もあった。カルチャーショックよりもカルチャーエンジョイしながら、文化の違いを楽しみたい。

・今回の研修で様々な人と関わる場においては積極性が大切なのだと感じた。コミュニケーションは人間関係を円滑にするための重要なツールであると理解できた。今後も人生の中で様々な人に会う機会があると思うが、積極的にコミュニケーションをとっていききたい。そして、世界には様々な文化の違いがあるが、今回はそれを肌で感じる事ができた。その一方で、文化の違う人が同じ空間で一緒に行動することができることも感じた。文化の違いを理解し、意識することも大切だが、「同じところ」もたくさんあると思う。それらを発見できれば、文化の違う人も身近に感じられるのではないか。これからは、「文化の共通点」も知っていききたいと思った。

・1日目に受けたモハメッド教授の授業では、文化は、実際にはまるで氷山のように、目に見える部分はほんの一部であり、本当はもっと奥深くまであることを私たちは知らないだけなのだということ学んだ。そして、それにとっても納得できた。そしてそれらを理解するためには、実際にその文化を持つ人と積極的にコミュニケーションをとっていくことが大切だと学んだ。2日目の講義では、特にリアクションの部分を鍛えられた。最初に話すのに適さない話題も知れた。ベトナムでは、将来の夢は初めての話題に適さないようだ。他の国の人と出会うことが今後多くなると思うので、初めてのトピックは意識したい。

・自分は大学や社会でコンピュータサイエンスを行う上で、外国から来た人々とのコミュニケーションをうまくとる必要性を感じ、今回は研修に参加した。異文化理解とコミュニケーションの作法について学んだが、どちらも有意義なものになった。コミュニケーションの取り方も学べたため、目標は達成できた。また、異文化交流も目標には入れていなかったが、良い技能だと考えた。今回学んだことは、異文化交流においても必要なことであるが、日常的な場面でも大きな力になると思う。特に、I'm super happy~の志は、将来忘れることのないように心に刻んでおきたい。今後はもう少しテンションをあげて、明るくコミュニケーションをとっていききたい。

・他国の方とかかわりを持つ機会の少なかった私にとって今回の研修は、本当に貴重な経験だった。キャンパスツアーやフェアウェルパーティは、長い時間、話ができる機会なのでとてもためになった。

2日目は誰かが率先してやるという場面が多かったため、私は今まで積極性にかけていたことに気づかされた。コツコツ地道に頑張る続けることも大切だが、一つ質問を投げしてみる、少し会話を踏み込んでみる、手を挙げるといった勇気とチャレンジする頑張りも大切であると強く感じた。

・2日間を通して、ファシリテーターの人たちと仲良くなれたのが嬉しかった。ファシリテーターと話していると、その人の個性や性格が次第に見えてきて、最終的にはどのファシリテーターも自分の友達の誰かに似ているなと気づいたのが面白かった。この体験から、僕は外国人だからという理由で変な緊張感や気遣いをもたずに、一人の人間としてその人の内面に目を向けることが仲良くなるための秘訣なのかなと思った。

・「もっと積極的になりたい」と1日目の振り返りであったのに、全然変われなかったところに66期全体として、弱さを感じた。先生はよくなったと評価してくださったが、まだまだだと思う。グローバルビレッジでも誰かに任せる姿勢が多く見受けられたため、66期全体の課題であると感じた。発表の時に共有したい。

・この研修で学んだ積極性の大切さ、上手なコミュニケーションの取り方などは、今後どんな場面でも大切になると思うので、いつでも心にとめて実行していききたい。また、英語の授業をはじめとして英語を誰かと話し合うような場面では、英語脳への切り替えや恥ずかしがらずに喋ることも継続して行いたい。スムーズなコミュニケーションができるよう、何よりもコミュニケーションを楽しんでいくことも大切にしていきたい。

(6) 2年生 TRY&ACT

南高校附属中学校の総合的な学習の時間 EGG で培ったコミュニケーション力、高校1年生の Diversity & Inclusion と協働する力を育てる TRY、東南アジアの課題発見のための探究活動、デザイン思考講座を土台として、東南アジアの課題を解決するビジネスプランを作成し、課題解決力を身につけた。ACTは、中高一貫教育校として、6年間の総合的な学習の時間を通して、グローバルな課題を、国境を越えて協働して解決し、世界に貢献する人材の育成をめざす探究の根幹となる。

また、年間数回の取組の区切りにおいて、ループリックに基づく生徒の探究活動と発表の評価を行った。達成度を数値化し、教職員で共有して指導方針を修正し、生徒の探究力、発表力等の向上を図った。

年間活動スケジュール

4月18日(木)	「TRY&ACTのねらい、ACTのゴール、年間計画等の説明
4月25日(木)	ビジネスプラン作成①課題を明確にし、課題の解決策を練り上げる
5月16日(木)	ビジネスプラン作成②課題を明確にし、課題の解決策を練り上げる
5月25日(土)	デザイン思考ワークショップ ペルソナ分析と解決方法の考案
5月30日(木)	ビジネスプラン作成③ 課題解決策を練り上げる
6月20日(木)	国際大学コミュニケーションワークショップ プレゼンスキル
6月25日(火)	B&S説明会 シンガポール海外研修でのフィールドワーク
7月3日(水)	B&S行動計画作成①
7月11日(木)	3学年合同 TRY&ACT 情報交換会
7月16日(火)	B&S行動計画作成②➡ 7月19日(金) B&S行動計画提出
8月29日(木)	B&S行動計画作成 行動計画修正
9月12日(木)	シンガポール海外研修事前研修①
9月19日(木)	イマージョン研修報告会 研修の学びを共有する
9月26日(木)	シンガポール海外研修事前研修②
10月1日～5日	シンガポール海外研修 フィールドワーク B&S 現地調査
10月10日(木)	SGH研究発表会に向けての準備① 調査結果を共有 ポスター制作
10月24日(木)	SGH研究発表会に向けての準備② ポスター制作
10月30日～	ポスター制作・発表準備 11月6日まで
11月7日(木)	SGH研究発表会に向けての準備・リハーサル
11月8日(金)	SGH研究発表会 研究の成果を発表
11月14日(木)	TRY&ACT報告書の制作① 研究発表会の振り返り
12月5日(木)	TRY&ACT報告書の制作②
12月12日(木)	TRY&ACT報告書の制作③
1月9日(木)	TRY&ACT報告書の制作④
1月16日(木)	TRY&ACT報告書の制作⑤
1月23日(木)	SGH研究発表会(GLP)・イマージョン研修報告会

	デザイン思考ワークショップ
1 日時	平成31年4月20日(土)
2 場所	大会議室、図書館、食堂
3 参加者	2年生 195名
4 講師	一般社団法人ウィルドア 講師8名、卒業生8名
5 内容	<p>デザイン思考を使った課題の解決方法を習得し、プロトタイプ作りの手法を習得する・インタビュー・ユーザーテストの手法を習得する・説得力のあるポスター資料作成とプレゼンテーションスキルを習得することを目的とした。</p> <p>卒業生がアシスタントとして加わり、生徒の助言にあたった。</p> <p>具体的には、デザイン思考を用いて、社会問題を発見し、解決するアイデアを策定する。2年生は、ワークショップにおいて、グループワークにてその社会的課題をさらに深掘りする。デザイン思考の方法論に基づいて、解決すべき問題を定義し、具体的な解決仮説を策定した。</p> <p>さらにペルソナ分析の手法に基づいて、インタビューを通じたヒアリング調査演習を行うことで、解決仮説に不足している点を再度検討し、最終的には以前のものよりも練度の高い解決策を、実際に手を動かしながら策定する。そのなかで、高校2年生は課題解決に必要とする時間を多めに取った。</p> <p>また、この時間内にプロトタイプを作り、インタビューやフィードバックを通じて更に作り直すという経験を体感し、仮説検証と構築のフローを高速で回すことを目標とした。</p>
6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講座を通して、特にどこに注目して、どんな観点でどんな解決方法を取ってあげれば良いかがよくわかった。</li> <li>・グループでポストイットを使って、互いの意見を聞いてさらに発想を重ねながら、大雑把な概略からアイデアを絞り込んでいくことがデッサンを描くようだった。</li> <li>・ペルソナ分析の実習を通して、具体的なターゲットとなる人物を想定して、深層心理にあるニーズを引き出す方法に感激した。</li> <li>・お客さんのニーズが分かっても、そこから実現性のあるプランを考えるのがとても難しいことが分かった。</li> <li>・プロトタイプをつくってから、試作を繰り返してターゲットの課題の解決に近づいていくことが大変だけど楽しいと思った。</li> <li>・デザインするとき、人物になりきることで消費者の視点に立つことができた。</li> <li>・顧客になりきることで、顧客が持っている課題や必要性が見えてくる気がした。</li> <li>・相手の人の話をじっくりと聞いて共感できる体験を通して、相手に寄り添うことで潜在意識の中にある本人も気づいていない課題が見つかるのがすごいと思った。</li> </ul>

	国際大学異文化コミュニケーション研修
1 日時	令和元年6月20日(木)
2 場所	南高ホール
3 参加者	2年生 195名
4 講師	国際大学 国際経営学研究科 Mohammed K. Ahmed (アーマッド) 教授
5 内容	<p>SGHプログラムの一環として、世界の多様な文化を持つ人々とのコミュニケーション能力を伸ばし、グローバルな問題の実践的解決に貢献できるリーダーの育成を目指す。国際大学での国内イマージョン研修で指導いただいている講師を本校に招聘し、2年生の学年全体に対して発展的な研修を行った。</p> <p>本研修では国内イマージョン研修参加者がリードし、生徒たちは異文化社会の背景にある歴史や価値観の相違を理解したうえで、スムーズなコミュニケーションを行うためのスキルを学んで演習を行った。</p>

	イマージョン研修報告会
1 日時	令和元年9月19日(木)
2 場所	南高ホール
3 参加者	1年生全員、2年生全員
4 発表者	シンガポール海外イマージョン研修(1年生)8名、ベトナム海外イマージョン研修(2年生)8名、国際大学(新潟)国内イマージョン研修(2年生)8名
5 内容	シンガポール海外イマージョン研修、ベトナム海外イマージョン研修、国際大学(新潟)国内イマージョン研修の参加生徒の英語による研修報告を通して、1年生全員、2年生全員が情報を共有し資質能力を高める。
6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>海外での体験談を聞いて、文化の違う人たちと一緒に働くには、異文化を理解し受け入れることが大切だとよくわかった。</li> <li>シンガポールがアジアにおけるハブの役割を果たしていること、ベトナムに進出している日系企業の活動が分かった。</li> <li>異文化理解のためには、言語を学ばばいいという訳ではないことが分かった。</li> <li>シンガポール、ベトナム、日本の文化の違いが分かって面白いと思った。</li> <li>グローバル社会では、文化や価値観の違いをよく理解したうえで、コミュニケーションを取らなくてはいけないことがわかった。</li> </ul>

	SGH 研究発表会 (GLP 研究発表)・国内イマージョン研修報告会
1 日時	令和2年1月23日(木)
2 場所	南高ホール
3 参加者	1年生194名 2年生195名
4 発表者	2年生GLP(グローバルリーダープロジェクト)12名6チーム 1年生国内イマージョン研修参加者25名(新潟県国際大学で実施)
5 内容	2年生GLP12名6チームによる東南アジアの課題を解決するビジネスプラン研究の発表と、1年生国際大学国内イマージョン研修25名の参加生徒による研修の報告を行った。この発表と報告を通して、GLP、国内イマージョン研修参加者がグローバル・リーダー育成のための研修で得た情報・体験を、1年生、2年生全体で共有し、全体の資質と能力を高めた。
6 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際大学での国内イマージョン研修を通して、文化や価値観の違う人たちとどのように理解し合い、コミュニケーションを行えばよいか分かった。</li> <li>ビジネスプランをつくるきっかけとなった人物が持つ課題を見つけることがとても難しく、また大切だと思う。</li> <li>チーム「ますだぶる」の二人がベトナムで緑豆を見つけて、そこから熱中症の対策になる商品を実現したことに感激した。</li> <li>相手の立場に立つ視点が解決策を考えるときに大切だと思った。</li> <li>自分で企業や大学と連絡を取って行動する力がすごいと思った。</li> <li>グローバルな視野を持つことと、英語の力を持つことが重要だとわかった。</li> <li>外国の人と話すことから文化の違いを理解し、互いに尊敬できるようになることを知った。</li> </ul>



(7) 2年生 グローバルリーダープロジェクト (GLP)

2年生希望者から選抜したチーム GLP では、企業、大学等のビジネスの専門家の指導により起業する力を養い、東南アジアの課題を解決する実現性の高いビジネスプランを作成して発表し、実行することをめざす。南高校附属中学校で培ったコミュニケーション力、高校1年生 TRY で探究したダイバーシティと SDGs を土台に、GLP の探究活動を通して、グローバルな視点からの主体的な課題解決力と実行力を身につけた。

	GLP の活動														
1 場 所	本校図書館グループ閲覧室、南高ホール、慶応大学 SFC 等														
2 参加者	2年生 GLP (グローバルリーダープロジェクト) 12名														
3 講 師	株式会社日本政策金融公庫 横浜市立大学 慶応義塾大学、アメリカ大使館等														
4 内 容	<p>① ソーシャルビジネスプランの作成</p> <p>「東南アジアの課題解決に貢献できるビジネスプランをたて、起業に向けた行動計画を作成する」ことをテーマに、SGH 全国高校生フォーラム、高校生ビジネスプラン・グランプリ、1月のSGH 研究発表会等にて研究発表することを目指して、ビジネスプランを作成した。</p> <p>2年生希望者から選抜された12名が、担当教員による継続的な会話分析と指導の上に、デザイン思考を取り入れた探究活動を主体的、対話的に展開し、実践的なビジネスの手法について、日本政策金融公庫、横浜市立大学、慶応大学、アメリカ大使館、リコー研究所、神奈川県産業振興センターよろず支援拠点の方々のお言葉をいただき、ベトナム海外イマージョン研修、シンガポール海外研修でのインタビューなどの現地調査を実施してビジネスプランと収支計画を練りあげ、実現性の高いビジネスプランの構築をめざした。これらの探究活動を振り返って本人たちは、企画力、課題解決能力、表現力、起業力、協働力を身につけて深い学びを得た。</p> <p>②SDGsーポジティブインパクト</p> <p>地球上の誰一人として取り残さない (Leave no one behind) ことを目指し、持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成されるSDGsにポジティブで社会的インパクトのあるビジネスプランを探究してきた。</p> <p>GLP 中のチーム名と探究したビジネスプランの概要は次の通りである。</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">(チーム名)</td> <td style="text-align: center;">(ビジネスプランのタイトル)</td> </tr> <tr> <td>石川さんと小林さん</td> <td>「わらぶくろ」で鹿を救おう!</td> </tr> <tr> <td>ますだぶる</td> <td>GREEN な BEAN が熱中症対策に E E</td> </tr> <tr> <td>Earth、うずまき &amp; Fire</td> <td>外国人材のリクルートサービス</td> </tr> <tr> <td>weven</td> <td>BUILD AMR カードゲームで守ろう未来</td> </tr> <tr> <td>イデアル</td> <td>遊んでいるだけなのに脳スッキリ、英語バッチリ</td> </tr> <tr> <td>おじさんの味方</td> <td>家族を幸せにする香水～家庭での会話をふやしたい!</td> </tr> </table> <p>SDGs は包括的に考えるものではあるが、生徒たちが自分のこととして捉えるために17のゴールごとに「横浜市立南高等学校が世界で目指すSDGs2019-2020」を検討し、学校全体で共有を図った。</p> <p>「ますだぶる」は、早稲田大学や企業、地域の製造業者と連携して、全国高校生フォーラムで発表を行ったほか、高校生ビジネスプラングランプリで、全国3,808件の応募の中からBest10に選ばれ、最終審査会で優秀賞を獲得した。また、慶応大学主催のTOMODACHI セミナーで日本代表に選ばれ、アメリカで国際大会に出場した。</p> <p>「石川さんと小林さん」は上記のグランプリでBest100に入り、横浜市温暖化対策統括本部ヨコハマSDGs デザインセンターや企業と連携し、世界トライアスロン大会の支援を受けて、製品を製作し成田空港での販売事業を目指して展開中である。</p>	(チーム名)	(ビジネスプランのタイトル)	石川さんと小林さん	「わらぶくろ」で鹿を救おう!	ますだぶる	GREEN な BEAN が熱中症対策に E E	Earth、うずまき & Fire	外国人材のリクルートサービス	weven	BUILD AMR カードゲームで守ろう未来	イデアル	遊んでいるだけなのに脳スッキリ、英語バッチリ	おじさんの味方	家族を幸せにする香水～家庭での会話をふやしたい!
(チーム名)	(ビジネスプランのタイトル)														
石川さんと小林さん	「わらぶくろ」で鹿を救おう!														
ますだぶる	GREEN な BEAN が熱中症対策に E E														
Earth、うずまき & Fire	外国人材のリクルートサービス														
weven	BUILD AMR カードゲームで守ろう未来														
イデアル	遊んでいるだけなのに脳スッキリ、英語バッチリ														
おじさんの味方	家族を幸せにする香水～家庭での会話をふやしたい!														

GLP 年間活動記録（3年での予定を含む）

2019年度 65期 GLP（グローバルリーダープロジェクト）年間計画

目的 東南アジアの現状から学んだことを生かしてビジネスプランを作成して、実践的な起業する力を養い、グローバルリーダーを育成する。

GOAL 1月23日（木）GLP 研究発表会（南高ホール）  
（全国高校生ビジネスプラングランプリ出場。最終ゴールは3年生5月の国連大学での研究発表）

課題 東南アジア研究を通して、東南アジアや日本における実践的なビジネスプランを作成する。  
\*実践的なビジネスプラン=目的・作成計画・顧客層・経営資源・収支計画・調査結果等のビジネス計画

グループ編成 GLP 内で、東南アジア研究において、同じ（または近い）関心を持つ2～4名のグループを編成する。

講師 日本政策金融公庫、横浜市大、県よろず支援拠点、アメリカ大使館、東大、慶応大、リコー、三崎恵水産ほか

海外研修 ベトナム（ホーチミン）

2 年 探 究 活 動	4月18日（木）	課題設定	課題の検討、年間計画	担当教員
	4月25日（木）	ビジネスプラン作成法	考え方と手法	日本政策金融公庫
	5月16日（木）	米国大使館講座	キャリア教育	米国外交官
	5月25日（土）	ビジネスプランにアドバイス	T&Aの後にGLP特別アドバイス	東大ウィルドア
	6月6日（木）	ビジネスプラン作成	ビジネスプラン相談会	日本政策金融公庫
	6月8日（土）	オープンイノベーション講座	リコー研究所（海老名）	リコー・日本政策金融公庫
	6月20日（木）	国内イマージョン研修事前学習	講演会後にGLPに特別講義	国際大学（新潟）
	7月9日（火）	慶応大学 SFC 企業家養成講座	起業スキルとビジネスプラン相談	慶応大学・日本政策金融公庫
	7月13日（土）	新潟3年GLP研究発表	3年全員と2年GLP希望者	国際大学（新潟）
	7月16日（火）	B&S 行動計画、ビジネスプラン	実証実験の方法を考える	担当職員
	7月19日（金）	三崎恵水産訪問	GLP+1年イマージョン	三崎恵水産社員
	7月23日（火）	ビジネスプラン相談会	ビジネスプラン修正	日本政策金融公庫
	7月25日（木）	ビジネスプラン・ブラッシュアップ	ビジネスプラン修正	市大 芦澤美智子准教授
	7月30日～8月3日	ベトナムイマージョン	GLPから8名	引率教員
	8月21日（水）	ビジネスプラン中間発表準備	パワポ完成、発表練習	担当職員 卒業生
	8月22日（木）	ビジネスプラン中間発表会	ビジネスプラン発表と修正	会場 市立中央図書館
	8月23日（金）	ハワイの高校とnetで交流	互いの国のSDGs 課題を探究	担当教員
	8月29日（木）	ビジネスプランシート修正	ビジネスプランシート修正	担当教員
	9月12日（木）	ビジネスプランシート修正	7限のT&Aの後に実施	日本政策金融公庫
	9月19日（木）	ビジネスプランシートデータ提出	7限のT&Aの後に実施	担当教員
	10月1～5日	シンガポール海外研修フィールドワーク（B&S）		学年
	10月10日（木）	研究発表準備	海外研修成果による修正	担当教員
	10月24日（木）	ビジネスプランブラッシュアップ	市大教授によるアドバイス	市大 吉田栄一教授
	10月28日（月）	NASA 講座「人類は再び月に行く」	宇宙からの視点を持つ	NASA 文科省 市教育委員会
	11月7日（木）	研究発表準備	発表リハ	担当教員
	11月8日（金）	研究発表会（ポスターセッション）	メインアリーナ	全職員
	11月14日（木）	論文作成	ビジネスプランシートを編集	担当教員
	12月5日（木）	原稿作成・パワポ作成	作業	担当教員
	12月12日（木）	発表リハ（12/20 予備日）	南高ホールでリハ	担当教員
	1月9日（木）	発表リハ	南高ホールでリハ	担当教員
	1月12日（日）	高校生ビジネスプラングランプリ最終審査会に出場		日本政策金融公庫主催
	1月16日（木）	発表リハ	南高ホールでリハ	担当教員
	1月21・22日	発表リハ	南高ホールでリハ	担当教員
	1月23日（木）	SGH 研究発表会	ホールで1・2年に向けて	大学・企業より講評
～3月	論文修正・校正	参考文献欄作成・校正	担当教員	
3月25日（水）	横浜市課題探究発表会（中止）	サイエンスフロンティア高校	横浜市教育委員会	
3 年	年間	論文作成・校正	3年間の集大成	担当教員
	5月	プレゼン準備	プレゼンリハ	担当教員
	5月30日（土）	新潟3年GLP研究発表	2・3年GLP	国連大学（東京）

## 横浜市立南高等学校が世界で目指す SDGs2019-2020



本校では1年生のグローバルビレッジ研修や2年生のGLPで、SDGsワークショップを行い、17のゴールと169のターゲットに沿って、日本を含めた世界の国々の現状を学んでいます。これは南高校の生徒たちが考えた「私たちにできることの中から、私たちが目指す目標」です。

**1 貧困をなくそう**  
あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ

被災国から直輸入して生産者を支援しよう  
貧困の奥底にある本質的な問題を探究しよう  
パンの缶詰の救世鳥プロジェクトに参加しよう

**2 飢餓をゼロに**  
飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する

学校食堂にテーブルフーズを取り入れよう  
フェアトレードの商品を購入しよう  
フードバンクに寄付しよう

**3 すべての人に健康と福祉を**  
あらゆる年齢のすべての人の健康的な生活を確保し、福祉を推進する

手洗い・マスクの習慣を世界に広めよう  
緑豆パウダーで熱中症をゼロにしよう  
カードゲームでAMRの正しい知識を広めよう

**4 質の高い教育をみんなに**  
すべての人に包摂的(※)かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

カードゲームで身につく英語学習を広めよう  
不要な文房具を必要な国に送ろう  
防災教育を世界に広めて命を守ろう

**5 ジェンダー平等を実現しよう**  
ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワメントを図る

Diversity & Inclusion を理解し、ジェンダーという言葉がいらぬ世界を目指そう  
「らしさ」を決めつけないようにしましょう

**6 安全な水とトイレを世界中に**  
すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する

シンガポール海外研修で学んだきれいな水の作り方を世界に伝えよう  
食器の汚れをふいて生活排水を減らそう

**7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに**  
すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する

太陽発電パネルで発電しよう  
電球をLEDに変えよう  
打ち水や着る服で温度調整しよう

**8 働きがいも経済成長も**  
すべての人のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワーク(働きがいのある人間らしい仕事)を推進する

高校時代から自分にできる役割を見つけよう  
外国人のリクルートアプリをつくらう  
AIにできない仕事を見つけよう

9 産業と技術革新の基盤をつくろう



9. 産業と技術革新の基盤をつくろう

強靱なインフラを整備し、包括的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る

身近な発明で世界を変えよう  
環境にやさしい公共の交通機関を使おう  
理想の未来から現在の自分を逆算しよう

10 人や国の不平等をなくそう



10. 人や国の不平等をなくそう

国内および国家間の格差を是正する

相手の立場に立って考えてみよう  
Respect others  
上から目線になってないか気を付けよう

11 住み続けられるまちづくりを



11. 住み続けられるまちづくりを

都市と人間の居住地を包括的、安全、強靱かつ持続可能にする

Society5.0 に合ったスマートシティをつくろう  
災害に強い町づくりをしよう  
横浜市のオンデマンドバスを全国に広めよう

12 つくる責任 つかう責任



12. つくる責任 つかう責任

持続可能な消費と生産のパターンを確保する

フェアトレード商品を買おう  
エシカルな買い物を楽しもう  
放置傘を集めて傘スタンドを町に設置しよう

13 気候変動に具体的な対策を



13. 気候変動に具体的な対策を

気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る

WWF 世界キャンペーンの日、照明を消そう  
エアコンの設定を控えめにしよう  
お風呂にふたをして追い炊きを減らそう

14 海の豊かさを守ろう



14. 海の豊かさを守ろう

海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する

レジ袋を減らしてマイクロプラスチックを削減しよう  
海に行ったらプラゴミを1つ拾おう  
ウッドストローを使おう

15 陸の豊かさも守ろう



15. 陸の豊かさも守ろう

陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る

わら袋で作ったエコバッグを世界に広めよう  
紙のムダ使いはやめよう  
身の回りに緑を植えよう

16 平和と公正をすべての人に



16. 平和と公正をすべての人に

持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する

小さな意見を取り入れ小さな意見を発信しよう  
心に暴力が育つものにはふれず、平和が育つものにふれよう

17 パートナーシップで目標を達成しよう



17. パートナーシップで目標を達成しよう

持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

ハーブの香水でお父さんの匂いを消して家族の会話を増やそう  
SDGs に役立つ投稿「いいね」でシェアしよう  
世界で SDGs に取り組む人たちと知り合おう

(8) 2年生G L P 令和元年度ベトナム海外イマージョン研修

1 報告者	蛭田祥友教諭、北見容子教諭
2 日時	7月30日(火)～8月3日(土)
3 場所	ベトナム社会主義共和国ホーチミン市内とその周辺
4 参加者	2年生 8名
5 講師等	在ホーチミン日本国総領事館 領事及び副領事 ホーチミン日本商工会議所 事務局長 ベトナム味の素社 社員 カンザー国立公園運営会社 副社長 マングローブ植林行動計画 職員
6 目的	<p>○在ホーチミン日本国総領事館・日本商工会議所の訪問を通して、日本の国際的支援の役割を実感する。</p> <p>○日本企業の海外法人を見学し、日本の技術や企業の理念がベトナムで活用されている実態を学ぶと同時に、日本企業のベトナムでの役割について考える。</p> <p>○戦争証跡博物館を訪問し、数多くの貴重な資料に触れ、ベトナムの歴史・ベトナム戦争について学ぶ。</p> <p>○カンザー国立公園のマングローブ植林体験を通じ、ベトナムの負の歴史であるベトナム戦争と枯葉剤の被害を実感する。その中で平和の大切さと地球環境保護の重要性を再認識する。</p> <p>○上記の活動を通じ、論理的思考力・コミュニケーション力・幅広い教養を育て、次世代ビジネスリーダーとしての素養を身につけさせる。</p> <p>○帰国後、成果を同学年の生徒や後輩に発表することで学校全体の課題研究の質を向上させる。</p>
7 活動の概要	<p>○ベトナムにおける日本の関わり方やベトナムの社会・歴史・文化について学ぶ。</p> <p>○生徒は各自課題意識をもって事前にテーマを設定している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「環境にやさしいレジ袋の開発」</li> <li>■ 「薬剤耐性菌の理解を促進するカードゲームの開発」</li> <li>■ 「英単語カードゲーム」</li> <li>■ 「自然にやさしい原料を用いたの男性用香水の開発」</li> <li>■ 「緑豆を使った熱中症対策」</li> </ul> <p>○現地滞在中は各訪問先でお話を伺うと同時に、調査(現地の市場やデパートで実際に買い物をし、現地の方々と交流し実地調査)やアンケート(訪問先の従業員に対して)を行い、理解を深めた。</p> <p>○帰国後、報告会や研究発表会において本研修での成果を発表する。</p>
8 内容	<p><b>事前学習</b></p> <p>○『物語ベトナムの歴史』(中公新書)を読んでベトナムの歴史等について学習する。</p> <p>○青年海外協力協会(JOCA)の講師による、ベトナムでの青年海外協力隊員(JICA)の活動について講演を聞く。</p> <p>○ベトナム国の概要・ベトナム戦争・訪問先企業や訪問場所をインターネット等で調べ、しおり原稿を作成する</p> <p>○現地での視察において質問、調査することを各自まとめて持参資料とする。</p> <p>○現地で行うアンケート用紙を作成し、JOCA 担当者に翻訳依頼をする。</p>

7月30日（第1日目）

成田空港よりタンソンニャット空港へ（VN301）

全員時間通りに集合し、ベトナムへ。

○タンソンニャット空港着

現地ガイドと合流した直後に猛烈なスコールとなり、雨の力強さの違いに驚愕する。その後、専用車で移動。

○戦争証跡博物館

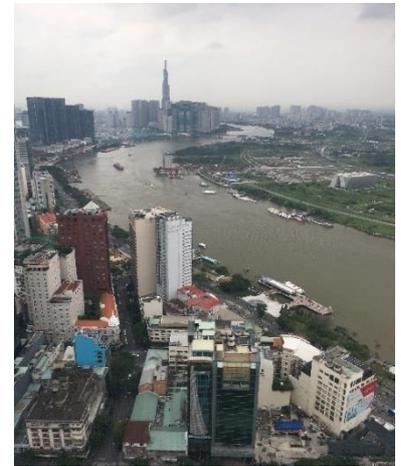
ベトナム戦争について学ぶ。屋外に展示されている実際に使用された戦車や戦闘機、今も残されているギロチン、牢獄、室内に展示されている膨大な写真や記録資料を見学。ベトナム戦争で犠牲になった多くの方々の写真、枯葉剤の影響で体が不自由な方々による実際の楽器演奏も見学できた。生徒たちにとっては書籍やインターネットの情報で理解していたことを目の

の当たりにしての実体験であった。館内は欧米人が多い。夏休みを利用してのベトナム観光と思われるが、彼らの真剣な眼差しで時には熱心に語り合いながら展示物に向き合っている姿が印象深い。その日の夜の振り返りでは、「ここに来て、事実を知ることができてよかった、知らなかった自分がふがいない」と思いを口にする生徒もいた。我々は戦争が起こった原因を分析し、戦争などもう二度と起こしてはならないこと、国境の垣根を越えて国際的な問題に向き合っていく時代であること、を皆で再確認した。



○サイゴンスカイデッキ

68階建てのフィナンシャルタワー49階にあるスカイデッキからサイゴン川が蛇行するホーチミン市内を一望することができ、街の区分けがはっきりと見てとれた。中心部はホテルやデパートが並ぶ1区、欧米人が多く住むという高級住宅街が並ぶ2区、緑豊かな新興住宅地の7区など、等しく発展しつつも各区によって特徴が異なっている姿が興味深かった。新興住宅やビルの建設が加速度的に進む一方で、ビルの合間にはトタン屋根の低層階の家が少なからず存在する。様々なものことの新旧の混ざり合いが今のホーチミン市の特徴とも言える。



○ホテルロビーにてミーティング・振り返り

戦争証跡博物館見学では生徒それぞれが気持ちを上手にまとめられないほど大きな衝撃を受けたようである。また、バスの中から見るとホーチミン市のすさまじいバイク量と人々のマスク姿に目を見張り、さらには突発的なスコールやアオザイを着ている人がいなくて少しがっかりしたなど、様々な異文化発見があった。スカイデッキから見た街並みに貧富の差を感じたという生徒に JOCA の新関さんよりトタン屋根イコール貧しいというわけではないことを教えてもらうなど、ほんの小さな疑問や感想でも言葉で伝えることで今まで知りえなかった学びにつながることを確認した。

7月31日（第2日目）

○在日本総領事館訪問

入館に際し、セキュリティーチェックが厳しい。パスポートで本人確認を行い、荷

物をロッカーに入れるよう指示される。スマホも持ち込み禁止。副領事田中さん（桜丘高校出身）から総領事館の仕事の概要と日本の ODA による草の根無償協力について説明いただく。

JICA のような大きな支援だけではなく、人間の安全保障を目的とした細やかな支援を日本がおこなっていることを学んだ。生徒からの質問は次のようなものがでた。

「ベトナム人の働き方はどのようなものか」、  
「日本人に対する印象は」、  
「ベトナム人と一緒に働くうえで難しいことは」、  
「貧富の差について」、  
「良い人材をどうやって見つけているのか」  
「日本とベトナムの文化で似ているものと異なるものは」等である。



#### ○ベントインマーケット見学

観光客用のマーケットである。狭い通路の両側に土産物屋が並び、商品が所狭しと陳列されている。独特の匂いと暑さで息苦しい中を進むと店員から次々と日本語で声がかかる。「外国人の容姿にあわせて言語を使い分けているのがすごい」、と生徒の感想である。生徒はアオザイなどの販売方法や価格などを調査した。アオザイは固定価格のため「値切る」体験ができなかったが、衣料品や工芸品では値段交渉にチャレンジし、お店の方々との交流を楽しんだ。



#### ○イオンモール見学

市内中心部より車で 40 分ほど郊外にある巨大ショッピングモールで、スーパーだけでなく、各種レストラン、ファッションフロア、ホームセンターなどを擁し、消費者の多様なニーズにこたえる。生徒はそれぞれのビジネスプランに基づき、商品価格調査、品質チェック、アンケート等を実施した。



#### ○K-coop（ローカルスーパー）見学

市内中心部にある一般大衆向けのスーパー。イオンモールと比較すると、商品陳列が雑然としている印象を受ける。同じ商品でも陳列の仕方でもこんなにも印象が変わるものかと思う。商品価格調査、品質チェック等を行った。

#### ○ホテルロビーにてミーティング・振り返り

イオンモール、K-coop とともに味の素商品の種類と数の多さに圧倒された生徒が多かった。ベトナム社会に味の素社が深く根を張っているのを実感した。また、お客様にアンケートをお願いするにも英語が通じないため苦戦を強いられている模様。アンケートの説明をベトナム語通訳のミウさんに頼み、指示カードを作成した。明日以降訪問先の現地スタッフにアンケート協力の依頼をしよう確認した。

また、ある生徒は、この研修前に在日本総領事館のホームページを見たが、今回の訪問でホームページでは知りえない情報を数多く得ることができた。例えば国と国との大きなつながりというよりも、「人々の痒い所に手が届く」小さな結びつきから支援がどんどん広がっていくのだということ、それが日本の ODA によって成されていることはもっとアピールして日本人にも知らしめるべきであるとの意見に皆賛同した。今回説明していただいた副領事の田中さんは同じ市立高校の先輩でもあり、第一線で活躍している姿に生徒は大きな刺激を受けたようである。

○ローカル薬局へ

ミーティング後、薬物耐性菌をテーマにしているチームがホテルの近所にある薬局でアンケートを実施したいとの申し出を受け、JOCAの新関さんと北見が同行し、2軒訪問。快くアンケートに答えてくれる方とそうでない方に二分される。生徒は冷静に対処している。

8月1日（第3日目）

○ホーチミン日本商工会議所

事務局長上田氏に話を伺った。ベトナムの概要・歴史・政治経済に関する基本的知識について学んだほか、日本とベトナムとの関わりやベトナムの発展に対する日本の貢献、なぜ日本企業がベトナムを進出先



として選ぶのか等、ビジネスの観点からベトナムについての理解を深めた。また、ベトナム大都市部の平均月収が日本円に換算すると約2万円に対し、親が教育熱心で月謝5千円の英語塾が大人気というのにも興味をそそられた。

講義の後、生徒からのビジネスプランに対する細かな質問（工場をベトナムで作るのにおすすめの場所はないか等）がたくさん出てしまい、予定滞在時間が30分もオーバーし、次の来客が待たされる状況になってしまった。上田氏は昨年度の生徒ともビジネスプランについての相談のやりとりを訪問以降も続けてくださっており、ご尽力に感謝である。

○ベトナム味の素社訪問

ベトナム味の素生産部門部長の仲山氏に話を伺った。会社の理念としては Eat Well, Live Well を掲げ、ベトナムにおいては、ベトナム国民の幸せと健康に貢献することをモットーに、ベトナムにあった調味料や商品を開発・販売をして



ていること、バイオマス燃料や水の浄化など、SDGs を目指した会社経営をしており、TRY & ACT のデザイン思考で学んだことを、会社が実践している生の姿を垣間見ることができた。講義後工場見学を行い、終了後質疑応答でまたしても生徒からさまざまな質問が飛び交い、予定時間を30分オーバーして終了した。仲山さんと日本人スタッフ総勢3名でご回答くださり、とても有意義な訪問となった。

○水上人形劇鑑賞

ベトナム農村の仕事や伝統行事、神話をベトナムの楽器を使ったバンドと歌をバックに、水面上のステージで繰り広げられる人形劇を鑑賞した。ベトナムの伝統文化に触れ、理解を深めた。



○ホテルロビーにて振り返り

商工会議所では経済について掘り下げていただき、新しい視点を得た。また、ベトナムの平均年齢が31歳と若いことは生徒も知っていたが、平均寿命がASEAN2位の76.3歳で、まもなく高齢化社会がやってくるという話にびっくりするとともに、ベトナムの高齢化と医療水準がマッチしない、外食が多そうだが、栄養的にどうなのか、確かに肥満の人が少ないかも、とさまざまな意見がでた。味の素では日本企業がベトナムで成功している例を見学することができた。特に生徒たちにとって印象的

だったのは、味の素社のミッション（存在意義）とビジョン（ありたい姿）が非常に明確で、それを全社員が共通認識としている姿である。彼らのビジネスプランを遂行する中でこの二つを明確にしなければという意識が芽生えたようだ。

#### 8月3日（第4日目）

##### ○カンザー国立公園、マングローブ植林体験



ホーチミン市内から高速道路に乗り、途中フェリーで川を横断しカンザー国立公園に到着する。「カンザーのマングローブ林は、ホーチミン市やその周辺地域にとって、気候の緩和・高潮防止、動植物安住の場など生物多様性の維持という側面で非常に重要な役割を果たしてきた。だが、ベトナム戦争時の枯葉剤や爆弾によって壊滅状態となる。その後現地の人々による積極的かつ地道な植林活動によりマングローブ林が蘇り、現在に至っている」という話をマングローブ

植林行動計画職員の浅野氏よりバス内で講義を受けた。マングローブセンターに到着し、身支度を整え、苗の植え方の説明を聞く。塩田のぬかるみにスコップで穴を掘り、苗をまっすぐにおろし、掘った穴に泥をかぶせていく、と単純な作業に思われるのだが、苗一本一本に重みがあり、ぬかるみの土も扱いにくい。なんとか一人五本の植林が終わるころには全身汗だくである。

その後センターに戻り、昼食。公園内の食堂は猿も自由に入ってきて我々の食事風景を眺めている。昼食後、ミーティングルームで公園運営会社副社長よりスライドを使っての講演を聞く。ベトナム語をJTBガイドが通訳して伝えてくれるのだが、専門用語が多いため通訳も難しそうである。（ふと気づくと、猿もテーブルに座っていた。）生徒からの質問には浅野氏が答えてくれた。この間、話し声が聞き取りにくくなるほどの非常に激しいスクールが長く続き、マングローブ林の日常の姿を見ることができた。



##### ○ホーチミン市内観光

カンザー国立公園より市内に戻る。サイゴン大教会は改修中のため外観のみの見学、隣の中央郵便局は現在も郵便局として機能しているが、フランス統治下時代のコロニアル建築代表作として名高い場所である。また、ショッピングストリートのドンコイ通りでは、バンタインマーケットと同じ商品が高値で売られていることを知る。高島屋では日本と同じような売場で同じような商品が陳列されており、高島屋で買える物が地元民のステータスシンボルとなっている、とガイドのロックさんが話していた。



	<p>○空港にて最後のミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 戦争証跡博物館で戦争について改めて考えさせられた、皆で共有したい。</li> <li>● 歴史をきちんと知る、きちんと学ぶことは未来につながっていくことだ。</li> <li>● ベトナム人のまったりゆったりとした人柄にワクワクした。</li> <li>● 企業訪問でベトナムが親日国であり、共に協力していくパートナーであることがわかった。</li> <li>● 他国企業がベトナムの発展に貢献しているが、ベトナム国自身の意思が失われるのではないか。</li> <li>● 先進国にも抱えている問題がたくさんあるのに、途上国の問題に終始してよいのか。</li> <li>● ベトナムの中部料理、南部料理に味の違いがありおもしろかった、水上人形劇も皆に紹介したい。</li> <li>● 北部と南部が統一されても、まだ人々には見えない境界線があつて、複雑な思いである。</li> <li>● マングローブ植林に貢献できた、ベトナムの人々の思いに共感できた。</li> <li>● マングローブは自国民がほぼすべての植林活動をやり、他国の協力はほんの一部に過ぎないことを知った。(植林体験をすることに少しおごりがあった)</li> <li>● 百聞は一見に如かず、発展途上国に行くことは大切と感じた。</li> <li>● 市場での「値切り体験」で恥ずかしさ乗り越えられた。自分から行動できれば何かが変わっていく。</li> </ul> <p>など様々な振り返りがあり、今回の研修は生徒たちにとってとても有意義であったことがうかがえる。それぞれが自ら積極的に行動し、質問して、沢山の成果を持ち帰ることができた。</p> <p>8月3日(第5日目)</p> <p>○タンソンニャット国際空港より成田空港へ早朝 帰着 (VN300) 健康状態良好にて解散</p>
9 成果	<p>生徒の報告書より抜粋</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「南北ベトナムの積極的なアプローチによって生み出される交流こそ、双方の最大の成長につながるだろう」さらに「人やモノの交流が一方的な発信になってしまうと、受信する側の社会や経済は多文化の色に染まってしまうかもしれない」と考えるようになった。</li> <li>・今まで私は、大学病院や私立病院など大きな病院に勤めて最先端な現場で患者さんを救っていくのが夢であったが、この研修を通して海外の医療現場にも関心を前以上に持つようになり、同じ地球上の人間としてできることはないか考えるようになった。また、ベトナム戦争は何のためにやったのだろうと心が痛んだ。</li> <li>・カンザー国立公園のマングローブ植林体験を通して枯葉剤のような兵器を今後二度と使うようなことは起きてはいけないと強く思った。また植林体験から自分の視野の狭さを感じ、視野をもっと世界に広めたいと思う。</li> <li>・今回の研修で実際にベトナムを訪れたことで、ベトナムの空気やホーチミンの人々に触れることができた。このようにコミュニティを広げていくことは世界的な問題の解決になるのではないのだろうかと考えた。</li> <li>・味の素ベトナム社を訪問し、日系企業がこんなにもベトナムの食生活を支える中心となる役割を担っているということが驚きだった。</li> </ul> <p>また、スーパーで行ったアンケート調査で、緑豆は平均で二週間に一回程度食べられている一方で、食べ方は少ないのではないかと考えられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ベトナムの輸出の大半を他国の企業に独占されている現状を見て、支援を受けるときは、メリットだけでなくデメリットも考えなければならぬと思う研修だった。その一方で、この研修で常に感じていたのはベトナムの人々の温かさだった。</li> </ul>

・先進国の技術を導入することで、発展途上国の課題を解決しようとする、その国が自分たちで問題を解決することを放棄させてしまうと考えた。本研修を通じてグローバルリーダーとはなにかということを改めて深く考えさせられた。私は Daniel Berdichevsky が言った「ここにある国旗を見てください。何があろうとも今この瞬間これらの国は一つです。」という言葉にこの問いの答えがあると感じた。

・海外でビジネスをする上では、自国の文化を押し付けるだけでも相手国にただ合わせるだけでなく、それぞれの強さを生かし助け合えるような関係を築くことができることが理想だと思った。それを現実にするためには、相手国の国民性を理解することが第一に必要であると感じた。

#### 考察

生徒のベトナムイマージョン研修に参加する目的はさまざまなものであった。ビジネスプランに関わる調査・探究活動が主たる目的なのは共通しているが、ベトナム国に対する純粋な興味関心で、自分自身の目で生の、リアルなベトナムを体感し、未来の像を考察したい生徒、海外経験を積み、見識を広げたい生徒、日本を含めた諸外国とベトナムとのつながりに興味がある生徒、社会主義国とはどのようなものか知りたい生徒、等々である。結果、研修に対する期待以上のものを彼らは手にして帰国する。研修中の彼らの率直な疑問、感想に身近で答えてくれた、JOCA スタッフ、現地 JTB ガイドの存在はとても大きかった。また、彼らの実施するアンケートを渡航前にベトナム語に翻訳してくれた昨年度の同行スタッフ、現地で実施したアンケートの回答をバス移動の中で必死に日本語に翻訳してくれた現地通訳ガイドにも感謝したい。

初日の戦争証跡博物館で戦争に対する生徒の認識が大きく変化する。欧米人見学者が真剣な眼差しで展示写真に見入っている様子を目の当たりにし、国境を越えて、全地球規模で平和を守っていかなければならないことを再確認できた。在日本国総領事館では横浜市立高校の先輩が副領事としてベトナムでの活動を説明してくれた。日本の ODA「草の根支援活動」が現地の人々の生活を大きく向上させていることや、国籍の異なる者同士が共に働く上でのポイントなどは机上で得られる情報以上に彼らの心に訴えるものがあつた。さらには、日本商工会議所（JCCH）では、ベトナム国の現在の発展は他国企業同士の競い合いのもとに成立していることを知る。そして、ベトナム味の素社ではベトナム人の QOL 向上を目指しながらも、同業他社は外国企業であることがわかると、生徒たちの中に「グローバル」とは？という疑問が次第に大きくなり、夜の振り返りの中で活発に真剣に議論されるようになっていった。最終日のマングローブ植林体験で得られた事実がこのグローバル議論のひとつの方向性を示してくれた。マングローブはベトナム戦争で失われたが、その後年月をかけて現地の人々の手で再植林されたこと、そこに他国からの応援も加わり、よみがえりつつあることだ。

流行りことばのように使われている「グローバル」の意味を研修の活動と結び付けて彼らなりの結論が得られたことは非常に意義深い。経済支援としてのグローバル化と平和へのグローバル化をかけ合わせることに真のグローバル化である、との彼らの答えはまだまだ流動的で、今後もさまざまな経験をするなかで変化していくであろう。しかしながら、ベトナム国の現状に触れ、イマージョン研修を共にわちあつた仲間たちと「グローバルとは何か」という問いに顔を突き合わせてじっくり話し合い、お互いが納得する形で結論を導き出した経験は、彼らの未来に大きな糧を与えてくれると確信する。

(9) 3年生 TRY&ACT

南高校附属中学校の総合的な学習の時間 EGG で培ったコミュニケーション力、高校1年生の Diversity & Inclusion と協働する力を育てる TRY を基盤に、高校1年後半から高校2年生で取り組んできた ACT の取り組みを高校3年で継続しながら、後輩たちである高校1年生や2年生を指導し、自身の進路実現を探究するキャリア学習へと発展させた。また、3年間の探究活動を振り返ってメタ認知することから深い学びを得て、その探究の成果と得られた力について紹介する。

これらの主体的・対話的な TRY&ACT の活動を通して、主体的対話的グローバルな課題を、国境を越えて協働して解決し、世界に貢献する資質を身につける深い学びを行った。

	全学年合同 TRY&ACT
1 日時	令和元年7月11日(木)
2 場所	1～3年教室
3 参加者	全学年 585名
4 内容	3学年の生徒がそれぞれの TRY&ACT の学習、グローバルビレッジ、シンガポール海外研修のフィールドワーク (B&S) について情報を交換し、これまでの活動を振り返ったり今後の活動について見通しをもったりすることを通して、それぞれの学習活動の質や意欲を高めた。ディスカッションを行うグループは、1・2・3年それぞれ2、3名ずつ 計6～7名になるように調整した。1年生は、「文化の違う人々と一緒に仕事をするには」という課題について、2年生はビジネスプランに関わる情報を集めるために行うシンガポール海外研修の B&S について発表して意見を求めた。3年生は、ディスカッションをリードし、探究活動を行ってきた経験から1、2年生に励ましとアドバイスを行った。
5 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生の異文化理解に違った視点があることをアドバイスできた。</li> <li>・シンガポールの B&amp;S の相談に応えることができ、役に立ててよかった。</li> </ul>

	SGH 研究発表会
1 日時	令和元年11月8日(金)
2 場所	全体会：南高ホール、研究発表会：教室、サブアリーナ等
3 参加者	全体会：3年生195名、発表者、保護者、SGH関係者等、研究発表会：全学年585名、保護者、SGH関係者等
4 発表者	全体会：1年生・2年生海外イマージョン研修参加者 研究発表会：1年生・2年生
5 講師	外務省 石川 勇氏
6 内容	<p>全体会：生徒の司会で、SGH opening forum (SGH プログラム「TRY&amp;ACT」と本日の流れを説明)、シンガポール海外イマージョン研修報告、(1年生参加者8名)、ベトナム海外イマージョン研修報告(2年生参加者8名)に続いて、外務省石川 勇氏による3年生に向けての講演「社会に出てグローバルリーダーとして活躍するために」を行い、海外研修の情報の共有とともに、グローバル社会で貢献する意欲を高めた。</p> <p>研究発表会：3年生は会場を巡回して、1年生・2年生のポスターセッションによる発表に対し、適切な質問と自分の探究活動の経験に基づく励ましとアドバイスを行った。また解決策の実現性を高めるために、発表者とともに残された課題の解決方法を考えて討議を行った。これらの活動を通して、3年生は自分の研究の深化発展を図った。</p>
7 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化の違いに合わせるのではなく、受け入れるという言葉にインパクトがあった。</li> <li>・SDGsについて自ら行動し、戦争体験者にインタビューした内容は素晴らしかった。</li> <li>・エコラップでゴミの減量、駅弁で鉄道を活性化など途上国で役立つ発想が良い。</li> <li>・ベトナムのコーヒーを直輸入して農家を支援するプランは、実際に輸入したコーヒーを試飲でき、現地調査に基づいた収支計画がしっかりして実現性が高い。</li> <li>・カードゲームで英語を学ぶ発想がいい。競合する商品との違いを明確に説明し、企業と連携して開発しているため実現性が高い。将来、起業するとういと思った。</li> </ul>

(10) SGH 研究発表会

令和元年 11 月 8 日（金）に、1 年生、2 年生全員が、総合的な学習の時間、総合的な探究の時間の SGH プログラム TRY&ACT の年間の研究成果を SGH 研究発表会にて発表した。

研究発表会の全体会では、外務省の講師を招聘してシンガポール海外研修、ベトナム海外研修の報告を参加生徒が英語で行った。また、全体会の後には、横浜市立大学の講師を招いて課題研究についてポスターセッションを行い、講師から講評を受けて課題解決力・表現力・コミュニケーション力の向上を図った。

ポスターセッションは、1 年生、2 年生の 5 人ずつ 82 グループが 10 分間のポスター発表、5 分間の質疑応答を繰り返し行った。聴衆は 1～3 年生、保護者、横浜市立大学講師 5 名、卒業生協力者 5 名、SGH 関係者等で、発表者と聴衆の間で活発に討議が行われた。

次に SGH 研究発表会で発表した 1 年生、2 年生の研究テーマ一覧を示す。2 年生の選抜チーム GLP（グローバルリーダープロジェクト）は 1 月にも SGH 研究発表会を行った。

① 1 年生グループ別研究発表テーマ一覧

「文化の違う人たちと一緒に仕事をするには

班	概要
1	各国のお金に関する情報を調べることで、国の間に価値観の違いや貧富の差があることが分かりました。それらを解決するための方法を発表します。
2	国の違いが生じる言語と宗教と時差の問題とその解決策について
3	宗教、時差、言語などの観点から生活習慣の差異によっておこる問題と解決策を話す
4	仕事をする上でおこるお金の課題について
5	旅行会社で働く場合の宗教、言語、文化のちがいを、時差の観点から問題と解決策を話す
6	どのような姿勢が求められるか。
7	言語、食事、礼儀、連絡手段、宗教について
8	時間と会議の手段について問題と解決策を考えた。
9	文化、価値観、食文化、言語、生活の5つのテーマに分かれて調べた。国ごとの違いについて問題点、解決策を出した。
10	食や礼拝など宗教の違い、言語の違い、人間関係、ハンドサインについて調べ考えた解決方法、一緒に仕事をする上で大切だと考えたことを発表する。
11	宗教の違う人たちが、共に働く上で発生する様々な問題を解決する
12	宗教の違う5人が、同じ会社で働くときに生じる仕事に対する価値観の違いなどを解決する
13	別々の国出身の5人が「ある地を観光地化する」という課題に取り組む。そこで発生する言語、時差、食生活、コミュニケーションの3つの課題を解決する。
14	国籍や物事の感覚の違いを乗り越えて一緒に仕事するには
15	それぞれの生活を尊重し、各国で別々に仕事をする前半と、利便性を考え一か所に集まって仕事をする後半の二場面における働き方の工夫を提案する。
16	文化の違う人たちと協同してトルティーヤショップを開くという目標のもと、飲食店の問題の解決についてまとめた。
17	出身国の違う5人が一緒に仕事をするためにはどうすればいいのかを、時差、宗教、人柄、習慣、食事という「アイデンティティー」に関わる5つの観点から考え、発表する。
18	コートジボワールのカカオ農家の明るい未来へチョココウ(直行)！！
19	アフリカの教育問題と解決方法
20	安全な水が飲める世界にするには～in 南スーダン～

21	コンゴの水問題を解決するには
22	アフリカを拠点とする国境なき食堂。
23	多国籍学校での給食について考える。
24	多国籍シェアハウスを成立させるには。
25	生じると考えられるギャップについて、宗教、言語、ジェネレーションギャップ、ワークライフバランスをピックアップしてまとめた。
26	文化理解と住みやすい環境を
27	話し合いの活発をそのままにどのようにしてうまく合意に導くか
28	分け隔てなく会議をするには
29	職場の環境を良くするためには
30	One for all, all for one.
31	仕事のストレス吹き飛ばせ bye bye!
32	Let's enjoy intercultural understanding!
33	お互いの理解を深めるための提案
34	子供のころ受けた教育の差が仕事に影響しないような仕組みとは
35	仕事をする前提となる時差や連絡手段、宗教の違いについての解決策の提案。
36	Think about gender equality!!
37	法律から見た国民性の違い
38	時差がある中での働き方～どちらかの夜は昼間～
39	平和的な時間の使い方とは？



② 2年生グループ別研究発表テーマ一覧  
「東南アジアの課題を解決するソーシャルビジネスアイデアを提案する」

班	概要
1	渦力発電で地方の電力問題を解決する
2	タイの環境を守る！お弁当箱作戦
3	若者を繋ぐ‘食堂’
4	How to avoid obesity
5	接触冷感でマレーシアの暑さを救う
6	マレーシアの学校生活改善
7	トイレポリューション！
8	エコなラップでゴミ削減！
9	日本の米×ラオス=∞
10	100均グッズでラオスを救え
11	害虫で幸せ大作戦
12	ドイツで健康宣言！
13	ブルネインダストリー
14	ブルネインに カサ貸さずには いられない
15	汗拭きシート
16	シンガポールでタバコをリサイクルしよう！
17	Hãy lan truyền chae đến Nhật Bản ~チェーを日本に広めよう~
18	ベトナムの健康意識の改善
19	気づいてる？ 誰かがやってる3D
20	EKIBEN で交通渋滞を解決！
21	Cà phê hạnh phúc
22	カツオ節は世界の料理に合うのか
23	学生支援&就職活動「子どもたちに教育を」
24	STOP！ 肥満増加 ~インドネシアの未来に向けて~
25	<b>たんぷらーでびったりおしゃれなかつぶ</b>
26	日本食でフィリピンを健康に！！
27	フィリピンの人に喜ばれる香りをつくるには
28	熱くなれ フィリピン人
29	I 缶 make can. ~フィリピンに非常食を~
30	インドネシアに食育を！！
31	救え！インドネシアの危機！

32	新しいゴミ箱, 新しい生活。 in インドネシア
33	健康で楽しい食事をインドネシアに
34	☆LET'S WORKING☆ ～フィリピンの仕事不足を他国の人手不足を解消する～
35	フィリピンゴミ箱大作戦
36	How to eat fruits attractively
37	映像授業でフィリピンの教育格差を改善する
38	GLP1 「わらぶくろ」で鹿を救おう！
39	GLP2 GREEN な BEAN が熱中症対策に EE
40	GLP3 外国人人材のリクルートサービス
41	GLP4 AMR カードゲームで守ろう未来
42	GLP5 遊んでいるだけなのに脳スッキリ 英語バッチリ
43	GLP6 家族を幸せにする香水



# 「わらぶくろ」で鹿を救おう！

### I. 現状の課題

「現状の課題のサマリー」  
理想：動物が食べても大丈夫な地球に優しい紙袋を箱から作り、ビニール袋の代替品として普及させる  
現状①：ホイ捨てされたビニール袋の誤飲によって多くの動物たちが死んでしまっている  
現状②：東南アジアでは箱わらぶくろの焼却処分による大気汚染が問題になっている  
①今年の6月のニュースによると、奈良公園では過去5ヶ月で死んだ鹿14頭のうち9頭は胃の中にビニール袋の塊が見つかり、ビニール袋による消化不良も死因の一つとして考えられている。他にも、魚、ワカメ、イカ、クワッドなどの海の生物や高干草がビニール袋を誤飲して死んでいる  
②ベトナムマイジン研修でのアンケート調査の結果がかなり驚異的な結果だ。そして箱わらぶくろについては知らない人が多くなることが分かった。  
「理想状態を妨げるボトルネック」  
・ビニール袋が安値で使われて世界中に普及している  
・ベトナムにおいて箱わらぶくろの焼却処分による大気汚染に対する認知度、関心がそこまで高くない  
「課題の規模感」  
①鹿と陸上の動物から海の動物まで世界規模での問題に巻き込まれている動物がいる  
②東南アジアを中心に、特に米を生産しているベトナム、タイ、インドネシアなどで課題が広がっていると考えられる  
「課題の深刻性」  
①動物が死んでいることは生態系にも影響を及ぼしかなす。規模も大きい深刻な課題  
②大気汚染は直接人間の生命活動に影響を及ぼさないだけでなく、地球温暖化も進行させてしま

### II. 解決策

「Product (商品)」  
サウロビドを利用した試作品→商品名:「わらぶくろ」  
サイズ: (縦×横×マチ)  
小 21×14×6cm  
大 30×25×12cm  
重さ: 小 10.5g  
大 28.5g  
耐久性: 1500gまで耐えることができる。1Lペットボトルを入れても大丈夫なため利便性も十分である。  
「Price (価格)」  
小売価格: 小 2円 大 4円  
販売方法は年単位での定期購入、全1000万個から1000万個単位の購入の2つのパターンを考えている。前者の条件で契約した場合5%の値引きをするという方法でより長期的な販売を実現しようと考えている。  
「Place (流通)」  
東南アジアの拠点にベトナムにして工場もベトナムにおくことで、人件費や箱わらぶくろの輸送費の削減を実現する。  
販売方法は年単位での定期購入、全1000万個から1000万個単位の購入の2つのパターンを考えている。前者の条件で契約した場合5%の値引きをするという方法でより長期的な販売を実現しようと考えている。  
「Promotion (宣伝)」  
当社の紙袋のメカニズムを多くの人に知ってもらうという目的でHPやSNSを開設することを考えている。  
「独自の強み」  
鹿を鹿が食べても大丈夫な動物、ホイ捨てされても自然と土に還っていく過程を早速試した動画を投稿する  
→話題性もあるため「わらぶくろ」の認知度も向上することができると考える。これを通してこの紙袋を浸透させていきたいと思います。

### III. 簡潔

マイターグット: 大手コンビニ(計: セブンイレブン) 鹿鹿でのピッキングでは、最終的に箱わらぶくろを導入するなという話にはなっていないがまだ本格的な導入には至っていないことが分かった  
サブターゲット: LOFTなどの生活雑貨店  
LOFTでは環境問題の課題に取り組んでいる。そのような生活雑貨店でも生産が安定したら売り出したい

### IV. シンガポール研修を受けて

シンガポール研修ではどのくらいビニール袋が使用されているかを調査した。マライタウンのお土産店をはじめほとんどの店ではビニール袋が使われていたが写真のようにホイ捨ては見られなかった。シンガポールのホイ捨てを抑制する取り組みが世界規模で行われるのは嬉しいことと商品開発の必要性を感じた。

### V. 参考文献・参考サイト

「参考文庫・サイト」  
セブンイレブンHP <https://www.sej.co.jp>  
CNN.co.jp 奈良公園の鹿9頭、ビニール袋食って死ぬ <https://www.cnn.co.jp/travel/35139823.html>  
「独自レポート」  
株式会社竹尾 長崎様 → 箱わらぶくろを用いた紙の作成  
RICOH 塩島光洋様  
→ 動物が食べても大丈夫な紙、印刷技術による支援拠点 小池俊介様 (右写真)  
→ シンガポールアドバイス、サウロビドのバリエーション、新機種のLOFTマナーシェアー 瀬田照和様  
→ ビニール袋と紙袋の使用状況、単価など

## 「わらぶくろ」で鹿を救おう！

# 外国人人材のリクルートサービス

### 1. 現状の課題

「現状の課題のサマリー」  
理想：外国人が日本で安全・安心して働ける  
現状：情報の非対称性により安全な会社が見つからない  
「理想状態と現状のギャップの詳細」  
現在、日本では過去最高のおよそ30万人が外国人技能実習生として働いており、さらなる増加が見込まれている。しかしその一方で、安全が確保されていない危険な現場や、企業によっては給料が支払いない状態で長時間働かされている技能実習生を取り巻く環境は厳しく、深刻な社会問題となっている。  
また、現在技能実習生が日本で就労する際に、**法外な金額の手数料**を支払わされていることも問題になっている。  
「理想状態を妨げるボトルネックと着眼理由」  
技能実習生の数が増える一方、技能実習生からの失踪者が増えている。これは、失踪するよう**意図的な現場**で働かされている技能実習生が増えているという点と関係しており、この問題を解決することが急務である。

### 2. 課題に悩む当事者

「当事者の特性イメージ」  
外国人  
日本人  
「当事者の悩み」  
「解決策」  
「効果」

### 3. 解決策

「Product (商品)」  
外国人向けアプリ  
外国人向けWEBサイト  
「Price (価格)」  
外国人無料(広告費)  
外国人一人につき就労後の給料3か月分(4.5万円程度)  
外国人向けの広告を出す企業向けWEBサイトでサービスを提供する。  
「Place (流通)」  
外国人向けスマートフォンアプリでサービスを提供する。  
外国人を採用する企業向けWEBサイトでサービスを提供する。  
外国人の広告サービスと同じようにCPC(広告がクリックされる料金)が発生する。広告掲載するサービスを提供する。

### 4. 参考文献・参考サイト

厚生労働省、外務省、財務省、外国人技能実習機構等政府機関のHP  
朝日新聞、日本経済新聞ほか。

## 外国人人材リクルートサービス

# GREENなBEANが熱中症対策にEE

### 1. 動機

現在の熱中症対策商品の課題  
①既存の熱中症対策商品(スポーツドリンク等)では熱中症になりやすい体温調節機能が下がっている際の熱中症を防ぐには不十分である。  
②のどが渇きやすい

「熱中症対策」  
「のどが渇きやすい」  
「体温調節機能が下がっている」

### 2. 緑豆との出会い

緑豆の効果、特徴  
・ 薬方としても使われる  
・ 体温を下げる  
・ 体の水分を効率よく使う  
・ のどを潤すことができる  
→ 熱中症対策

### 3. 商品概要

GREENなBEANが熱中症対策にEE  
eeeパウダー  
「熱中症対策」  
「のどが渇きやすい」  
「体温調節機能が下がっている」

### 他商品との比較

①根本的・持続的熱中症対策を実現  
「熱中症対策」  
「のどが渇きやすい」  
「体温調節機能が下がっている」

②いかなる飲食物にも混ぜられる  
「熱中症対策」  
「のどが渇きやすい」  
「体温調節機能が下がっている」

③これまでの調査  
①豆の買付けのノウハウや商品輸送手段の調査  
豆を手に入れる方法と、それぞれのデメリットを知った。緑豆の輸送は船便で行い、到着まで約一週間かかる。税関や保険等を考慮し、貿易会社と連携する必要がある。  
②緑豆の使用法、単価の調査  
インモータルタンサーゼドの客と訪問企業のベトナムスタッフにアンケートをとった。緑豆は一年中売られているか、という質問では回答者全員がはい、と答えており、また緑豆は保存ができる食材であるため、**緑豆は一年中入手できると考えられる。**  
③販売チャネルでの取り扱いについての調査  
店舗で販売する商品を決する際の判断基準を知ったところ、顧客と商品ターゲットの整合性、パッケージのデザイン、価格や利益率、第三者機関による効果の認定が求められる。

④今後に向けた課題  
①現在の熱中症対策への認識をどのように変えるのか  
②商品をいかにして普及させていくのか  
③商品の効果の実証

## GREENなBEANが熱中症対策にEE

# GREEN BeANS are good for HEAT STROKE prevention

### 1. Motivation

Heat stroke has occurred  
Another way of preventing heat stroke is required!!

### 2. Encounter Mung Beans

Characteristics of Mung Beans  
・ Used as "kanpo"  
・ Lower body heat  
・ Use body water efficiently

Mung Beans ⇒ heat stroke measure

### 3. Investigation of mung beans in Vietnam

1. Survey of price  
200-300 yen/kg

2. Survey of usage  
Q. In what form do you eat mung beans?  
● Che ● Sweets ● Others ● Porridge ● Soy milk

3. Survey of awareness

### 2715 横浜市立南高等学校

Nanami Masuda Kano Masuda

### 2. Global

We have conducted survey in Vietnam and Singapore, and we'll do so in America.

Vietnam  
・ Conducted questionnaires with Vietnamese people  
・ Investigated the price of mung beans

Singapore  
・ Investigated supermarkets... heat stroke preventing product was only one kind of sports drink  
⇒ Possibility of entering the Singapore market

U.S.A.  
・ Present our activities in Silicon Valley in February  
・ Search the possibility of using mung beans for Veggie Meat

### 3. Local

We collaborated with a local bakery and Anko manufacturing company to sell bread that contains mung beans.

### 4. Spreading awareness of mung beans

eeeパウダー  
「熱中症対策」  
「のどが渇きやすい」  
「体温調節機能が下がっている」

5. Conclusion  
In the future, due to global warming and abnormal weather, unprecedentedly hot summers may come to the world. If that happens, there will be a large number of people who can't cope with heat and fall down due to heat stroke. In order to prevent this from happening, we would like to continue activities to spread the awareness of mung beans.

## GREENなBEANが熱中症対策にEE (全国フォーラム版)

## AMRカードゲームで守ろう未来

GLP4班 氏名 田中 聖 海野 利佳

### 1. 現状の課題

◀広がる脅威▶  
右のようなボスターを目にした事はありますか、これは国が発行しているAMR啓発ボスターですが、実際に我々が生活に付いた調査では一人も目にしたことがある人はいなかった。同時に、授業で取り扱っているにもかかわらずAMRについて深く知っている人は少なかった。  
◀アジアを震盪脅威▶  
突然襲ってしまったり、AMRについてご存じだろうか、薬剤に耐性を持つことをAMR=Antimicrobial Resistance(薬剤耐性)というのだ、AMRは近年問題視されるようになってきた。AMRによる感染症は、薬が効かないという深刻な事態を引き起こす。国連は、このままでは2030年までに薬剤耐性菌により最大2400万人が極度の貧困に追い込まれ、2050年までにAMRによって年に1000万人が死亡する事態となり、がんによる死亡者数を超え、リマジンシユウに匹敵する破格的ダメージを受ける恐れがある。また、世界の半分の死亡者はアフリカとアジアで発生すると推測されている。

### 2. 課題に協働当事者

未だAMRは潜在的な問題であり認知度は低い、このままAMR問題を放っておけば大きな問題となり、その影響は私たち中学生に及ぶのは明らかだ。正しい知識を広め、これ以上のAMRの蔓延を防がなければならない。

### 3. 解決策

★AMR啓発図鑑型カードゲーム「ミテ」  
(フランス語で突然変異を意味する「ミューテーション」由来)

★セールスポイント

- 1 認知別に学ぶことができる
- 2 高校以上高校生のためのカードゲーム
- 3 AMRに関する知識がなくても楽しめるゲーム性
- 4 AMRについて知ることで未来の自分たちを守れる

★広告方法

- ・学校や協賛企業でのAMR啓発を含むボスターでの広告配架
- ・口を作り、ブランド化を図る
- ・クラウドファンディング(AMRを知る第一歩となる学習カードゲームであること強調)

### 3. 解決策

◀Product (商品)▶  
英単語を題材にしたカードゲーム「WORDS」とアイテムを題材にした「アイコン」を開発。単語を1人別(学年別など)に分けて店頭で販売する。  
◀Price (価格)▶  
1セット2000円(税抜)  
原価: 印刷会社に450セットずつ2回依頼(カード40枚×単価10円+箱1個×単価180円)×450セット+送料4000円)×2回=60.2万円  
◀Price (価格)▶  
【販売方法】  
40枚1セットの構成済みデッキや5枚1セットの拡張パックを販売。構築済みデッキには説明書とルールブックを付属品としてつける。最初はゲームブックなどに出向販売したり自身のインターネットのホームページで販売し、認知度を高め、月の売上高が200万円をこえたら販売範囲を全国に広げる。全国販売と同時に東急ハンズやAmazonでの販売も開始する。  
◀Promotion (宣伝)▶  
ターゲットである中学生の目に入りやすい、また最初は広告費を抑える目的で、SNSを利用したり、YouTubeをはじめとする動画配信サービスで実際の商品であるカードゲームのプレイ動画を投稿したりする。全国販売と同時に、カードゲーム店や本屋でチラシを置かせてもらう。  
◀サービス展開図▶

### 4. シンガポール・ベトナムイマージョン研修を受けた

私がシンガポール、ベトナムでの研修を通して一番衝撃を受けたのは国内での多言語習得の重要性だった。シンガポールの学生は英語を基本とし、さらにもう一種の言語を早期から学ぶ。ベトナムでもベトナム語だけでなく多くの方言を話し、観光客の会話で身についた言語を巧みに駆使して接客していた。多言語が必要とされる地域では、人々は複数の言語をしっかりと使っているという。グローバル社会の現場を見て私は、日本における学生の英語学習の意義を再認識した。  
まずは、日本語、英語学習者に向けた楽しみながら言語を学べるカードゲームを作り、現段階ではカードゲームの面白さや学習効果に課題が残る。脳科学に基づいた記憶に結びやすい方法やスマートフォンのアプリ版のカードゲームが作れないか模索し、世界の学生に向けた「楽しい」カードゲームを作りたいと決意した。

### 4 参考文献・参考サイト・出典

- ・UN News 2019/4/29掲載記事
- ・AMR啓発リーフレット
- ・<https://amrcrc.nsg.go.jp/>(アクセス日:2019/10/20)
- ・<https://antimicrobial-resistance.com/>
- ・<https://www.who.int/antimicrobial-resistance/en/>(アクセス日:2019/10/20)
- ・<going質問箱>  
https://ping.net.jp/29a71789828bb7event=0  
二次元バーコード⇒  
ご質問、ご指摘いただけると幸いです。

## 遊んでいるだけなのに脳スッキリ、英語バッチリ

GLP5班 氏名 西淵 裕太 菊地 龍斗

### 1. 現状の課題

◀現状の課題のサマリー▶  
理想:誰もが楽しく言語学習ができる  
現状:英語学習は大変、やる気が起きない  
◀理想状態と現状のギャップの詳細▶  
日本語生の言語学習への意欲は他の東アジア諸国と比較して低い。  
◀理想状態を妨げるボトルネックと着眼理由▶  
他国と比べて日本ではまだまだ日常的に日本語を使うことが少ない。  
単語帳を使った学習はやる気が起きない。  
◀課題の着眼感▶  
日本の中学生  
グローバル化の中で日本人の言語能力の向上は重要  
◀当事者の特性とイメージ▶  
横浜市に住む中学2年生。国語は得意だが、英語は苦手。苦手な英語だが、なかなか勉強する気にならず、いつも後悔しながら勉強している。カードゲームが好きで、一度遊んだらもうカードゲームで遊ぶ。

### 2. 課題に協働当事者

世界規模でも言語能力の需要がある地域はある。東南アジアでは使用される言語が公用語だけで10種類を超えるが、特にカンボジア、ラオスは漢字率は低い。

### 4. シンガポール・ベトナムイマージョン研修を受けた

私がシンガポール、ベトナムでの研修を通して一番衝撃を受けたのは国内での多言語習得の重要性だった。シンガポールの学生は英語を基本とし、さらにもう一種の言語を早期から学ぶ。ベトナムでもベトナム語だけでなく多くの方言を話し、観光客の会話で身についた言語を巧みに駆使して接客していた。多言語が必要とされる地域では、人々は複数の言語をしっかりと使っているという。グローバル社会の現場を見て私は、日本における学生の英語学習の意義を再認識した。  
まずは、日本語、英語学習者に向けた楽しみながら言語を学べるカードゲームを作り、現段階ではカードゲームの面白さや学習効果に課題が残る。脳科学に基づいた記憶に結びやすい方法やスマートフォンのアプリ版のカードゲームが作れないか模索し、世界の学生に向けた「楽しい」カードゲームを作りたいと決意した。

### 3. 解決策

◀Product (商品)▶  
英単語を題材にしたカードゲーム「WORDS」とアイテムを題材にした「アイコン」を開発。単語を1人別(学年別など)に分けて店頭で販売する。  
◀Price (価格)▶  
1セット2000円(税抜)  
原価: 印刷会社に450セットずつ2回依頼(カード40枚×単価10円+箱1個×単価180円)×450セット+送料4000円)×2回=60.2万円  
◀Price (価格)▶  
【販売方法】  
40枚1セットの構成済みデッキや5枚1セットの拡張パックを販売。構築済みデッキには説明書とルールブックを付属品としてつける。最初はゲームブックなどに出向販売したり自身のインターネットのホームページで販売し、認知度を高め、月の売上高が200万円をこえたら販売範囲を全国に広げる。全国販売と同時に東急ハンズやAmazonでの販売も開始する。  
◀Promotion (宣伝)▶  
ターゲットである中学生の目に入りやすい、また最初は広告費を抑える目的で、SNSを利用したり、YouTubeをはじめとする動画配信サービスで実際の商品であるカードゲームのプレイ動画を投稿したりする。全国販売と同時に、カードゲーム店や本屋でチラシを置かせてもらう。  
◀サービス展開図▶

### 5. 参考文献・参考サイト

- ・iee-jp-iee-hp>text.pdf>southasia  
https://www.accu.or.jp/shikiji/overview/ov02j.htm  
https://www.traveltowns.jp/languages/users/southasia-  
asia/  
https://sawadee-kei.hatenablog.com/entry
- ◀その他、訪問先、ご協力いただいた方々▶  
在ホーチミン日本総領事館 副領事 田中裕之様  
ホーチミン日本国総領事館 事務局長 上田貞也様  
ベトナム株の会社 近藤秀之様  
ようす支援拠点  
龍印製菓  
株式会社RICHIO様  
ヨドバシカメラ様  
など  
ご協力ありがとうございました。

## AMRカードゲームで守ろう未来

## 遊んでいるだけなのに脳スッキリ、英語バッチリ

## 家族を幸せにする香水

GLP6班 氏名 三浦 好誠 田熊 紫穂乃 鈴木 大河

### 1. 現状の課題

◀現状の課題のサマリー▶  
理想:①ラオスの有機栽培が有名になる  
②父親と高校生の子供が仲良くしていること  
現状:①人種によって価値観、収入に格差があること  
②消費を節制している親子が少なからず存在する。  
◀理想状態と現状のギャップの詳細▶  
①現在、ラオスの政府は国内の農業を「有機化」することを義務付けている。しかしながら、有機栽培を行う農家は少ない(ただし、化学肥料を使わないだけの農業になっている)。加えて、それによって経営難に陥る農家も多岐に存在する。  
②近年父親と他の家族との間に心理的な溝のようなものが見受けられる。  
◀課題の深刻性▶  
①このまま有機農業が進まなければ、ラオスでは化学肥料が枯渇し、その結果ラオスに住む人々への健康被害や環境悪化による動物植物への影響が深刻になる。  
②家庭での会話が少なくなると子供への精神的なストレスなどの悪影響がある。  
◀課題の着眼感▶  
①ラオスの環境問題及び農業発展に広くかわかる問題である。  
②インターネットによるSNSの普及により、自分と似たことのある人は全体の45%に上り、約半分の人がこの問題を抱えている。  
2. 課題に協働当事者  
◀当事者の特性とイメージ▶  
上記の通り

### 3. 解決策

◀Product (商品)▶  
ラオスで生産されたレモングラスやハイビスカスなどを想定。有機肥料によって生産されたもののみを買い取り、ラオスでの有機農業に貢献する。また、父親と子供との心理的な距離を縮めるための香水。プレゼントとして贈ることによって父親と子供の会話を増やすことができる。父親世代の男性向けの香水にすることで新しい市場を切り開く。

### 3. 解決策

◀Place (流通)▶ スペースの都合上国内流通のみ

◀Promotion (宣伝)▶  
電車内の広告を用いることにより、朝や帰りなどで電車を使う多くのお父さん世代にアプローチできる。そして、広告を見た男性が当社ホームページにアクセスして購入できるようにする。また、弊社の運営する小売店やECサイトなどの小売店に商品を売り込み、「お父さんに向けての新しいプレゼント」などのPOPを開発し高校生世代のお父さんにアプローチする。さらにSNSを使って宣伝をすることでSNSを頻繁に利用する若者にも宣伝することができる。

### 4. 参考文献・参考サイト

- ・参考文献URL:https://cancam.jp/archives/575347
- ・エン・ジャパンホームページ URL:https://corp.enjapan.com/newsrelease/2019/17213.html
- ・内閣府ホームページ URL:https://survey.gov-online.go.jp/s56/557-02-56-17.html

### 5 シンガポール・ベトナムイマージョン研修を受けた

シンガポールでは、様々な種類のハーブが群生している。シンガポール植物園に行ったり、現地の香水店で価格調査した。シンガポールの街中を見ていると、アジア系の人々が土木や木の匂いを取りたいと、後で調べたところ、東洋の香気全体で人種による価値観、収入の格差が存在することも分かった。しかし、この問題は現状の心持ちで解決することが出来ない問題であることも分かった。

### 家族を幸せにする香水



### 1年生の発表に対するコメント

- ・サブテーマが設定されていてポスターが見やすい。持続的で実現性の高い課題解決策が提案されていた。身近な SDGs 課題の発見が体験に基づいた充実した内容だった。(1年生)
- ・課題発見から解決策までの発表の流れが論理的でわかりやすかった。現地調査が綿密に行われていて、説得力があった。(1年生)
- ・海の公園のアオサの観察や大岡川のゴミ清掃などの横浜市内の身近な SDGs 課題を実際に見て体験したり、大学に取材しているところがいいと思った。(2年生)
- ・文化の違いに合わせるのではなく、受け入れるという言葉にインパクトがあった。(3年生)
- ・SDGs について自ら行動し、戦争体験者にインタビューした内容は素晴らしかった。(3年生)
- ・横浜市の SDGs 課題への取り組みを取材していたが、自分がどう行動するかを考えて自分ごとにしてほしい。(保護者)
- ・IOC の多国籍環境で働くとしたらという具体的な設定で、文化や価値観の違いを尊重して協働することの意味を議論していたのが良かった。(関係者)

### 2年生の発表に対するコメント

- ・原稿を手を持って読むのではなく、聴く人を見て発表していて、思わず引き込まれた。訊かれた質問に根拠をあげて詳しく答えていてレベルの高さを感じた。(1年生)
- ・実際に食品をつくる行程がタブレットの動画で見ることができて理解しやすかった。(1年生)
- ・シンガポールでとったアンケート結果からニーズに合った解決策を提案できていた。(1年生)
- ・トイレをきれいにするお掃除ロボットを実際に作って実演したのはすごい。(1年生)
- ・課題設定の動機が明確で共感でき、商品の価格と根拠を具体的に提示した収支計画が表やグラフで表現されていてわかりやすく、実現性が高いと思った。(2年生)
- ・エコラップでゴミの減量、駅弁で鉄道を活性化など途上国で役立つ発想が良い。(3年生)
- ・ベトナムのコーヒーを直輸入して農家を支援するプランは、実際に輸入したコーヒーを試飲でき、現地調査に基づいた収支計画がしっかりして実現性が高い。(3年生)
- ・シンガポール海外研修で体験したことを踏まえて、プラスチックカップのごみを減らすために、マイタンブラーを持ち歩くアイデアはよいが、販売方法の工夫が必要である。(保護者)
- ・タイの屋台の課題を表面的に解決する案は実現性に乏しい。課題の本質を考えてほしい。(関係者)

### GLP の発表に対するコメント

- ・サーモグラフィーによる実証実験を行って、競合する他社商品と差別化していて、緑豆の熱中症対策の効果がわかりやすかった。料理に混ぜて使える点もいいと思った。(1年生)
- ・わら袋でつくったエコバッグは、複数の課題を同時に解決でき、需要もありそうで、実現性が高いと思う。渋谷駅前で大勢にインタビューしたデータは説得力がある。(1年生)
- ・英語をカードゲームで学ぶアイデアは、日本でも海外でも英語が苦手な人や初心者には需要があると思う。実際に作成した商品は、体系的に英語が学べる工夫がされていた。(1年生)
- ・SDGs13 の気候変動に対し、食べるもので熱中症対策をする案で、どんな食事にも混ぜられ、価格も低く設定されていて実現性が高いと思った。(2年生)
- ・カードゲームで英語を学ぶ発想がいい。競合する商品との違いを明確に説明し、企業と連携して開発しているため実現性が高い。将来、起業するとういと思った。(3年生)
- ・わら袋を使ったエコバッグのビジネスプランは、動物保護、マイクロプラスチック、製紙会社との連携など様々な視点から検証されていて興味深かった。(保護者)
- ・地道に実証実験を積み重ねに感銘を受けた。発表に熱意とチームワークの良さが感じられた。  
(関係者)

#### 4. 振り返りシート・ルーブリック評価・アンケートの集計・分析

生徒の自己評価の方法として、プログラムごとに振り返りシートを記録しているほかに、自己評価用ルーブリックを作成し、生徒自身の主体的取り組みと教員の指導情報の共有と向上を目指している。振り返りシートやルーブリック評価には、数値集計の他にコメント欄を設けて、生徒や指導教員の現場の声を集約し、校内 LAN のシステムを使って随時、教員間で共有し、指導に反映できるようにした。また、研究発表会では生徒、校外からの参加者、保護者によるルーブリック評価を行った。ここでは、自己評価ルーブリックと、振り返りシートの一部を紹介する。

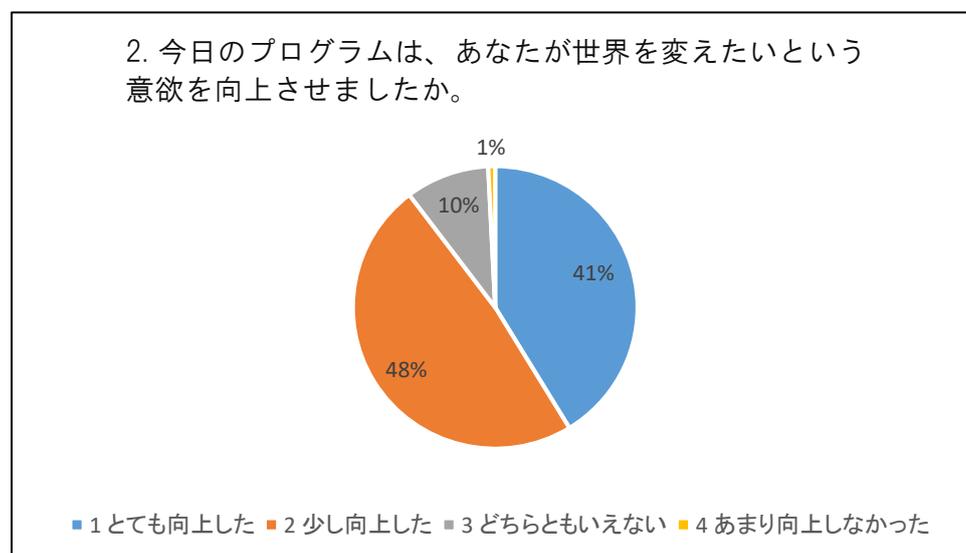
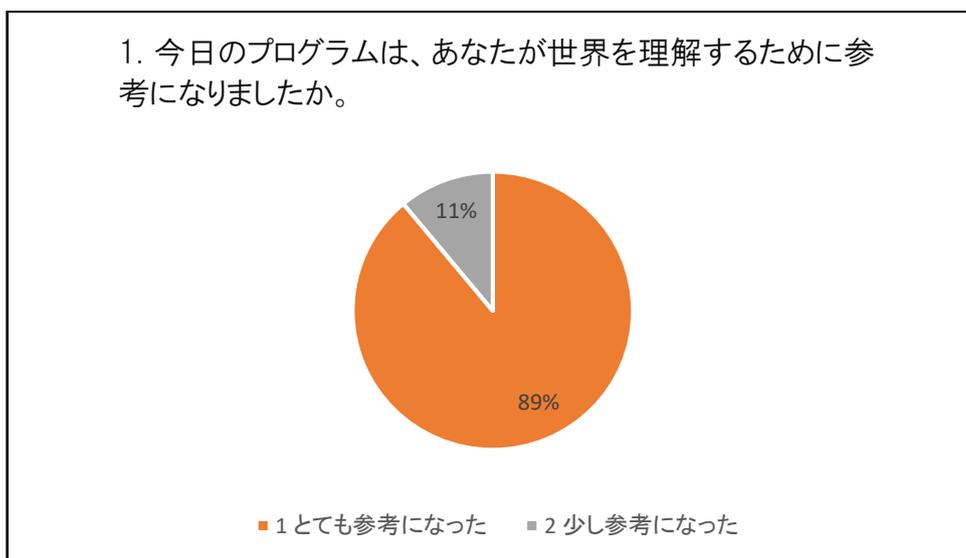
### 横浜市立南高等学校 TRY&ACT 自己評価シート

	視点	4	3	2	1	自己評価
①	課題の設定	日本以外の国々や日本の状況を幅広くとらえて、解決する価値があり、実現可能な課題を設定することができる。	日本以外の国々や日本の状況を踏まえて、解決する価値のある課題を設定することができる。	日本以外の国々や日本の状況を踏まえて、課題を設定することができる。	課題を設定することができない。	
②		課題の解決のために仮説を立てて検証したり実験をしたりするなど、課題解決のための計画を工夫して取り組むことができる。	課題の解決のための見通しをもち、計画的に課題の解決に取り組むことができる。	課題の解決に向けて取り組むことができる。	課題の解決に向けて取り組むことができない。	
③	情報収集	多様な方法を使って情報を集め、課題を解決したり、考えを深めたりするために効果的な情報を広い範囲から得ることができる。	適切な情報収集の手段を選択し、課題の解決のために必要な情報を広い範囲から得ることができる。	課題の解決のために必要な情報を得ることができる。	課題の解決のために必要な情報を得ることができない。	
④	実現性 分析・思考	集めた情報を様々な角度から分析し、日本以外の国々や日本の課題に関わる事実や因果関係、国同士の関係など幅広く状況を捉えることができる。	集めた情報を視点を定めて分析し、日本以外の国々や日本の課題に関わる事実を捉えることができる。	日本以外の国々や日本の課題に関わる状況を捉えることができる。	日本以外の国々や日本の課題に関わる状況を捉えることができない。	
⑤		課題を解決するために効果的で実現可能な新しい価値（アイデア、ビジョン）を生み出すことができる。	課題を解決する実現可能な価値（アイデア、ビジョン）を生み出すことができる。	課題を解決するアイデアを生み出すことができる。	課題を解決するアイデアを生み出すことができない。	
⑥	プレゼンテーション	多様な考えがあることを意識し、発表と相手との交流を通して、自分の考えを深めることができる。	自分の考えを明確にし、相手に分かりやすく論理的に発表することができる。	自分の考えを相手に発表することができる。	自分の考えを相手に発表することができない。	
⑦		多様な視点から課題に迫ったり、実現可能な解決策を具体的に提案したりするレポートをまとめることができる。	学習の仕方や進め方を振り返り、成果や課題を明確にして、レポートとしてまとめることができる。	学習の仕方や進め方を振り返り、レポートとしてまとめることができる。	学習の仕方や進め方を振り返り、レポートとしてまとめることができない。	
⑧	グローバル社会での行動力	国際社会、地球規模の課題を進んで理解したり、解決したりするために自ら具体的な行動をしている。	国際社会、地球規模の課題を理解し、解決に向けて自ら行動しようとする意識をもっている。	国際社会、地球規模の課題を理解しようとする意識をもっている。	国際社会、地球規模の課題について関心がない。	

## ① TRY&ACT の生徒振り返りシートの集計

令和元年度のグローバルリサーチ「TRY&ACT」のプログラムごとに、1年生対象に行った振り返りシートを通してアンケートを実施した。その集計結果は下のグラフの通り、「世界を理解する上で参考になった」とする生徒が89%、少し参考になった11%で、参考にならなかった等は0%となった。

また「世界を変えたい意識がとても向上した」と「少し向上した」生徒が合わせて、90%に達した。本校の研究開発テーマ「国際都市横浜発 次世代ビジネスリーダーの育成」に対して今年度のカリキュラムが期待どおりに効果をあげたことが確認できる。

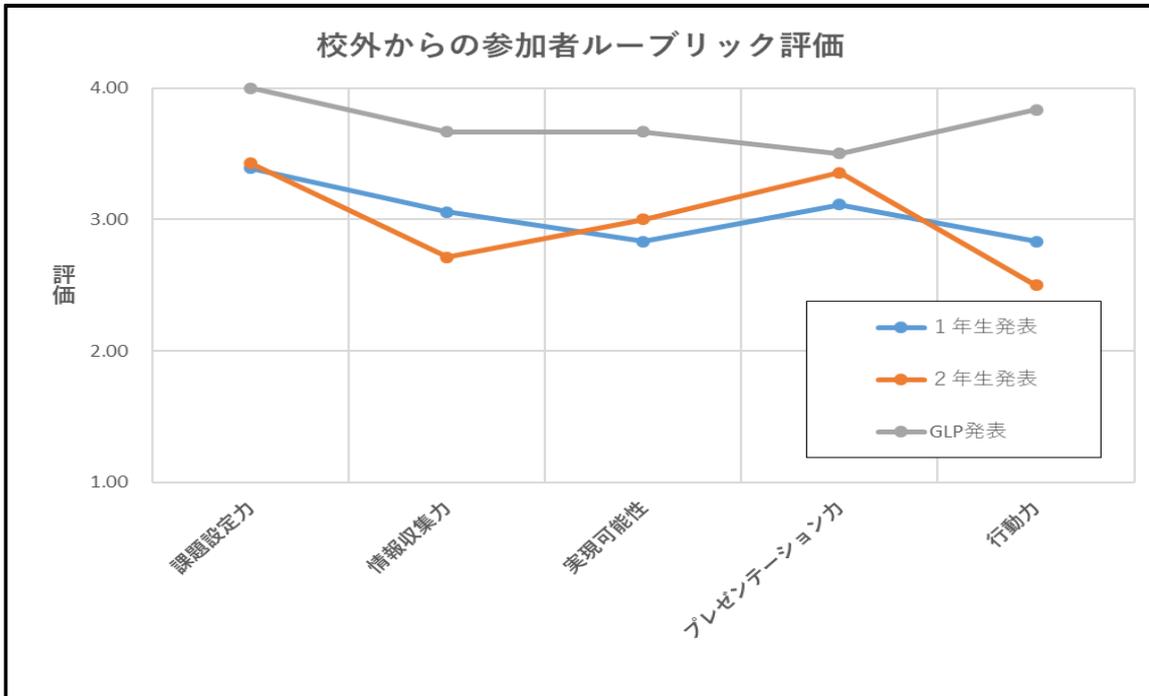


## ② SGH 研究発表会（11月8日）のルーブリック評価の集計

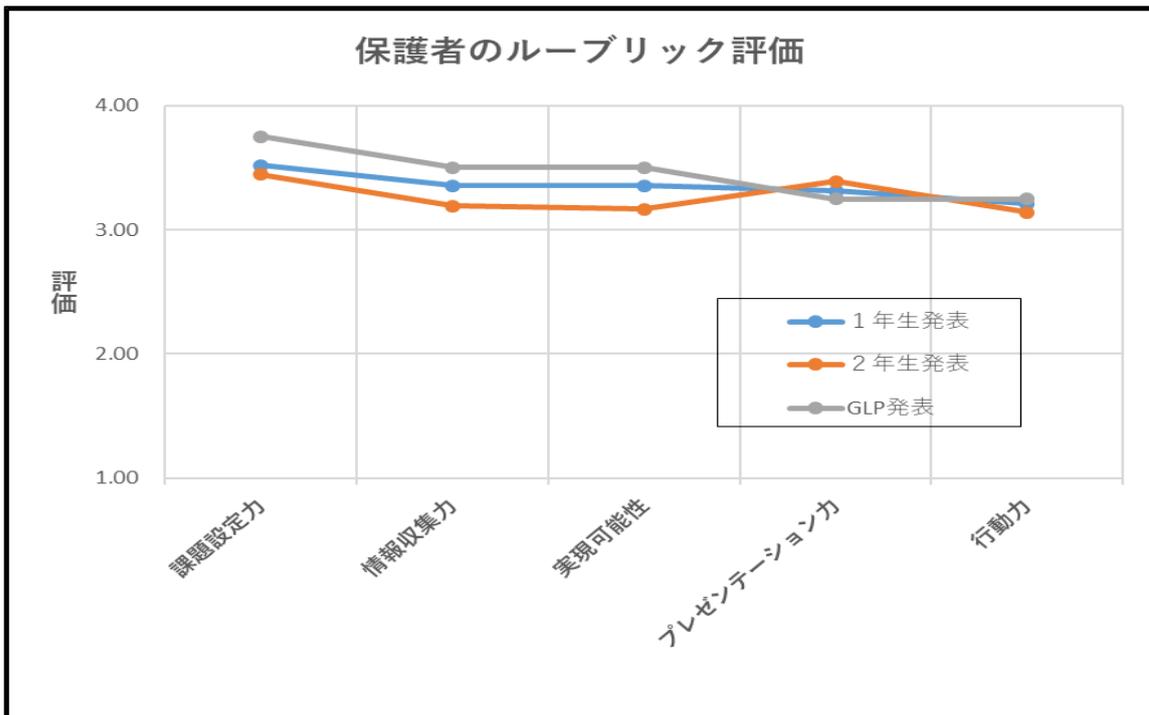
校外からの参加者、保護者、生徒にルーブリック評価を依頼し集計した。

1年生・2年生・グローバルリーダープロジェクト（GLP）の発表に対して、5つの観点（課題設定力、情報収集力、実現可能性、プレゼンテーション力、行動力）について、4段階（4点：よくできている、3点：できている、2点：あまりできていない、1点：全くできていない）で評価を行った。校外からの参加者、保護者、生徒に分けて評価結果を下記の通りグラフにした。グラフから読み取れることは以下の通りである。

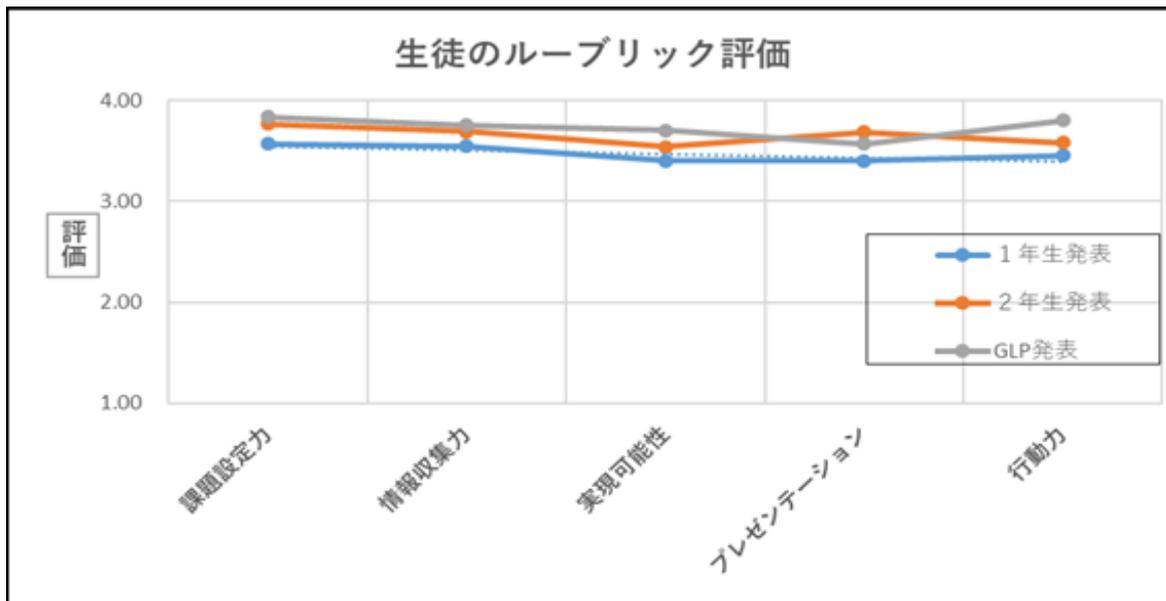
- 総じて4点と3点の間におさまる高い評価となっている。
- 全体的に見てGLPが最も高く、次に2年生、1年生の順になっている。研究の積み重ねにより成長したことが結果に現われている。
- 評価項目ごとでは、相対的にプレゼンテーション力が高く、実現可能性の評価が低くなっている。発表の仕方は良く工夫できているが、解決策の実現可能性の検討が不足していたと考えられ、実現可能となる収支計画、マーケット調査等の根拠をあげられるように指導していく。
- 保護者のGLPに対する期待感からプレゼンテーション力の評価が低くなっている。



校外からの参加者のルブリック評価



保護者のルブリック評価



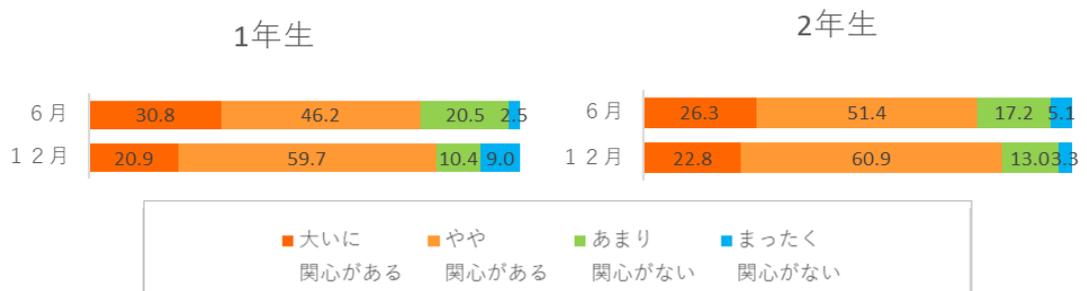
生徒のルーブリック評価

### ③ 生徒のグローバル意識調査アンケートの集計

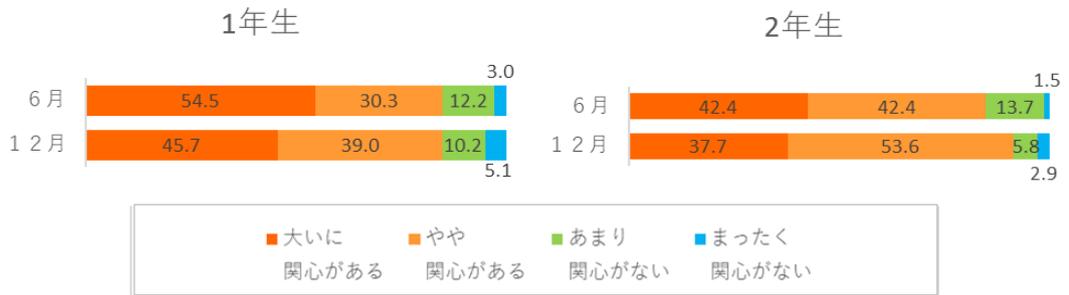
令和元年7月と12月に、1年生、2年生に対して、今年度の探究活動の結果としてグローバル意識がどのように変化したか確認するためアンケートを実施した。以下、各設問に対して、グローバル意識が向上したと回答した生徒数とその割合を記述した。このアンケート結果から、次の点を読み取ることができる。

- 国際問題に関する関心、諸外国の国民性や異文化に対する関心は7月より12月のほうが高くなり、グローバル意識の向上が認められる。
- 12月の時点で40%の生徒が、高校卒業後に国際化に重点を置く大学や海外の大学への進学を考え、40%の生徒が、将来、国際機関やグローバル企業のリーダーとして活躍したいと回答している。
- 国際化に重点を置く大学への進学希望や国際社会での仕事への関心が、6月より12月のほうがやや低くなっているのは、高校卒業後の進路が具体的に絞られてきたためと考えられる。
- 前年度の分析を踏まえて、グローバルビレッジ研修等で外国人講師による国際問題の探究活動、企業の海外進出で活躍した方の研修等を実施したため、国際問題や異文化への関心やSGH指定に関する意識の向上につながった。

設問1 東南アジアをはじめ世界で発生している国際問題に関することに関心を持っているか。



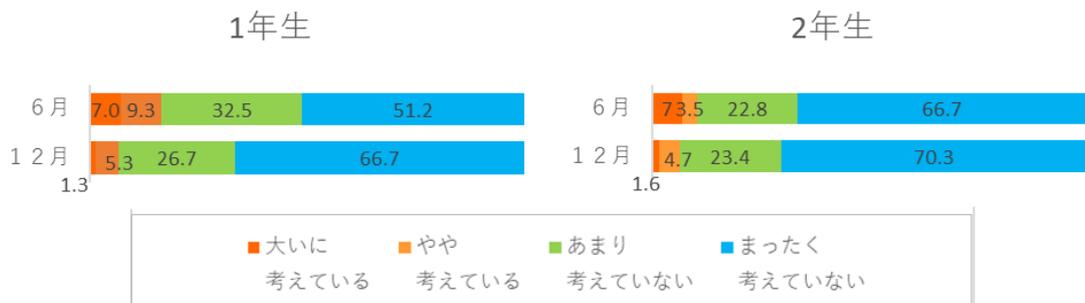
設問2 諸外国の国民性、文化、慣習の違いについて、関心を持っているか。



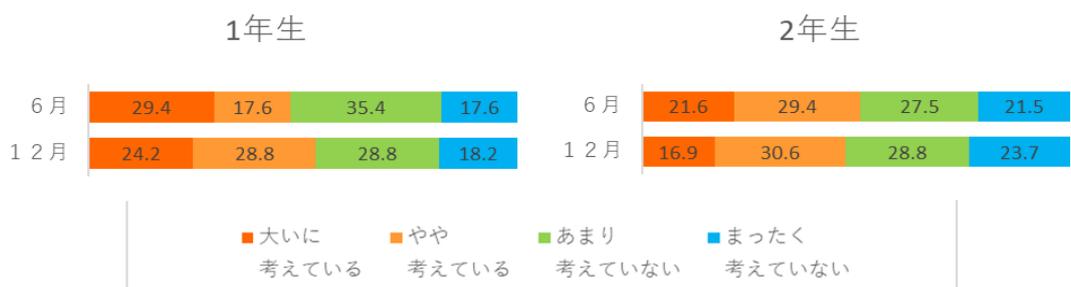
設問3 高校卒業後の進学先として、国際化に重点を置く大学を考えているか。



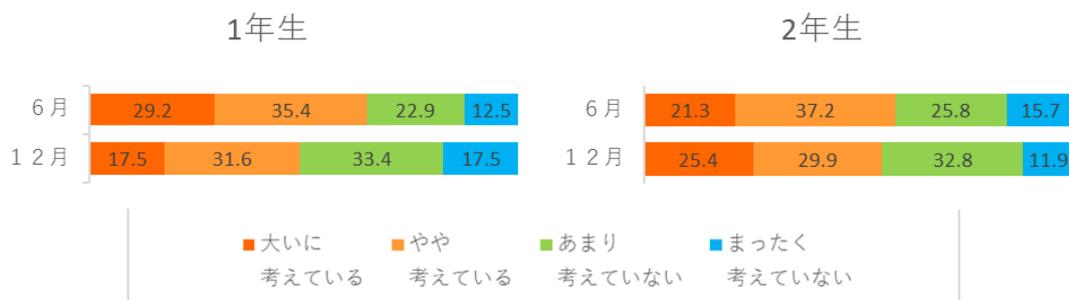
設問4 高校卒業後の進学先として、海外大学への進学を考えているか。



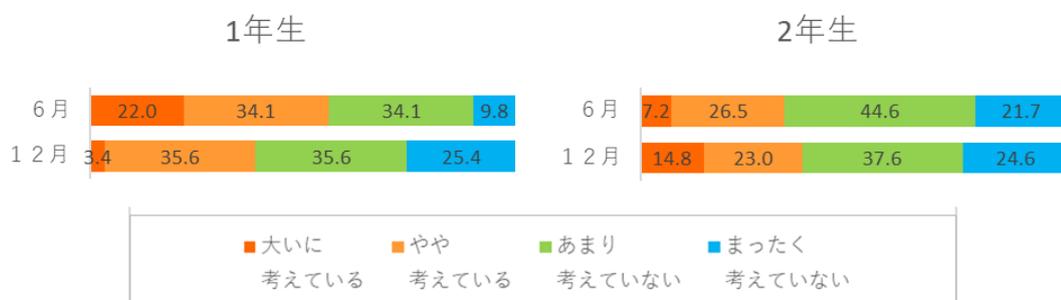
設問5 高校卒業後（大学在学中）に、留学または海外研修に行きたいと考えているか。



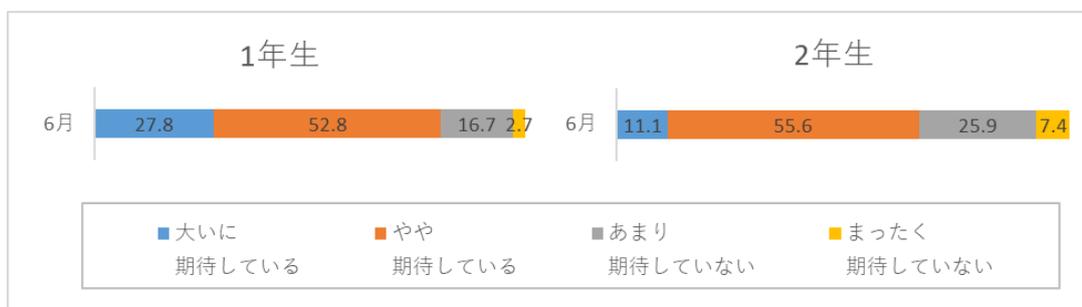
設問6 将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えているか。



設問7 将来、国際機関やグローバル企業のリーダーとして活躍したいと考えているか。



設問8 スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定に関して期待しているか。



## 5. SGH の取組を通しての成長の記録

本校における2年間の探究活動の途中経過を記載した「2年生のまとめ」、3年間の探究活動について3年生が書いた「2年時のまとめ」「3年時のまとめ」「成長を自己分析」、卒業生の「2年時のまとめ」「大学に入って高校を振り返って」の順に掲載する。SGH の取組を通して成長した生徒の記録である。

### (1) 令和元年度2年生の記録

1年生で探究した異文化理解と異文化協働を基盤に、東南アジアの課題を発見し、シンガポール、ベトナムでのフィールドワークを通して課題解決を目指したソーシャルビジネスプランの2年生の段階での記録である。

生徒A 2年のまとめ

映像授業でフィリピンの教育格差を改善する

キーワード：フィリピン 教育 英語 サステナビリティ

#### 1. 要旨

私たちは今回映像授業でフィリピンの教育格差を改善するという研究を行った。なぜならグループのメンバーがフィリピンに訪れたことがあり、そこで目の当たりにした教育格差、加えて貧富の差を改善したいと考えたからだ。

まず私たちは、具体的に何が教育格差を生んでいるのかということを考えて。それは貧富の差であり、また、教育格差の中でも英語教育の拡大がそのまま貧富の差の拡大につながり、それは結果として負の連鎖を生んでいるということもわかった。よって、シンガポールを英語教育のロールモデルに据え、具体的なアプローチについて考えた。

私たちは具体的なビジネスプランとして英語の映像授業というものを考えた。まず日本で学生がテキストと映像授業を購入する。そして、年度を通した授業終了後に教科書を回収し、フィリピンの貧困層の子供たちに送るというものだ。現状として一定の子供たちはスマートフォンを持っているということであるから、英語教育のチャンスとして十分に機能し得るビジネスプランではないかと思う。

シンガポールでの研修を通して、私たちは、まずフィリピンは教育格差を生んでいる経済格差を均一化し義務教育がすべての子供たちに行き渡る状態になる必要があると感じた。現状としては小学生において85%程である。そしてその後、シンガポールのような義務教育が高い水準で行われる国を目指すことにより、持続可能かつ、国の発展にも寄与する教育システムの確立につながるのではないかと考えた。

#### 2. 課題の設定理由

本来は全員が十分な量と質の教育を受け、将来的に等しく就職の機会が与えられる状態が理想である。しかし、現状として、フィリピンでは無償の義務教育が設置されているのにもかかわらず、都市郊外のスラム街に代表される貧困層では、生活に必要な最低限の収入を得るために、児童が働かなければならない。その子供たちは学校に通う時間、勉強に費やす時間が十分に確保できていないという実情がある。フィリピンの英語力は、日本が49位なのに対し14位と高水準であり、英語人口も世界第3位であるとされているが、一部の英語を話せない層においては、親が話せなければ子も話せない。ゆえに所得も改善しないという風に、ますます格差を生むことにつながってしまう。また、世界的な風潮として英語がグローバル言語となっているのは明らかであり、今後の世界で持続的に国を発展させるには、外資獲得なども視野に入れた英語の普遍的な獲得、利用が必要である。発展途上国が次々産業を拡大していく中では国際性が重要視されており、英語修得が就職などの様々な場面で必要とされている。ところがフィリピンの貧困層では十分な教育が施されず、結果的に雇用格差につながっている。その雇用格差によって更なる貧富の差が生まれることで、負のスパイラルが引き起こされている、ということをフィリピンに訪れた班員が実際に耳にしたようだ。

故に、私たちはこれが今すぐ取り組むべき課題であると考え、今回の課題に設定した。

#### 3. 課題解決のための具体的な手立て

英語習得を目的としたテキスト、及びネイティブ講師による英語の映像授業を具体的な課題解決のた

めの手立てとして提案する。詳細として、まず日本国内で英語教育のリソースとして利用しその後、テキストブックをリサイクルしてフィリピンで利用するというビジネスプランを考案した。まず、日本におけるテキスト価格は 1,750 円ほどを想定しており、主に高校などの高等教育機関における英語表現の授業での利用を想定している。

生徒たちには、利用するテキストブックが、フィリピンでの教育格差を改善することにつながるということを伝え、購入につなげてもらう。販売時には、英語教育リソースとしてのこれからの国際社会におけるコミュニケーション力向上につながるという利点を全面に押し出し、加えてテキストの購入によりフィリピンの貧困層の子供たちが、教育を受ける機会につながることを伝える。

そして、このテキストブックにより生徒たちが実際に貧困問題の解決に協力したという経験を得られるということを伝え、教科書の最後のページにはフィリピンの子供たちに向けたメッセージページを設けることにより国境を越えたコミュニケーションを構築する。

#### 4. 結論・まとめ

結論として、私が今回の研究で考えたことを整理するととても良い機会になったシンガポール研修での話を紹介する。シンガポールでの時間を通して多くの気づきを得たが、その中でも最も衝撃的な事実であったのは「シンガポールには塾が存在しない」ということだった。シンガポール研修の前には、教育先進国ということで、国中に塾といった教育リソースがたくさん存在しており、国民は其中で学習することで世界屈指の学力を誇っているのだと考えていた。

しかしながら、現状として、シンガポールには一言で表すのであれば「学校完結主義的教育」が存在していたのだ。シンガポールのロールモデル的教育システムの根幹にあるのが英語教育による外国企業の参入、外資の獲得、そして持続的な国としての発展だ。

これが、フィリピンが将来的に目指すべき姿であると思ったと同時に、私は日本も多く学ぶべきことがあるのではないかと考えさせられた。まずは国民全員が義務教育を不自由なく享受し、そしてそれに伴って義務教育のレベルも上がる。フィリピンだけでなく日本も英語教育を通して、シンガポールのようなグローバル先進国のロールモデルに近づけていければいいのではないかと考えさせられた。

#### 5. 活動を通して得た学び、発見、今後に活かしていくこと、今後の課題

私を感じたのは、広い視野を持つということの重要さだ。このように書くと、とてもありふれたことのように聞こえるがそう感じる場面が多くあった。その一つの例が、フィリピンにおける教育の現状を理解しようとしたことで、日本における英語教育やその国の持続的な発展にどのように影響するかを考えられたということだ。

今回の学びを通して、普段の生活の何気ない機会から世界を変えるようなアイデアが生まれることもあるのかもしれないと思うことができた。私は幸いにも先進国に名を連ねる日本に生まれ、教育を受けている。つまりはその分、世界のどこかで苦しんでいる人を救う責任を持っているということなのだ。自分には何ができるのかということ素直に考えて、その責任を果たしていきたいと思った。

#### 6. 後輩へのアドバイス

T&A のために皆さんに与えられた時間は、200 人全員が同じです。そして、ビジネスプランを考える時間などその時間は多くが皆さんに委ねられていると言ってもいいでしょう。

つまりはこの時間を生かすも殺すも皆さん自身です。高校三年生には受験が待っていますし、国境を越えた問題を真剣に考えるというのは、皆さんの将来次第ではこれが最後のチャンスかもしれません。

皆さんの学びが実り多きものであることを願っています。

#### 参考文献

- ・ 幻冬舎 英語人口は世界 3 位 フィリピン経済を支える 「国民の英語力」  
<<https://gentosha-go.com/articles/-/10157>>

キーワード 重力水渦発電 小水力発電 発電システム タイ

### 1. 要旨

今回我々は重力水渦発電機（じゅうりょくすいかはつでんき）に着目し、重力水渦発電機の稼働の物理学的に見た利点とその改良、経済・社会的な利点の二つの視点からタイを代表例とした電力に問題を抱えた国、地域に加え、日本の電力自給率問題への対策になると考え、研究した。

研究は大きく分けて実験と社会的観点からの検討の二つを行い、実験では排水口とブレードの改良とそこから得られたデータから水流の発生仕方など従来型水力発電より力学的な効率に優れていることを解明した。社会的観点からは、他の再生可能エネルギーとの比較や費用の試算、発電量の検討を行い、モデルとしたタイにおける効果を考察した。

### 2. 課題の設定理由

モデル国をタイ王国と決定し、タイ社会の問題を調査していくと、電力供給能力が貧弱であることを知った。このような例をはじめ世界中でエネルギー不足と共に電力供給システムへの不安感が高まる現代において、再生可能エネルギーを用いた新たな発電機構の発展が期待されている。その中でも我々はインターネット上で、「重力水渦発電機」という小水力発電システムに目を付けた。この発電システムは水流が生み出す渦の運動エネルギーを利用し、従来の小水力発電機では難しかった低流量・低落差といった状況でも効率的に電力を確保することが出来るとされていた。

昨年度から我々は研究を継続しており、この重力水渦発電機の小型モデルを作成し、排水口の形状を変えることによって発生する電流が大きく左右することを突き止めた。また、重力水渦発電機において発生する渦の性質を説明する理論を構築した。

本研究ではこれを下地に置き、社会的な提言が行える結果を求めて研究を行った。

### 3. 課題解決のための具体的な手立て

#### ①重力水渦発電機とは

重力水渦発電機とは、自然な落差によって円筒形の水槽の中に水が引かれ、水槽の底面の中心部分の穴が排水口の役割を成すため水は排水に伴って強制渦を発生させる。この重力の作用で生じる渦における力（以下、渦力※）を利用してローター（羽根車）を回転させ、それによる動力で発電機を回して電気エネルギーを得る発電システムである。

※ここでは「渦の回転運動によって生まれる、回転方向に沿った力」と定義する。

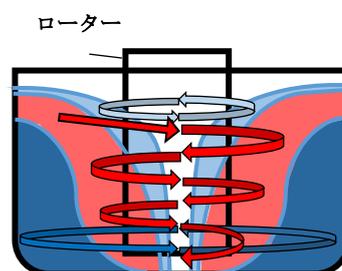
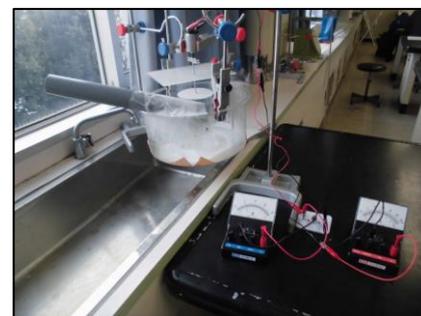
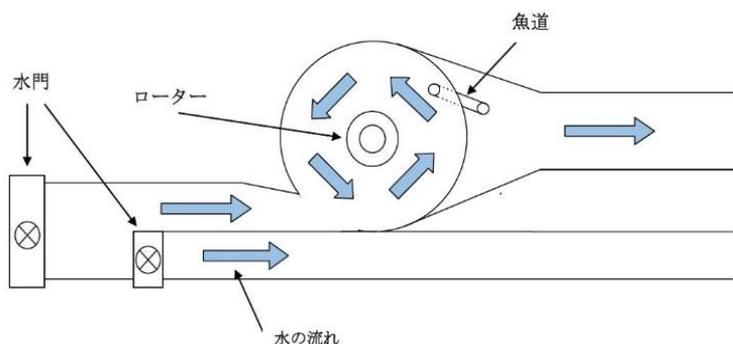
#### ②重力水渦発電機の他発電機への優位性

我々はこの発電システムについて効率化とメカニズムの解明を行ったが、ここではメカニズムについての概略のみを示す。

流体の流れを可視化する方法の一つとして「油膜法」という実験方法の存在を知った。これは、表面に油を塗った物体を流体中に固定し、その物体の表面を移動する水の流れが油の流動によって可視化されるというものである。

油膜法はディーゼル油が使用されることが多いが、入手が難しいため粘度の近い蜂蜜で代用した。

結果、左図のように、水槽全域に渡ってほぼ横向き水流がある事がわかった。従来の水力発電が直線に落ちる水流を回転に変換して発電し



ているのと比べてエネルギーの伝達効率が圧倒的に良いことがわかる。

### ③ビジネス、社会における重力水渦発電

小水力発電は村や集落単位で設置する小規模な発電システムであるため、費用や柔軟性が重要だが、重力水渦発電機の実用面での特徴としては低価格、省スペース、高出力が挙げられ、その要件を満たしている。この発電システムは土木工事費用の必要性が少ないために安価に設置できる。また、従来の省水力発電や太陽光発電と比べて少ない占有面積で大きな電力を供給できる。

これらの利点はどんなところでも活きるものである。

また、重力水渦発電機の余裕のある構造は洪水が多いタイでも運用に耐えうると考えられる。

## 4. 結論

以上の研究よりこれらのことが言える

- 重力水渦発電機のメカニズムについて  
重力水渦発電機に発生する水流はほぼ完全に横向きであり、高効率である。
- 重力水渦発電の実用化について  
その他の発電システムと比べて優れた点が複数あり、モデルとしたタイをはじめ様々な国と地域での実用化が望める。

## 5. 終わりに

科学的研究に多くのリソースを割いたため、ビジネスプランと言うよりは社会への新技術の提言に近くなったが、これも継続可能な社会の実現への研究であり、満足できるものだと考えている。

我々は今後も科学的に重力水渦発電機の研究を継続し、それらの問題点・未解決点を解消するとともに実用可能な最高効率の発電機を目指していくが、それに加え今回得た実際に運用した際の社会への影響や利益についても深めた研究をしていこうと思う。

## 6. 後輩へのアドバイス

研究をする上で最も重要なことはテーマの設定である。これが研究の優劣を決めると言っても過言ではない。本来はもっと長い期間をかけてテーマを選定するが、T&A活動のなかではとても短い期間で決定することになる。短い期間で決めるうえで最低限推奨したいこととして、テーマは企業などによって研究されていないこと、最終的な結論が作りやすいこと、そして愛着を持って研究できることを重視して設定すべきである。

## 参考文献

- 川の生態系への負荷が少ない小型水力の新技術  
<<http://blog.goo.ne.jp/swisseco/e/7894703c2e59a2e1aed128a1c957ca82>>
- 呼吸する発電機 VORTEX[重力渦水式小水力発電システム]  
<<https://www.slideshare.net/SHINODAECO/vortex-23258697>>
- 小水力発電がわかる本-しくみから導入まで-  
編者：全国小水力利用推進協議会 竹生修己平成 24 年 5 月 15 日 第 1 版発行  
自著「排水口の変化による重力水渦発電の効率化～ランキン渦の一般化～」
- 「3次元ランキン渦の層分布の解明～重力水渦発電機の効率化Ⅱ～」  
富田遥貴 中山大輝 著

## (2) 令和元年度3年生の成長の記録

本校における3年間のSGHの取組を終え、卒業する生徒が書いた「2年生終了時のグループ研究のまとめ」→「3年生終了時の振り返り」→「成長を自己分析」の順に掲載する。SGHの取組を通して成長した4名の生徒の記録である。

### 生徒C 2年時のまとめ

### マレーシアの肥満を美味しく解決！

「東南アジアの課題を解決するためのビジネスアイデア」というテーマでこれまでやってきて、1年生の時の活動を活かしながら取り組んできましたが、実際に課題を見つけるというものも難しいものでした。私の班は同じ「食」という枠に興味を持ち集まって食に関しての東南アジアの課題を見つけビジネスアイデアを考えました。マレーシアに絞ってその国の経済状況や人々の週刊、食文化などをインターネットに頼って進めてきました。

しかし、マレーシアにおける食に関しての課題とはなんだろうか、いざ始めて、何もわかりませんでした。インターネットで見ると出てはきますが、サイトによって多少のばらつきがあり、定めるのが難しいのです。その上、日本ではたとえそのことを問題視していたとしても、実際にその国で問題視しているとは限りません。だからこそ、自分の足で現地へ赴いて、自分の目で確かめて、自分で人々からの声を集めるという大切さを知りました。動かないことには何も始まらない。頭を使うよりも先にとりあえず行動してみる。それが課題発見における第一歩だとわかりました。そんな中私の班は、マレーシアでは肥満が多いという点に着目してビジネスアイデアを考えることにしました。しかし実際にはこの課題においてもマレーシア人が問題視しているとは限りません。日本は痩せ型の人がとても多く、問題視されています。このことは日本にいるからこそわかることです。だから、日本から相対的に見てマレーシアでは肥満が多いというのがあるかもしれないのです。シンガポールに行ったときに肥満の人がいるか、周辺を見渡してみてもほとんどいませんでした。確かに日本人から見て肥満かなと思う人はいましたが、現地の人に肥満の人が多いか尋ねてみても微妙な反応でした。このことを含めて課題の発見のためにまずやることだと思いました。

次に課題を発見した後のその原因についてです。私は1日5食、交通機関の料金が安価であるため徒歩移動が少ないことや、安価なため外食が多いからという3点をあげました。交通機関の料金が安価であるため徒歩移動が少ないというのは、シンガポールに行ったときに感じました。目的地に着くために、近い距離でも地下鉄に乗るように案内されました。至る所に駅があるのです。1日5食に関して確認はとれませんでした。1つ言えるのはアスリートにとってはこれは当たり前のようにあります。つまり、一歩外の世界に行くと当たり前ではないと思っていたことが当たり前になることもあるのです。昔貧しかったころの日本も1日2食または1食が当たり前だったでしょう。外食が多いということに関しても調査はできていませんが、ただ安価だということは確かです。しかし、私はヘルシーにこだわっているお店を見つけました。このようにすべてが安価で高カロリーなものが多いとは限らないようでした。

課題を発見し、原因を突き止めたところで、ビジネスアイデアを考えます。実はこの作業が一番楽だったりします。課題と原因を見つける過程が難しいのです。ビジネスアイデアというのは、その国のいいところをうまく利用しながら立てるものです。いいところはすぐに見つけられます。現地へ赴いたら身をもって感じる事ができるのです。例えば、興味のあるお店に初めて行って、他にないような面白いものを見つけた時「何これ！面白い！」と思うことができるでしょう。それと同じ感覚です。そしていくつかのいい点をうまく組み合わせて1つのものに仕上げるのです。私はマレーシアは果物や野菜が安価でとてもおいしいという点を利用してスムージーを作りました。果物や野菜は特産物でも有名です。値段を見ると安い、食べてみるとジューシーでおいしい。もちろん特産物だからと言って全員が好むわけではありません。例えば、人によって好みははっきり分かれるドリアンなど。そういったことを踏まえながら特産物の果物や野菜を使ってスムージーを作り、1日1食分置き換えることで以前よりもヘルシーな生活を送れるだろうと考え、この課題を解決することができました。

T&Aの活動を通して私自身が感じたのは、まず頭を使うよりも先に行動すること。もちろん多少の情報を得たうえで実際に現地へ赴いて身をもって感じる。これが一番大切だと思いました。そして、試作品を作ってみる。失敗をしたならやり直せばいい。この失敗も1つの発見だからです。「試してみる、行動し

てみる」これが本当に何かの扉を開くカギになるのだと思います。今後自分が何か難しい課題に直面した時、まずは固まらず手や足を動かしてみようと思います。そうすれば何かが変わる、何かが変わっていくと信じて。チャンスは有限の中でも無限にあるのです。地球上にある有限な資源の中で私たちには無限の可能性が秘められているように。

生徒C 3年時のまとめ

180度見えるものが変わる

私は3年次の夏に住んでいる町で募集されていた姉妹都市交換留学に参加させていただき、2週間アメリカへ行ってきました。2週間という少ない時間ではありましたが、私が得たものの価値はとても大きいものでした。派遣される前の事前研修ではSDGsについて細かく調べ、派遣中は異文化に触れながら日本とアメリカの違いを探し、事後研修では我々にできることは何かについて考え、それらを発表させていただく機会がありました。どんな違いがあったかは現地に行きすぐに感じとることや、発見することができました。空気から物の造りなど、ありとあらゆるものが全く違って新鮮そのものでした。見たものを写真におさめることはできましたが、感じたことは何かにあらわせるわけではありません。だからこそ、自分の中に忘れないようにおさめるのです。そしてそれが自分の考え方に影響を与えてくれたのでした。

派遣前の私はいかにも日本人らしい性格でした。謙虚であり意見を言わない、それなのになにかと自分に厳しくして、自分の中だけで問題を解決しようとする。そんな自分の殻にこもっているような私でしたが、アメリカに行き現地の人たちや、その都市の他の姉妹都市であるフランスや台湾の交換学生ともたくさん触れ合いながら2週間で過ごすうちに、居心地のいい場所へと変わっていきました。彼らのアットホームな性格とマイペースさに最初は戸惑われましたが、そのような人たちだったからこそすぐに馴染めたのかもしれません。それから私は180度考え方が変わりました。

日本人とアメリカ人を比較したとき全く違うことは、時間の使い方でした。アメリカ人は、時間通りに動かないことが当たり前のように物事に対してとてもアバウトです。最初はもどかしく感じていたものの、慣れてしまい、いつしかそれが自分の中でも当たり前になっていました。今の私には、彼らのほうが時間の使い方は上手なのではないかと思えます。時間をきっちり決めてその通りに動くことは何かに縛られているように感じます。それがストレスに繋がったりするのではないのでしょうか。だから今は少し物事をアバウトにとらえるようにしています。そうすると、客観的に広い視野でとらえることができます。そのような考え方をしてから私自身の心に少し余裕ができました。つまりゆとりというものができるようになったのです。

今考えると、アメリカへ行く前の私と後の私では全く違うものがあります。物事のとらえ方や考え方を変えてから、自分の中の何かが大きく変わったのです。見た目も変わりました。食べ物に対する規制を少し緩めたら体は少し大きくなりました。ですがそれは自分の考え方が変わったからであり、そんな自分でも今の私には受け入れられます。心にゆとりができたからです。彼らが私に与えてくれたものは、今後の私に大きく影響を与えてくれるものでした。その価値はとても大きいものです。このように、海外に行き、文化の異なる人たちの中で過ごすことで、自然と変わっていくものがあります。そしてその価値が気づけたとき自分のものになったと言えるでしょう。私は、この体験を通してもっと多くの人に異文化を学ぶことの大切さを知ってもらいたいです。私は彼らと過ごすことで彼らの色に染まりました。ですが、私を失ったわけではありません。これも私なのです。これからも自分を持ち続けようと思っています。

生徒C 成長を自己分析

自分の創造

私は中高一貫校に高校から入学した、いわゆる高入生です。この南高に入ろうと思った理由の一つにSGHに指定されていて他国のことをもっと知れるだろうと思ったからです。今振り返ると、この3年間で予想以上のものを得ることができました。基本的知識はもちろんですが、物事の考え方やとらえ方、なにより広い視野を得ることができました。

1年次にはグローバルビレッジ、2年次にはシンガポール海外研修で、T&Aという活動を通して異文

化に触れ、考えて行動する力が養われました。3年次には学校と関係があるわけではありませんが、アメリカへ行き、貴重な体験をたくさんしてきました。そして大学進学にあたり、自分の将来について考えるようになりました。自分が将来やりたいことはなんだろう、好きなことはなんだろう、と。しかし、なかなか見つけることはできずに何となく日々を過ごしていました。その中でこれらの経験が私のいろいろなものを変えてくれて、異文化を学べただけでなく、自分に取り込めた気がしました。そして、いろいろな国へ行きいろいろな文化に触れ、新しい自分を常に飽きることなく創造していきたいと思うようになり、また、自分だけでなく他の人々にも影響を与えられる人になろうと思いました。

将来やりたいことは決まったので、では今何をしたらよいか考えたところ、ちょうどアメリカ留学していた時に勉強していた SDGs についての自分自身の意見などを発表させていただく機会があり、他の人の意見も聞くことができました。今の私にできることはたくさんあります。まずは、情報を発信することです。実際にインスタグラムなど SNS を使いよく発信しています。このような行動力がついたのもこれらの経験からです。

高校を卒業し、大学進学をして4年間はまだまだたくさん幅広い分野を学ぶチャンスがあります。その時間を無駄にしないように、高校3年間で得たものを活用して広い視野で知識を身に付けたいと思います。そしてまた、大学で学んだことを活かして将来に役立てたいです。

私の高校3年間は、その時は面倒だと思っていたことも今の自分に繋がり助けとなってきているので、とても有意義な時間でした。この先の将来も最期には有意義だったと思えることをたくさんしていきたいです。

## 生徒D 2年時のまとめ

## ベトナムの水質汚染を改善する

私達はベトナムの水質汚染の改善をテーマに設定しました。なぜなら、ベトナムの様々な環境問題の原因を調べていくと水質問題に帰着すると分かったからです。また、デザイン思考で環境問題を整理した時ベトナムでは家族から出る排水の方が工業排水よりも多いことと、家庭排水の主成分が油であることが分かりました。よって、家庭から排出される油を減らす方法について考えることにしました。まず、最初に家庭から油を回収することを思いつきました。しかし、現地の人になりきって考えた結果、無料だと協力してくれる人は少ないと予想しました。そこで、回収した油を製品にして売った利益を還元することにしました。また、廃油から作った製品なので、清潔さがあまり要求されなくて作るのが比較的容易な固形石けんをつくることに決めました。その後、シンガポールに行くまでの間、より効率的で安く済む方法を考えた結果、いったん回収した廃油を日本に持ってきて製品にした後ベトナム等の発展途上国で売ることになりました。この方法だと発展途上国で高い技術が必要な精密な機械を作る必要がありません。また、活動が行われていることを発展途上国の人にアピールすることが出来ます。以上の検討を行った後シンガポールに行きました。

シンガポールでは大きく分けて4つの活動を行いました。

1つ目は街頭インタビューです。グループで男性10人、女性10人合計20人取りました。行った質問は3つで「1. 固形石けんを使うか 2. 石けんを使う頻度 3. 廃油石けんがあったら使いたいかどうか」です。アンケートの結果から、ほとんどの人が液体石けんを使うことと、廃油石けんに対して汚いから使いたくないという考えを持っていることが分かりました。そこで、固体石けんではなく液体石けんを販売することにしました。一方、このアンケートの対象が質問に答えてくれやすい年配の方に偏ってしまったことが唯一の反省です。

2つ目は、石けんの価格について調べました。スーパーやドラッグストアで調べました。1番多く売っていたものは Dove で約5シンガポールドル（400円）でした。

3つ目は、シンガポールの衛生状況について調べました。ガーデン・バイ・ザ・ベイやホーカー(屋台)に行きました。特にホーカーは清潔な観光地とは対照的に床にゴミが落ちていたりテーブルの上に食べ残しがあるままあったりと少し劣悪な状況で参考になりました。

4つ目は、ニューウォーターです。自分達の調べているベトナムに比べてシンガポールはとてもきれいな水を流すために複雑な仕組みの機械を用いていることが分かりました。

以上のことを調べた後に研究発表会に臨みました。

発表では、実際に排油石けんを作った方が良かったのではという意見や、製産を日本でやるのは輸送費が膨大にかかるため回収した国で行うべきという意見等有力なアドバイス、新たな視点を得ることが出来ました。また、実際に発表する為に分かりやすく伝えようと原稿を考えた時に、自分達のビジネスプランの軟弱さに気が付きました。(具体的には、廃油石けんの価格が適正なのか等です)これら T&A を通じて学んだことや成長したことが2つあります。

1つ目は、他の国に興味を持つことです。なぜなら、普段高校生として生活しているだけなら意識することがないからです。

2つ目は、勇気です。例えば、シンガポールでインタビューした時、ものすごくたくさんの人に断られましたが、何人も話しかけているうちに親切な人がいることに気付くことが出来ました。一方普段高校生として生活している時は、仲の良い人ばかり話してしまうのでシンガポールの経験を生かして高校生活でも交友関係を広げられるようにします。

最後に、後輩へのアドバイスです。

1つ目は、行動することの重要性です。自分達の活動を通じてビジネスプランを作るとどうしても計画ばかりで実現性・具体性が乏しくなると考えました。

2つ目は、1つ目と関連して流通経路やサービスの金額を細かく計算した方が良いことです。自分達が SGH 発表会を行った時、この部分についてはっきりしない部分が多いと指摘や質問を受けました。

3つ目は、インタビューをした方が良いという事です。私は、インタビューを通じてシンガポール人と言ってもいろいろな性格の人がいることを文字面だけでなく実際に肌で感じる事が出来ました。

## 生徒D 3年時のまとめ

## 3年間のSGH活動を振り返って

1年生では Try&Act の授業でマシュマロタワーゲームに挑戦した。このゲームはパスタ、テープ、ひも、マシュマロを使って 自立可能なタワーを立てるチームビルディングの為のゲームで、最も高いタワーを作ったチームが優勝となるというものである。単純にゲームがおもしろく夢中でやっているうちに気づいたらグループの人と仲良くなっていた。私はこの体験を通じてチームワークの大切さと、他の人のちょっと奇想天外なアイデアでもすぐに否定せずにとりあえず受け入れて、やってみることで新たな発見や自分にはない自由な発想が生まれることに気づいた。

その後グローバルビレッジに参加した。特に印象に残ったのは BafaBafa である。これは、2つの架空の文化を作り、擬似的に異文化に遭遇する中で、自分と異なる文化への感じ方や行動、異文化間の交流のあり方を考えることが目的のグループワークである。具体的には常に陽気である  $\alpha$  国の住民と真面目で表情が固く、厳しい雰囲気のある  $\beta$  国の住民が異なるカード交換ルールの中でカードを交換するものだ。 $\alpha$  国にいた私は初め  $\beta$  国の人との交流を楽しみにしていたが  $\beta$  国の人々の排他的な態度をみて呆然とした。私はこのワークを通じて異文化を受け入れるには、並々ならぬ勇気が必要だと身にしみて感じた。

1年生の秋に私は新潟の IUJ (国際大学) を訪れた。最終日フェアウェルパーティーが行われた。私は環境問題に関心があるため様々な人に地球温暖化について聞いてみた。すると国によって気候が違うため、自分が良いと思っていた方法が必ずしも通用しないことや環境問題への意欲に対する温度差が人によって大きく異なることに気がついた。その経験から私は今後海外の方と一緒に仕事する際は、事前にお互いの考えや文化をある程度理解しておく必要があると思った。また曖昧なニュアンスが伝わらない異文化交流だからこそ英語はコミュニケーションツールとして重要だと思った。

2年生では、シンガポールで B&S を行った。これは2年生全員が参加する5人1組で現地の大学生と一緒にやる調査活動である。私のグループはショッピングセンターやスーパーで価格調査をした。また、廃油石けんのインタビューを行った。現地の人にとって廃油石けんがどんなものかイメージ出来なかったのも、インタビューではたくさんの人から油で作られた石けんは汚そうだから使いたくないという意見が聞けた。その時私はグループで作った環境に優しい石けんは消費者目線に立っておらず発展途上国の川に流れている廃油を回収することありきになっていたことに気づいた。そこから私はビジネスプランを考える際は、実際に試作品を作り、他の人に使ってもらい商品として成立するかどうかを確認することも大切だと考えた。またインタビューの回答者からの質問に対し答えるのに必要な語

彙が出てこなかった。その結果こちらの質問内容が伝わらないことがあった。この経験を通じて準備の大切さに気づいた。

私がグローバル社会で働く際に大切なことを学ぶことが出来たのは SGH のイベントの時だけではない。例えば1年生や2年生の時にグループ活動をしている時だ。特に廃油石けんのビジネスプランを考えている時に流通にかかる費用を指摘する意見や Instagram で有名人に紹介してもらって知名度を上げようといった意見は製品の原材料にかかる費用や製品の見た目ばかり気にしていた私にとっては新鮮なものだった。私がこのような経験が出来たのも SGH のプログラムがあったおかげである。今後の人生にこの経験を活かしていきたい。

#### 生徒D 成長を自己分析

#### 未来の国際環境問題を解決するために

2019年はグレタさんが国連で環境問題の解決を訴えたり、環境大臣に小泉進次郎さんが就任したりしたことが注目された。近年環境問題は深刻な国際問題になっている。また、私は陸上部に所属していたが、東京オリンピックのマラソンも東京が異常に暑すぎるせいで北海道に開催地が変更されるなど私達のすぐ近くにも地球温暖化の影響は確実にきている。附属中学校に所属していた頃、私は環境問題に関心があったが、解決のために何かしてあげたいと独善的な考えを持っていた。しかし私は SGH の様々なプログラムを通じて成長すること出来た。

1年生では異文化の方と一緒に働くために必要なことについて考えた。グローバルビレッジではレクリエーションを通じて異文化交流について考えた。その後、私は新潟の IUJ (国際大学) を訪れた。私は関心がある地球温暖化について海外出身の大学生と意見を交わした。2年生ではベトナムの川の水質汚染を改善するために廃油石けんを作るビジネスプランを考えた。実際にシンガポール研修旅行の際には石けんの価格調査や街の衛生状況の確認や現地の方へのインタビューを行った。3年生では後輩たちと SGH の活動について話し合ったり発表を見たりして新たな視野やアイデアを得た。その結果活動を振り返るとともに自分の進路選択に活かすことが出来た。

これらの出来事から私はぼんやりとだが国際社会で環境に関する仕事をしたいと思うようになった。なぜなら環境問題は1つの国が原因で起きているのではないため国際的な協力が不可欠であるからである。また、異なる生き立ちを持つ人が一緒に仕事をした方が自由で斬新な発想が産まれると考えるからだ。私は今まで誰も思いつかなかったようなアイデアを作り上げるため、異なる文化や考え方の中で働いてみたいと思っている。今までの経験を通じて海外の人と一緒に働くためには、相手の持つ文化や考えを否定せず受け入れる勇気をもつことやギャップを埋めるために英語で会話を重ね相手を知る努力を怠らないことが大切だと考えた。

大学では仕事で使えるレベルの英語を学びたい。特にスピーキングだ。なぜなら私はシンガポール研修旅行に行った際に自分の R と L の発音が悪く、意味が通じなかった経験から文法的に合っていれば大丈夫という英語はビジネスでは通じないと思っているからだ。また、リーディングは自分の専攻の英語の論文を自分の学びとして理解できるレベルまで高めたい。更に大学の海外の方と交流できるゼミを利用して実践経験を積んでいきたい。

また環境問題に多角的にアプローチするために必要な学問を横断した学びをしたい。また大学のプログラムを利用して1年生から研究してみたい。そうすることで2年3年の自分の進路実現のために何が不足しているのかが明らかになると思う。また、このプログラムは発表機会もたくさんあるのでそこで周りの方からのフィードバックを頂き、現実的に物事を考える力を養ったり、見識を深めたりしたい。

大学卒業後は専門的な英語と確かな環境問題への知識を用いて UNEP (国連環境計画) 等の国際的な環境問題を扱う組織に入り、世界中の現在進行している環境問題に取り組みたい。自分と同じような志の人と、共に仕事をすれば、斬新かつ技術的な議論ができると考える。更に世界のリーダーや実務者に直接メッセージを伝える機会もあってやりがいがあると思う。

もうひとつの選択肢として考えていることは、大学の特別プログラムを通じて出会う仲間たちと大学卒業後も協力して一般企業に所属しながら NPO として環境問題に取り組むことだ。それぞれが身に付けた多岐に渡る知識を組み合わせたらどんな化学反応が起こるのか。またこの反応の先には1人では決してたどり着くこと出来ないだろう画期的なアイデアやイノベーションを起こすことが出来ると信じている。

私達のグループはシンガポール料理をもっとたくさんの人に広めるためのビジネスプランを考えた。シンガポールといえば何かと考えたときに、マーライオンやマリナーベイサンズなど有名な観光地はたくさん出てくるのに、有名な料理は他の国に比べて出てこない。またインターネットで地元で食べられている料理を調べてみてもピンとくるものが少なく、最近流行りの“映える”食べ物も少ないように感じられた。そこで私達はシンガポールで食べられている食べ物を日本人に合うように改良してもっとたくさんの人に広めようと考えた。

そこで私達が使う食べ物として選んだのは“ロティプラタ”とよばれる、ナンのようなパンケーキのような主食でもおやつとしても食べられるものだ。ロティプラタは、もとはインド発祥でそこからマレーシアやシンガポールまで流れてきており、今ではシンガポールのローカルフードとなっている。シンガポール内では主にホーカーズと呼ばれる屋台が集まっている場所でロティプラタが売られていることが多く、その他にもアラブストリートと呼ばれるインド人が多く生活する街などのカレー屋さんでも食べられることが多い。私達はこのシンガポールで手軽に食べられているロティプラタを、よくクレープ・ケバブなどの販売で使われているようなワゴンを使い日本で売るというビジネスプランを考えたのだ。また、先ほどにも書いたようにロティプラタは主食としてもおやつとしても食べることができる。そのためお店では主食として食べられるようなトッピング（カレー、ツナ、シチュー、など）とおやつとして食べられる甘いトッピング（チョコ、アイス、チーズ、ジャムなど）の2パターン展開していくことにした。

グループではまず、実際に食べることはできなくてもロティプラタにはどのような種類があるのか、どのように作られているか、どのくらいお店があるのか、などインターネットで調べられることは調べた。その情報をもとに、なるべくたくさんの本場のロティプラタを食べられるように細かいお店まで設定してシンガポールでの調査の計画を立てた。実際に行ったシンガポールの調査では、ロティプラタ屋さんのお店の雰囲気や味、値段などを調査した。シンガポールにはロティプラタ屋さんは思ったより多くなくやはりホーカーズやインド人が多く住む街に多かった。アラブストリートのカレー屋で食べたロティプラタは2枚で1.2SDほどでとてもやすかった。またプレーンはもちろんチーズ味などもありやはりロティプラタはいろいろな味で楽しむことがわかった。また、私達はロティプラタ以外にもシンガポールで食べられているスイーツや手軽なご飯を調べた。私達が実際に食べることができたのは、かき氷やタピオカドリンク、スムージーなどだ。どれも日本でも流行っている物であり値段も日本とシンガポールではほぼ変わらなかった。このことから、日本でも同じように、シンガポールで食べられている食べ物は多くの人に食べてもらえるのではないかと考えた。シンガポールから家に帰ってきて、私達はロティプラタの試作品づくりを行った。インターネット上にあったロティプラタの生地作り方を参考にしてその生地に合いそうなトッピングを買ったり混ぜたり作ったりして、どのようなものが向いているのか考えた。私達が試したものは【カレー、ホワイトシチュー、ツナ、ハム、アイス、チョコシロップ、メープルシロップ、フルーツ、イチゴジャムなど】であるが、生地がシンプルなのでほぼすべて美味しく食べることができた。また、材料費やかかった時間などから単純計算したところ、1食200~300円で売ることができそうだった。また実際にメニューとして出す際には味だけでなく、食べやすさや話題性なども必要となるし、お店を出すとなったら土地代や人件費などいろいろなことを考えなければならない大変さを実感した。

私はこれらの活動を通し、実現するために時間を考慮しながら計画を立て実行していく難しさと大切さを学んだ。週一時間という少ない時間の中で課題を見つけるところからはじめ、実際に調査し、最終的にはビジネスプランを目に見える形にするところまでいくのは本当に大変だと思った。私達の班では最初のテーマ設定の辺りでなかなか計画通りに進まず行き詰まったことも何度かあったが、その後の活動も新たに計画を立てそれらを実行するためにそれぞれがやるべきことをやることでなんとか最後までたどり着けたのだと思う。計画を実行することは簡単ではないが、今のことだけでなく未来のことまで考えながら何かを成し遂げることはとても大切だと学ぶことができた。

これからACTの活動に取り組む後輩には、自分たちの現状をしっかり見て何をしなきゃいけないのかどれくらい時間があるのかを考慮しながら一つ先のことを考えられる計画性と、それを行うためにそれぞれが動こうとする実行力を大切にしてほしいと思う。

私は、南高校で過ごした3年間の中でも、TRY&ACTの活動はとても貴重な時間だったと感じている。TRY&ACTの活動が始まった当初は、今に比べると世界への関心も少なく、どのような目的で活動を行っているのか理解することが難しかった。しかし、1年次と2年次に行ったTRY&ACTの活動を通して、世界へ目を向けることの大切さはもちろんのこと、色々な人の立場になって物事を考え、色々な角度から課題解決の糸口を探るなど、自分の視野を広げることができた。

1年次では、「異文化の人と一緒に仕事をするには」というテーマで1年間活動した。11月にはグループごとに、どのようなメンバーで、何の事業を行うかを決め、そこから分かったことをまとめて発表するポスターセッションを行った。私たちのグループでは「異文化の人と共にテーマパークを営業する」というテーマを基に活動した。進めていく中で、言語や宗教、価値観や常識など異文化の人とは全てが異なるので、解決しなければならない課題もたくさんあったが、それ以上に、異文化を理解する意義について気付かされたことがたくさんあった。1番強く思ったことは、「文化が違うということは欠点ではなく利点にもなり得る」ということだ。特にこのようなテーマで活動していると実感することが多かった。例えば、テーマパークには色々な国からお客さんが来るので、様々な文化の人と共におもてなしをすることで、日本人の視点だけでなく、様々な人の立場で物事を考え、世界中の人が楽しめるテーマパークを作ることができたり、異文化であればあるほど多種多様なアイデアが生まれたりするということだ。このように、この活動を通して、異文化であるということは、捉え方によってマイナスなものではなく、プラスのものになるということに気づくことができた。また、プラスに捉えるためにも異文化について理解し、尊敬する大切さを知ることができた。

2年次では、「東南アジアの課題を解決するためのビジネスプランを考える」というテーマで活動した。私たちのグループは、シンガポールでよく食べられている「ロティプラタ」と呼ばれる食べ物を日本にも広めることで、シンガポールという国自体にも興味を持ってもらおうというプランを立てた。最初は、どのような目的でどんな形式で売ることかということから相談しはじめ、最終的には自分たちでロティプラタを試作し、アレンジなどのメニューも考え、実際に日本で売るとしたらどうなるのかイメージを膨らませることができた。2年次の活動は1年次と比べ、設定できるテーマの幅が広がり、与えられた時間も長く、自由に活動できる分、自分たちの力で考えなければならないことがたくさんあった。そのため、1年間の活動を通して、自分たちの現状を理解し、先を見据えた計画を立てる大切さや、グループのメンバーやシンガポール海外研修でのB&Sの大学生と一緒に協力して課題に取り組む大切さを学んだ。計画を立てる際や発表の準備をする際にグループのメンバーで分担して協力しながら進めるのはもちろんのこと、シンガポール海外研修が終わった後もB&Sでお世話になった大学生と連絡を取り合い、アドバイスをもらいながら、無事に活動を終えることができた。

これらのように、2年間のTRY&ACTの活動ではたくさんのお話を学ぶことができた。様々な視点で物事を考える能力、計画力や協調性をこれからも養っていき、自分が生きていく中で生かして行きたいと思う。

私は、南高校の3年間で経験した様々な活動を通して、色々な面で成長したと感じる。中でも、TRY&ACTの活動は、国際理解と英語学習に対する向き合い方を変えてくれた貴重な体験だった。

私は、近年、グローバル化が目立ち始めているのにもかかわらず、TRY&ACTを行う前は、世界の課題についてあまり興味をもてなかった。英語についても同じように関心が薄く、将来使えるようになるためというよりは、テストで良い点数を取るために勉強するというような感じだった。しかし、2年間のTRY&ACTの中で、外国人の方と接したり、世界で活躍する日本人の方のお話を聞いたり、実際に海外に行ったりしたことで、今まで遠い場所の出来事のように感じていた世界の出来事が、本当は自分の身近に起こっているのだと気づき、段々と世界に向けて関心を持つようになった。そのため、世界をより良く理解するために英語をもっとしっかり学びたいと思うようにもなった。ここまで自分自身の心情に変

化があったことは自分でも驚きであり、また嬉しくもなった。今まで、海外でのボランティアやホームステイは主体的に参加したことはなかった。自分の英語力に自信がなかったし、海外というだけで不安になってしまい、避けていたからである。しかし、2年生の時のシンガポール研修旅行に行ったことで、現地の人とコミュニケーションをとったり、その土地の雰囲気を感じたり、英語が完璧でなくても、海外を訪れることで学ぶことはたくさんあるのだと気づいた。これからの大学生活の中では、海外でのボランティアやホームステイに参加する機会があると思うが、自分から積極的に行動に移していきたいと思う。

国際理解に対する向き合い方以外にも、TRY&ACTの活動ではグループのメンバーと協力する大切さを学んだ。私はこの力を部活動にも活用できたと思う。私はダンス部に所属しており、私達ダンス部は1つのパフォーマンスを完成させるにあたり、構成から振り付け、演出、衣装まで全て自分たちで決めるため、部活をしていく中でいくつもの課題にぶつかった。見に来てくれる人を楽しませるにはどうしたら良いか、部活の仲間とたくさん話し合いながら、より良いものを作ろうと努力することができた。技術の面でも、お互いにアドバイスをし合うことで、自分一人では気づけなかった所まで改善できるように努めた。TRY&ACTで得たことは日常生活の中にも活かすことができるということを知った。

TRY&ACTの2年間の活動から得ることは本当にたくさんあった。活動が始まった当初は、TRY&ACTを通してここまで自分が変われるとはおもってもみなかった。しかし、ここまで自分の意識を変えられたことはとても貴重な経験となった。大学に進学し、これからいろいろなことに挑戦する機会に巡り合うと思う。そんな時にTRY&ACTで学んだことを無駄にせず、しっかりと活かして、より良い結果につながるよう最大の努力をしたいと思う。

#### 生徒 F 2年時のまとめ

#### カンボジアの貧困層と日本の赤ちゃんを黄金のシルクが救う

私はGLP(グローバルリーダープロジェクト)に属し、東南アジアの課題を解決するビジネスプランを作成した。そのプランは、カンボジアの眠れる特産品「黄金のシルク」の「肌の保護機能」に着目し、カンボジアの貧困女性が、赤ちゃんの肌に優しい「黄金のシルク」のベビー服を作ることで、カンボジア女性が貧困から抜け出すことができる産業をカンボジアに作るとともに、日本の乳幼児の肌のトラブル防止に寄与する事業である。

この事業を思いついたきっかけは学校の授業で視聴したユニセフ作成のカンボジアの現状を伝える一本のビデオだ。SGH(スーパーグローバルハイスクール)である私たちの学校では、東南アジアの国が抱える問題の解決策を考える機会を与えられている。その調査の一環で見たのがこのビデオだった。動画の中で、生活に困ったおばあちゃんと10歳くらいの少女が、深夜に路上のごみをあさり、売れるものを探しているシーンがあった。私たちの日常とはかけ離れた異常な光景に私たちは大きな衝撃を受けた。高い経済成長率が続くカンボジアであるが、都心部であっても生活に必要な最低限度の収入を得ることが難しい人が一定割合存在する。これは首都プノンペンでも同様であり、ビデオのようなゴミあさりでも収入を得なければならない人が存在している。実際に深夜のゴミあさり等の危険な収益確保の手段を余儀なくされる者の大半が貧困世帯の子供や女性である。

私たちが提案する仕事は安定した収益手段になる必要がある。そこで私たちはカンボジアの女性にしかできない仕事を検討するためにSGHのプログラムを活用してカンボジアの特産品を現地調査した。そこで目を付けたのが、カンボジアの特産物「黄金のシルク(ゴールデンシルク)」だ。黄金のシルクは一般的なシルクと違い、肌の保護機能という非常に優れた機能を持つ。カンボジアでは内戦前まで盛んにこのシルクの生産が行われていたが、その後は低迷。今再びNGO団体などの支援によって再興してきている。現地で現物を見たところ、私たち日本人の感覚で非常に高級感を感じるものであり、ブランド化すればカンボジアを代表する大産業に成長する力を持つのではないかと考えた。

黄金のシルクは「肌の保護機能」に強みがありアトピー体質の乳幼児に特に有効な機能を持つ。また色が「黄金」であるため、乳幼児の衣類の課題である「黄ばみ」が目立ちにくく、長く使える特徴あり。また他の出産祝い品と異なり、手軽に社会貢献できる(買うだけで海外の貧困問題解決に貢献)強みがあり、商品自体に話題性もある点が強みである。

本製品素材となる黄金のシルクは、国内認知度が低く、手作りのため少量生産になる欠点があることから、集客力・ブランド力のある小売店で、「高級品」PRして販売することが望ましい。そこで、大手百

貨店に短期間スペースを借りて販売することを考えた。その後、顧客の認知度が高まった段階で、大手百貨店に卸売を行う、直営店舗の開設を行っていくつもりである。

以上の探究活動を通して学んだことは、根拠に基づいて仮説を立て、検証した上で進めていくことが何においても大切だということである。さらに自分の足で行う調査の大切さを学んだ。自分の目で見て調査した内容があると発表にも自信が持てる。また、大人の方と接する機会が多かったため、メールでのマナーや目上の方への接し方の面でも成長できた。

ひとつのことに長い時間をかけて取り組んでいくことにあたってはグループの必要性を感じた。4人いたから仕事を分担して進められたというのも大きかった。他のメンバーに頼りすぎてしまった部分もあったが、それぞれが得意なことを活かしながらうまく進めることができたと思う。

プレゼンテーションの技術についても学んだことがたくさんある。たとえば、1スライド1メッセージということや、プレゼンには種類があり、自分のいたいことよりも客が知りたい情報を盛り込むことも必要であるということだ。またSGH全国フォーラムでは、練習することの大切さを実感した。もともと英語に自信の無い私は外部の方の前で英語でのプレゼンテーションなんてとてもできないと決め付けている部分があった。しかし練習を重ねることで英語でも自信を持って語ることができた。逆に練習していなかった質疑応答はうまく回答できなかったが、良い経験になった。

先輩へアドバイスしたいことは、まずはきっかけとなる部分を大切にしながら丁寧に話を進めていくことである。私たちは「一番言いたいことは何か」「結局どんな課題を解決したいのか」というように、プランの軸がしっかりしていないという指摘を受けることが多かった。何か問題があると「じゃあこれは？」というように進めていくうちにはじめに考えていた目的から離れていってしまうこともあった。次のステップに移る度に、自分たちのプランの目的は何なのか」ということを確認しながら進めていくのが良いと思う。

実際に自分の足で調査に行ったり試したりすることも一度はしてほしい。インターネットの文献だけでまとめるよりも自分のやったことに自信が持てる。実際の会社に訪問したり連絡を取るなど大人の方とかかわることが多いと、度胸もつく。一方でそうしたときには、失礼の無いようにすることも大切である。

また第三者の意見を求めることも重要である。内容を分かっている自分たちだけで進めていると、話のつながりが弱くなったり論理が飛躍してしまうことがあると感じた。

生徒 F 3年時のまとめ

たくさんの経験

振り返ると高校3年間で様々なことを経験してきた。その中で私が特別だと思うことについて書こうと思う。まず、1年次に参加した国際大学（IUJ）への国内イマージョン研修とその後についてである。IUJにはアジアからの留学生が多く、そうした人たちも英語を母国語としないということを忘れてしまうくらい、とても流暢に英語を話すうえに日本語も上手だった。私はそこで、インドネシアからの留学生と連絡先を交換した。おそらくもう会うことはないと思っていたのだが、2年生の夏に私が横浜を案内するという形で再会した。自分でもよくそんな行動を起こせたなと感心している。事前に友達を連れてくることは聞いていたが、駅で会ってみると他にインドネシアとフィリピンの男性がいた。正直驚いたが、外国の人は友達を連れて行くといって20人くらい連れてくるという話を聞いたことがあったのでこれも異文化交流かなと思うことにした。そのころにはその留学生はIUJを卒業して、東京の金融会社に勤めていた。歩きながら日本でのことや自国のことなど色々な話をした。インドネシアの料理も作ってきてくれて、日本の企業で働く海外の方と会って話をするというとても貴重な時間だった。おそらく多くの国内イマージョン参加者はひとつの経験として終わってしまうのが普通だと思う。そのあとで再会するまでに至れたことは自分も少し勇気があったなと思うと同時に、その勇気を出してよかったと思う。相手が、今度会わないかといってくれたことがきっかけではあるので、そうした積極的な留学生にあられたことも運が良かったかもしれない。それでも、丸々一日も会話が続くだろうか、しっかり案内できるだろうかという不安もあるなかでそうした機会を自分で作れたことは自信にもなった。やると決めてしまえば、意外と何とかなるものだとも気づいたので、そうした勇気を持つこと、少しの不安で貴重なチャンスをつぶしてしまうことがないように心がけていきたい。

二つ目は GLP の活動である。私たちのグループでは、カンボジアの特産品であるゴールデンシルクを使ったベビー服をカンボジア女性に作ってもらい日本で販売するというビジネスプランを作成した。このテーマは私がもともとやりたいと思っていたものとは全く違うものであったが、だからこそ視野が広がった。カンボジアという国について調べることから始まり、ほんの数十年前の大量虐殺に衝撃を受けた。そして国際情勢や国際支援などにも関心を持つようになった。一見自分の興味の対象とは違うことも中へ入ってみると新たに得られるものがたくさんあり、視野を広げることができると感じた。プランを練るにあたっては、たくさんの方々に足を運びお話を伺った。取材申し入れから自分たちで行き、実際に働く大人の方々に話を伺ったことはとても良い経験だった。と同時に、大人というのは相手が高校生であってもきちんとお願いをすれば時間を取って対応してくださるのだということも感じた。GLP ではプレゼンテーションの機会が多くあり、2年生の7月に3年生の先輩の最後のプレゼンテーションを聞きに再び IUJ に行ったときは自分も来年ここで同じ事をするのかと思うと不安になり、GLP に入ったことを後悔した。SGH フォーラムでの英語のプレゼンテーションでは、グループの中でいちばん英語に自信の無かった私はたくさん練習をした。おかげで本番は原稿を持たずに、その分ジェスチャーも交えながら堂々と話すことができたと思う。練習をすればその分自信をもって臨むことができると身を持って体験できた。そして自分が3年生として臨んだ IUJ でのプレゼンテーションもしっかりとやり遂げることができた。しかし質疑応答では英語が得意な友達に頼ってしまい、言いたいことがあってもうまく英語で表現できないもどかしさを感じた。プレゼンテーションについての英語での質疑応答となると、日常の会話を楽しむことにはない難しさがある。これを克服することを大学での英語学習の目標としたい。

生徒 F 成長を自己分析

大切な価値観

プラン作成の過程においては自分の物の見方がいかに偏っていたかということを知ると同時に、新しい視点や大切な価値観をたくさん得ることができた。私たちはカンボジアの女性の人生における選択肢を増やすことを目標に掲げたビジネスプランを作成した。しかしこの目標は最初は違うもので、カンボジアの女性たちを貧困から救いたいというテーマだった。活動を進めて色々な方のお話を聞いていて印象に残ったのは、“上から目線になってはいけない”という言葉だ。貧しそうにみえて、日本人の私たちから見たらかわいそうになってしまうような状況で、本人たちは幸せに暮らしているかもしれない。何か支援をするプランや仕事を提案するなら、現地の人たちがやらせてほしいと手を挙げるようなものでないといけない。このお話を聞いて、自分たちが優位な状況、助ける手立てを提供してあげる立場であると勝手に思い込んでいたことを思い知らされ、恥ずかしくなった。

また付加価値をつけ、カンボジアならではの商品になるように工夫を凝らしていった。商品に入れるポップも、はじめはカンボジアの厳しい状況を伝えるものをつけようと話していたが、現地の人たちが誇りを持ってこのゴールデンシルクの肌着を作っていることを伝えられる内容に変更した。

この活動を通して差別化、付加価値といったビジネスについて学ぶこともできたし、それ以上に上記のような考え方ができるようになったことはとても大きかった。忙しく、大変なこともたくさんあったが、企業訪問や東京大学の講堂でのプレゼンテーションなど自分ひとりだったら絶対にできない経験をいくつもできたので、今ではやってよかったと思っている。そして、SGH という環境であったこと、様々な場面で活躍する方たちの講演を聴く機会を設けてくださった先生方、発表前の練習に付き合ってくれた友達にも感謝したい。

3年間でたくさんの貴重な体験をすることができた。授業だけでは得られない、自ら行動を起こすことの大切さ、プレゼンテーションの見せ方など多くのことを吸収できた。英語に対して抱いていた苦手意識も徐々に消えつつある。大学でも自分から英語を使う環境に身をおくことを意識して、言いたいことを伝えられないもどかしさを忘れないようにしながら、このことをモチベーションとしていきたい。また、大学では専門の学びが中心になるが、専門以外の分野についても興味をもって臨み、視野を狭めることがないようにしていこうと思う。そして、GLP の活動を通して得られた価値観を大切にして自分が社会に貢献できる道を探っていきたい。

### (3) 平成 30 年度卒業生（現大学 1 年生）の成長の記録

本校における 3 年間の SGH の取組を終え、大学で 1 年間学んだ既卒生徒が書いた「2 年生終了時のグループ研究のまとめ」→「成長を自己分析」を順に掲載する。SGH の取組を基に、さらに成長した 3 名の生徒の記録である。

#### 卒業生 A 2 年時のまとめ

#### 音声ガイド付きのごみ箱の設置

2 年次では 1 年次に比べて、より実践的な内容でビジネスプランを考えることができたと思う。東大 GOODS をはじめとした外部講師の土曜授業は、非常に専門性が高く自分たちの研究に取り込みやすい内容であったと思う。個人的には、「デザイン思考」の講座がよく印象に残っている。今までにないものを創造するということは、一筋縄ではいかず容易ではない。そのプロセスを論理的に考察する「デザイン思考」は、自分たちの研究を進める上で非常に役に立ったと感じている。

シンガポール研修旅行は、東南アジアの課題を現地で間近に把握することができるので、データ収集において非常に有効であった。11 月に最終発表会を控えていたので、可能であればもう少し早い時期に研修を実施して欲しかったが、実際の現状を詳しく発表に盛り込むことができたので、より内容の濃い発表に寄与できたのではないかと感じている。特に B&S では、現地の大学生と長時間かつ自由に交流できたので、非常に良い経験であったと思う。他国で学生だけの自由行動をおよそ 2 日間にわたって認められる活動は、他に類を見ないので、ぜひ今後も続けていただきたいと思う。また他の高校でも東南アジアに研修旅行（修学旅行）で訪問する高校はあまり見られないので、とても有意義な研修旅行になったと感じている。

自分のグループの研究は、「ベトナムに音声ガイド付きのごみ箱を設置する」という内容であった。ベトナムでは急速な工業化・近代化により、ゴミ処理設備およびシステムの構築が追いついていない状況であったため、ポイ捨てが多いという現状を踏まえて、研究の内容をまとめていった。普通のごみ箱を設置してもビジネス的に優位に立てないということから、デザイン思考に基づいて付加価値をつけていった。具体的には、音声でポイ捨てを防止する呼びかけ放送を行ったり、その放送機能で広告放送を行なって収入を確保したりといった機能である。「しゃべるごみ箱」と銘打って、街に親しみやすい工夫をこらした。ベトナムに海外研修に行ったメンバーにも情報収集を依頼し、より説得力のある発表に仕上げるよう努めた。発表のフィードバックからは、ごみ箱の親しみやすさや、広告収入というビジネス内容が主に評価されたが、制作予算や実際にベトナム市民における需要の把握がまだ不十分だったという課題が指摘された。

今までにないものを創造するということは非常に難しい。だからこそ、TRY&ACT の経験は非常に貴重なものであったと感じている。ぜひ今後も続けていただきたいカリキュラムであると思う。

#### 卒業生 A 大学 1 年生の終わりに自己分析

#### 大学でも活かせる TRY&ACT の研究内容

大学に入ってから、学部での学習内容とは合致しないこともあってか、TRY&ACT ほどの活発な授業および取り組みは受けていない。ビジネスプランを考えるという非常に実践的な活動を受けられたのは非常に貴重な機会であったと感じている。

大学では関連する授業として、南高校の TRY&ACT の助言者でもある芦澤美智子横浜市立大学准教授の「企業家に学ぶ」という講義を 1 年次前期に受講した。この講義では、実際に起業をされた人や、既存起業の幹部として経営に携わる、いわゆる「企業家」といわれる人が毎回ゲストとして講演を行うというものであり、起業の理由や経営理念、常日頃から心掛けていることなど、非常に興味深い内容を聴くことができた。南高校の TRY&ACT の活動は実践的であったものの、このように実際の企業家の話を聴く機会があまりなかったため、モチベーションアップのためにも、この講義のような講演会を行うとよりよい活動になると思う。また、どの講演者にも共通していたことは、極めて行動力があるということである。アイデアを思いついたら実践するというプロセスが、一見容易なもの、なかなかハードルは高い。その本気度の違いで、成功者とそうでない者に分かれるのではないかと感じた。その点、TRY&ACT を受け

た南高校の生徒は有利であると思う。特に「グローバル・リーダー・プロジェクト」を受講した生徒は、ビジネスグランプリに出場するなど、非常に実践的に活動を行っていたと思う。先日、令和元年度のSGH 研究発表会を訪問した時に各班の研究内容の一覧を見たが、どの班も目を引く興味深いビジネスプランであったと思う。グローバル・リーダー・プロジェクトを受講していない生徒でも、シンガポール研修をはじめとした他の高校にはない様々な機会に恵まれているので、ぜひ積極的にそのビジネスプランを実践して欲しいと思う。

TRY&ACT で研究した内容は、今の大学生活で活かされる場面があった。1年次に「多国籍の人とともに働くためには」というテーマで研究を行ったが、その際、言語に加えてジェスチャーを積極的に用いてコミュニケーションをとるべきだという結論を導いた。今の大学では様々な国からの留学生との交流も少なからずあり、その際ジェスチャーを積極的に取り入れたことで、スムーズにコミュニケーションを取ることができた。この経験は一例であるが、TRY&ACT の研究内容は社会で実際に活用でき、今考えれば非常に実践的な内容であったということが伺える。

まだ就職はしていないが、グローバル化が進む世の中で、将来の職場では多国籍の社員・職員であふれる環境になる可能性が高い。多様性を受容する環境をどうすれば構築できるか、まさに TRY&ACT で研究した内容である。将来でも、TRY&ACT で研究した内容が活かされる場面が多々ことを期待している。

卒業生 B 2年時のまとめ

日本とベトナムをつなぐサービス

私は Global Leader Project(以下 GLP)の班の一つとして、東南アジアの課題に対応したビジネスプランを作成してきた。特に私たちの班では、ベトナムの伝統産業従事者の生活向上を目指し、日本とベトナムをつなぐサービスの企画をした。このようなテーマを設定した理由としては、GLP でのベトナム研修旅行の事前学習や調査を通してベトナムの素晴らしい文化や、伝統産業従事者の生活状況の課題について知り、改善したいと考えたからである。

ベトナムは民族衣装のアオザイや刺繍絵をはじめとして、鮮やかで繊細な伝統工芸が数多くある。その技術は目を見張るものがあり、長い時間と手間のかかった作品も多い。しかし、その高い技術にも関わらず、現地での価格は非常に低い。制作に一ヶ月程度かかる刺繍絵が、現地の市場で750円という価格で売られているのが現状である。ベトナムの製造業一般工の平均月収は日本円で2万円であることから、月に刺繍絵を数十枚売らなければ生計を立てることが難しい一方で、平均所得が月2万円のベトナムでは750円の絵画を買う現地民は多くない。

そこで私たちは、ベトナム人よりも平均所得の高い、日本人を消費者としてターゲットにすれば良いと考えた。また、ベトナムの商品を日本で販売するため、日本国内で成功している「ふるさと納税」を参考にし、商品を受け取りながら税控除を受けられるようなサービスを提案しようと考えた。「ふるさと納税」では、他の地方自治体への納税によって所得税等が控除される制度が活用されているが、ベトナムなど海外を対象にすることはできない。しかし、それと同様の税控除の制度で NPO 団体への寄付によるものがあると知り、これを活用しようと思った。

具体的には、私たちの運営するウェブサイトを仲介役として、お金を消費者から NPO 法人、そして生産者へ送る。その際、消費者から NPO 団体へは寄付金として送金するため、取引後に消費者が税務署へ申請をすれば所得税の控除を受けられる。反対に生産者はお金を NPO 団体から受け取り次第消費者へ返礼品を送る。このようなシステムを作ることによって、ベトナムの生産者だけでなく、日本の消費者にも嬉しいサイクルができる。

このビジネスを企画するにあたり、様々なヒアリングや調査を行なった。例えば、南税務署に電話をして、NPO への寄付に対する税控除は返礼品の有無に関わらず有効であると確かめた。新潟の国際大学では留学生の方から「NPO は対象国に支店を持っている方が好ましい」というコメントを頂き、対象 NPO の候補をあげるための基準となった。夏季休業の間には実際にベトナムへ行き、現地の手工業の現場やそれが売られている市場等を訪れて、具体的な商品の現地価格や労働環境を視察した。ここで調べた商品とその値段を日本での価格設定と比較するため、8月には横浜で行われた「ベトナムフェスタ」で調査をした。

このような活動を通して企画力、論理的思考力、表現力など様々な力を身につけ、それらは東京大学での私の勉学に非常に役立っていると実感している。特にその能力は大学のある授業において顕著に発揮された。その授業というのが必修の ALESA(Active Learning of English for Students of the Arts)という、生徒が自由に決めたテーマについて研究し、論文を執筆する授業である。この授業では、その自由さゆえに「何について書けばいいのかわからない」「どのように調査を進めればいいのかわからない」と迷走してしまう学生が多数生じる。このような状況に陥ってしまうのは、過去に研究をした経験がないということが主な原因だと考えられる。しかし、私は高校時代に TRY&ACT や GLP において自らの力で考えて調査を進める機会をもらうことができたため、困惑の中で課題をこなすだけでなく、有意義な講義となった。

具体的にどのように T&A の経験が役立ったのか、段階ごとに説明する。まずテーマの設定の際には、自分が興味のある分野をブレインストーミングでできるだけ多く洗い出し、その中から研究に適したものを選別した。周囲に BS でアイデア出しを行なったことがない学生が多かった上、アイデア一つ一つの質にこだわるあまり作業がはかどっていない人が多かったため、総合的な活動の重要性を再確認した。

次に調査を行うにあたって、どのような要素が論文の結論を左右するのかを想定することが重要であった。想定範囲が狭すぎると考察が浅くなり、的外れで無関係な要素を含めると非論理的な文章になってしまうからである。これは T&A の企画でも提携団体を決めたり、商品の値段を設定したりするにあたり同様の作業を行なったことがあった。特に価格に関しては「現地/日本国内ではどの程度の相場で販売されているか」「どの程度の人が商品を購入するか」「ビジネスの持続のためにはどの程度の利益が必要か」など様々な視点から鑑みて決定した。このように物事を多面的に捉えて分析すべき要素を適切に選択する能力は、論文の構成を考え、研究の計画を立てる上で非常に役立った。

最後に、自分の研究結果を文章に起こしたり、プレゼンで発表したりする段階では、T&A で身につけた表現力を使って自分の考えを他者に伝えた。T&A では様々な立場の人に自分たちの企画についてその目的や調査結果、ビジョンを伝えて理解してもらうことが必要であった。その際に自分の言いたいことを簡潔に、ただし十分な情報量でまとめて、適切な言葉と構成で説明するように心がけた。そのような意識は口頭でプレゼンする上でも、論文として記す上でも、効果的な主張をする助けとなった。

以上のように、南高校での T&A は大学へ進学したのちの勉強にも役に立ち、大学生活をより身のあるものにしてくれていると感じる。その経験は大学卒業後の進路でも私の武器となってくれるだろうと思う。また、南高校で是非この活動を続けていただき、多くの生徒に T&A という貴重な体験を将来に役立てて欲しいと考えている。

私たちのグループではインドネシアの教育について「Reform Of Sense」というテーマで取り組んできた。そこで、インドネシアの教育水準を上げるための方法について模索した。

インドネシアの教育は地方と都市の教育水準に大きな差があり、教育の機会が均等では無かった。また、地方にはそもそも学校数が少なく施設も整っていなかった。進学率が低いのに対し学歴差別があった。それによって定職に着けず十分な収入が得られていなかった。またこの問題以前にどのような職業があり、どのような勉強をしなければならぬのか認知されていないことが分かった。さらに勉強が今日明日の食料に直結しないことから親が学校に行かせないという事実が浮かび上がった。それらを改善するために私の班では e ラーニングや学校を作るための財団、フェアトレード、キャリア教育プログラムを考えた。しかしすべてを行うことは経済的にも人員的にも不可能に近かったため、私たちが行うことができるキャリア教育プログラムの作成を最終的に提案した。知らなければ行動することができないので電氣を使わないでも使用できる紙媒体である本である。その本には職業についての説明を載せる。本であれ

ば何度でも読め、貸し借りも可能である。今回の方法では上記にあるように根本的な認知の部分だけが改善されただけなので、この取組だけでは完全に変わることができない。今後その次のステップとなるような取組を考えていけたらと思う。

インターネットや書籍ではインドネシアの教育状況を直接知ることが出来なかったため、東南アジアに範囲を広げてシンガポール研修旅行で大学やショッピングモール、路上でアンケートを取った。アンケート結果からわかったことは、将来就きたい職業は教員、医師、パン屋、サッカー選手、デザイナー、お笑い芸人など。夢をかなえるために必要なことは、専門学校に通うことや学校で勉強することだった。親から子供への気持ちとしては、子どもの望み通りに大学に行ってほしい。しかし、今回行ったアンケートはシンガポールでとったものであり、多民族国家といえどもなかなかインドネシアの方にお会いすることが出来なかったため、正確な調査とは言えない。だが、今回の活動を通して大きな成長につながった。自分が世界の現状をあまり把握していないことや、その問題点に対してどのように向き合うことが大切なのか再考させられた。社会に出てもこのことは必要不可欠だと思うのでこの姿勢を大切にしていきたい。

### 卒業生C 大学1年生の終わりに自己分析

### 大学生活や将来の基礎に

高校三年間、TRY&ACT を振り返ってみると自分の視野を広げるのに大いに役立ったと思う。高校一年生の時、新潟イマージョン研修に参加した。新潟イマージョン研修は1泊2日と短い期間であったが、色々な国から留学生が集まっており様々な話を聞く中で鼓舞され勉強に対する姿勢が変わった。また二年生の時にはシンガポール研修旅行で実際に英語で現地の人にアンケートを取った。そこで自分の英語でのコミュニケーション能力に自信が持てた。またシンガポールは多民族国家である為世界の縮図といえるが、世界の文化を自分の目で直接確かめられたと思う。このことはグローバル化が進んだ将来、仕事をしていくうえで欠かせないものになると思う。私は当初、自分の進路にはTRY&ACTの活動は必要ないと思っていたが、受験をしていく中でも、大学の講義を受けていく中でも、また大学生活をしていく中でも、逆に必要だと感じた。私が受験をする際、すべての学校において志望理由書、小論文、面接が課された。志望理由書を書くにあたって、TRY&ACTで見識を深めたあと自己評価をしたことは自分を客観的にみることができた。そして自分の特徴を理解し長所を長所として活かせる将来を思い描けた。小論文を書くにあたって日本から世界、世界から日本という双方向で今の日本の問題や世界の問題を立体的に捉える力を生かした。また、面接ではTRY&ACTで培ったプレゼンテーション力で自分の長所を経験を踏まえながら説明したり、自分が活動してきたことをアピールしたりすることができた。大学に入ってから実習を行って行く中で、高校一年生時に学んだ「多文化社会で協力して仕事をするためには」について、現場を目の当たりにして改めてチーム医療、ある意味多文化、患者さん、医師、看護師、薬剤師、技師など様々な人が集まって行われることの難しさを克服するのに活かせると思う。TRY&ACTを振り返って、総じて良かったと思う。高校生の時には価値が分からなかったことも、今では重要な経験だったと思う。後輩にはぜひ直接的に自分の将来に関係しなくても頑張って取り組んでほしい。

## 平成29年度入学生 教育課程表

教科	科目	標準 単位	1年		2年		3年		小計	
			中入	高入	中入	高入	中入	高入		
国語	国語総合 ※1	4	5	5					11~	
	国語表現	3				△	2			
	現代文B(☆)	4			2	B	2			
	古典B(☆)		4			2	A	4		
							△	2		
地理・歴史	世界史	世界史B ※1	4	4	4				7~	
		世界史発展 ※3					△	4		
		世界史探究 ※3					△	2		
	日本史	日本史B ※1	4			3				
		日本史発展 ※3					△	4		
		日本史探究 ※3					△	2		
	地理	地理B(☆)	4			△	2	△		2
公民	倫理 ※1	2			2				4~	
	倫理発展 ※3					△	2			
	政治・経済 ※1	2				2				
	政治・経済発展 ※3					△	2			
数学	数学Ⅰ(☆) ※1	3	2	3					12~	
	数学Ⅱ(☆)	4	1	1	3					
	数学Ⅲ(☆)	5			1	B	6			
	数学A(☆)	2	2	2						
	数学B(☆)	2	1		2					
	数学総合 ※3					B	6			
	数学応用A ※3					△	2			
	数学応用B ※3					△	2			
理科	物理基礎 ※1	2	2	2					7~	
	物理(☆)	4			△	2	△	4		
	物理応用 ※3						△	2		
	化学基礎 ※1	2			○	3				
	化学	4					△	4		
	化学応用 ※3						△	2		
	生物基礎 ※1	2	2	2						
	生物(☆)	4			△	2	△	4		
	生物探究 ※3				△	2				
	生物応用 ※3						△	2		
	地学基礎 ※1	2			○	3				
	地学	4					△	4		
	地学応用 ※3						△	2		
	生物・化学 ※3						△	2		
	生物・地学 ※3						△	2		
保健体育	体育 ※1	7-8	2	2	2	3			9~	
	保健 ※1	2	1	1	1					
	スポーツコミュニケーション ※3					△	2			

教科	科目	標準 単位	1年		2年		3年		小計	
			中入	高入	中入	高入	中入	高入		
芸術	音楽	音楽Ⅰ ※1	2	○	2				2~	
		音楽発展 ※3				△	2			
		音楽探究 ※3						△		2
		演奏法 ※3						△		2
	美術	美術Ⅰ ※1	2	○	2					
		美術発展 ※3				△	2			
		美術探究 ※3						△		2
	書道	絵画 ※3						△		2
		書道Ⅰ ※1	2	○	2					
		書道発展 ※3				△	2			
外国語	書道探究 ※3						△	2		
	英語	コミュニケーション英語Ⅰ(☆) ※1	3	1	3				17~	
		コミュニケーション英語Ⅱ(☆)	4	2		3	4			
		コミュニケーション英語Ⅲ(☆)	4			1		4		
		英語表現Ⅰ	2	2	2					
		英語表現Ⅱ(☆)	4			2	2	2		
		英語講読 ※3						△		2
英語表現研究 ※3							△	2		
家庭情報	家庭基礎 ※1	2			2			2~		
	フードデザイン ※2						△		2	
	家庭看護・福祉と保育 ※3						△		2	
情報	社会と情報 ※1	2	2	2				2~		
	情報の表現と管理 ※2						△		2	
	情報コンテンツ実習 ※2						△		2	
共通履修科目合計			29	26	11					
共通選択科目合計			2	3	8					
自由選択科目合計			0	2	4~					
総合的な学習の時間 (TRY&ACT)			1	1	1					
ロングホームルーム			1	1	1					
総計			33	33	25~					

### ☆分割履修

- 1年 ○のついた芸術Ⅰから1科目を選択する。
- 2年 ○のついた理科の科目(化学基礎・地学基礎)から1科目を選択する。  
△のついた科目から1科目[2単位]を選択する。
- 3年 文系・理系 選択 下の組み合わせの中から2科目 8単位 を選択する。
- 現代文B(4)、古典B(4)                      表Aの選択-文系
- 現代文B(2)、数学Ⅲ(6)                      表Bの選択-理系
- 現代文B(2)、数学総合(6)
- 自由選択 △のついた科目から4-12単位を選択する。
- ・各学年で、習熟度やコース別の学習をする科目もある。
- ・卒業時までには文部科学省が定める必修科目を履修し、総修得単位数が74単位以上でなければならない。(卒業単位として認められる学校設定科目は20単位までである。)
- ・選択科目は選択人数により成立しない場合がある。

※1-必修科目 理科は3科目、芸術は1科目選択

※2-主として専門学科で開講される科目                      ※3-学校設定科目

(☆)のついた科目は、複数の学年をまたがった分割履修科目である。

平成30年度・令和元年度入学生 教育課程表

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	小計
国語	国語総合 ※1	4	5			13~
	国語表現	3			△ 2	
	現代文B(☆)	4		2	B 2 A 4	
	古典B	4		4		
	古典発展 ※3				A 4 △ 4	
	古典探究 ※3				△ 2	
	世界史	世界史A ※1	2	2		
	世界史B	4		△ 4		
	世界史発展 ※3				△ 4	
日本史	日本史A ※1	2	2			
	日本史B	4		△ 4		
	日本史発展 ※3				△ 4	
地理	地理A	2		△ 2		2~
	地理B	4			△ 4	
	地理探究 ※3				△ 2	
現代社会 ※1	2	2				
倫理	2				△ 2	
倫政探究 ※3					△ 2	
政治・経済	2		△ 2	△ 2		
政治・経済発展 ※3					△ 4	
数学	数学Ⅰ ※1	3	3			12~
	数学Ⅱ(☆)	4	1	3		
	数学Ⅲ(☆)	5		1	B 6	
	数学A	2	2			
	数学B	2	2			
	数学総合 ※3				B 6	
	数学探究A ※3				△ 2	
	数学探究B ※3				△ 2	
理科	物理基礎 ※1	2	2			6~
	物理(☆)	4		△ 2	△ 4	
	物理応用 ※3				△ 2	
	化学基礎 ※1	2		○ 2		
	化学(☆)	4		△ 2	△ 4	
	化学応用 ※3				△ 2	
	化学探究 ※3				△ 2	
	生物基礎 ※1	2	2			
	生物(☆)	4		△ 2	△ 4	
	生物応用 ※3				△ 2	
	生物探究 ※3				△ 2	
	地学基礎 ※1	2		○ 2		
	地学	4			△ 4	
	地学応用 ※3				△ 2	
地学探究 ※3				△ 2		
保健体育	体育 ※1	7-8	2	2	3	9~
	保健 ※1	2	1	1		
	スポーツコミュニケーション ※3			△ 2		
	スポーツエキスパート ※3				△ 2	

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	小計
芸術	音楽Ⅰ ※1	2	○ 2			2~
	演奏研究 ※2				△ 2	
	音楽発展 ※3			△ 2		
	音楽研究 ※3				△ 2	
	美術Ⅰ ※1	2	○ 2			
	絵画 ※2				△ 2	
	美術発展 ※3			△ 2		
	美術研究 ※3				△ 2	
	書道Ⅰ ※1	2	○ 2			
	書道発展 ※3			△ 2		
書道研究 ※3				△ 2		
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ ※1	3	3			17~
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4		
	コミュニケーション英語Ⅲ	4			4	
	英語表現Ⅰ	2	2			
	英語表現Ⅱ(☆)	4		2	2	
	英語理解 ※2				△ 2	
	異文化理解 ※2			△ 2		
	英語応用 ※3				△ 2	
家庭	家庭基礎 ※1	2		2		2~
	ファッションデザイン ※2				△ 2	
	フードデザイン ※2				△ 2	
	家庭看護・福祉と保育 ※3				△ 2	
情報	社会と情報 ※1	2	2			2~
	情報の科学	2		△ 2		
	課題研究 ※2				△ 2	
	アルゴリズムとプログラム ※2			△ 2		
共通履修科目合計			29	25	9	
共通選択科目合計			2	2	8	
自由選択科目合計			0	4	6~	
総合的な学習の時間(TRY&ACT)			1	1	1	
ロングホームルーム			1	1	1	
総計			33	33	25~	

※1-必修科目 理科は3科目、芸術は1科目選択

※2-主として専門学科で開講される科目 ※3-学校設定科目

(☆)のついた科目は、複数の学年をまたがった分割履修科目である。

1年 ○のついた芸術Ⅰから1科目を選択する。

2年 ○のついた理科の科目(化学基礎・地学基礎)から1科目を選択する。  
△のついた科目から4単位分を選択する。

3年 国語・数学 選択 下の組み合わせのから2科目 8単位 を選択する。

現代文B(4)、古典発展(4) Aの選択

現代文B(2)、数学Ⅲ(6) Bの選択

現代文B(2)、数学総合(6) Bの選択

自由選択 △のついた科目から6~14単位を選択する。

・各学年で、習熟度やコース別の学習をする科目もある。

・卒業時まで文部科学省が定める必修科目を履修し、

総修得単位数が74単位以上でなければならない。

(卒業単位として認められる学校設定科目は20単位までである。)

・選択科目は選択人数により成立しない場合がある。

平成27年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書・第5年次

令和2年3月発行

発行者 横浜市立南高等学校

〒233-0011 神奈川県横浜市港南区東永谷2-1-1

TEL 045-822-1910 FAX 045-826-0818